New Album Now on sale

1. JULIA 2. Noizy Beat 3. Rendezvous 4. REAL IMITATION 5. 最初で最後のLOVE SONG 6. Dreamer
7. POOR BOY 8. たった一度のHONESTY 9. NO MERIT LOVE 10. ECSTASY 11. ぜったいに誰も

JBCJ-1005 / ¥3,000 (Including TAX) B-Gram RECORDS

LIVE ROCKIN' HIGH Vol.01
"Noizy Beat"

3.26(TUE) at福岡 博多 Drum Be-1
start 19:00 ¥3,090(tax included) information. ブレインズ 092-771-8121

4.4(THU) at横浜 CLUB24
start 19:00 ¥3,090(tax included) information. フリップサイド 03-3470-9999

4.6(SAT) at市川 CLUB GIO
start 19:00 ¥3,090(tax included) information. フリップサイド 03-3470-9999

4.13(SAT) at前橋 club FLEEZ
start 19:00 ¥3,090(tax included) information. フリップサイド宇都宮 028-633-1009

COVER ARTIST
X JAPAN

COVER PHOTOGRAPHER
MAKOTO KANEHARA

EDITORIAL DESIGN
HIROSHI SHIRAE
TOMOYUKI OHNISHI

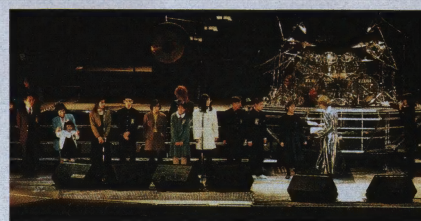
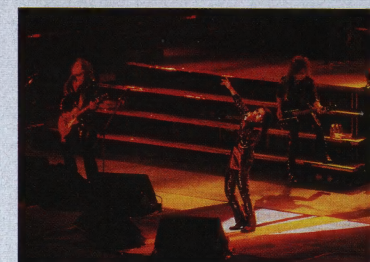
1996年3月1日発行(毎月1日発行)通巻第十九号
発行:株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 8F
PHONE:06-214-1751/FAX:06-214-1761
印刷・製本:株式会社大伸社
発行人:辻村和周　編集長:里居正裕

アーティストニュースを見よ。

本誌は、日本の音楽に焦点を当てていく音楽専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK ARTISTS NEWSを見てほしい。基本的に、ここでセレクトしたアーティストたちに注目していくつもりだ。このアーティストたちは、編集部が次の5つの条件を基に際限の無い論議を行い、独断と偏見のもとにセレクトしている。

1. ルーツ(ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている)
2. 実力(歌唱または演奏力がある。声に魅力がある)
3. クリエイティビティ(作詞・作曲能力に優れている)
4. パフォーマンス(カリスマ性がある。ライブパフォーマンス、ビジュアルがいい)
5. 生き様(芸能人、タレント化していない)

以上の5項目を有していれば、当然認められるべきで、そうしたアーティストを選出した。

X JAPAN PRESENTS KOBE RETURNS
December 24th 1995 at Osaka-Jyo Hall

1995年12月24日大阪城ホール X JAPAN PRESENTS KOBE RETURNS

美しい輝きと気高さ、何よりも硬い石(固い意志)というダイヤモンドと同じ魅力を秘めるYOSHIKI。彼の奏でるピアノの音色は、大阪城ホールを埋め尽くす約9千人のファンの観声を静めた。感情移入し鍵盤に指を落とす彼の姿を、瞬きさえ惜しむように見つめ、聴き入る場内。時折、甲高い声でYOSHIKIの名を叫ぶ良識をわきまえない女性ファンはいるものの、彼の指先から産み落とされる激しくも流麗な調べは、聴く者の胸の奥へと優しく届いていく。そして、それはいつしか「HOLLY NIGHT」の清閑なメロディーへと変わった。

12月24日、クリスマス・イブ。この大阪城ホールのライブは、現在展開中の4年ぶりとなる全国ツアー「DAHLIAツアー」の日程には含まれていない。聖なる夜に行われたコンサートは、「X JAPAN PRESENTS KOBE RE-TURNS」と銘打たれ、兵庫県教育委員会を通じて収益金を阪神・淡路大震災で被災した学校に、音楽教材用のピアノを贈ることを目的としたチャリティーコンサートなのである。

開演予定時刻を1時間40分押して、唐突に落とされた客電。一斉に沸き起こった大歓声の中、シンフォニックなSEが流れ、ステージに引かれた黒い幕の上をレーザー光線の描く模様が浮遊し始める。やがて場内の期待を一点に集めていた幕の中央がゆっくりと開き、ステージに立ちこめるスモークの中にメンバーの影が浮かび上がった。会場を揺るがすほどごう音のノイズとなった歓喜の声に埋もれ、かすかに聴こえてくる英語でメンバー紹介をする女性のナレーション。その声に合わせてレーザー光線も巨大なスピーカーの上にメンバー名をつづっているのだが、客席の意識は完全に始まりの瞬間を待つステージ上のメンバーに向けられているようだ。

ナレーションが最後に言った「Intoroducing X JAPAN」の「JAPAN」という言葉が何度もエコーを繰り返し、オープニングナンバーである「Rusty Nail」のイントロダクションのSEが流れ出す。そして、ステージから何本もの炎が噴き上がり、「オオサカー」と叫ぶTOSHIの声が場内に響き渡った。

初っぱなからハイテンションで繰り出されるノリのいいナンバーや、94年のドームで初めて披露された「SCARS ON MELODY」「DAHLIA」といった新しいナンバーに、沸き返る客席の興奮度はとどまることなく急激な上昇を続ける。

赤い髪で独特のエキセントリックな雰囲気を醸し出すHIDE。彼のギターアプローチは、アグレッシブにメロディアスにと多彩だ。さらに超個性的なボイスも、コーラスワークだけに留まらず「SCARS ON MELODY」ではTOSHIとのツインボーカルを聴かせた。一方、もう一人のギタリストPATAは、そんなインパクトの強いHIDEと対照的にクールなプレイヤーではあるが、確かなテクニックに裏付けられた余裕あるプレイによって、サウンドの中でHIDEと対等の存在感を持つ。また、寡黙なベーシストHEATHも、ステージ上でのアクションは小さいものの、指弾きやチョッパーからテクニカルなアプローチまで平然とこなし、〟哀〝と〟怒〝という二つの相反する表情を持ったサウンドのボトムをしっかりと支えている。

「世界一素敵なクリスマスのパーティーにしようぜー!」というTOSHIのMC後は、彼らの王道とも言えるドラマチックなスピードナンバーの代表曲「WEEK END」で客席をひと暴れさせ、各パートをフィーチャーしたソロタイムへ突入した。個性あふれるパフォーマンスが繰り広げられていく中、叙情的なYOSHIKIのピアノソロのクライマックスに、「ENDLESS RAIN」のイントロの美しい旋律が奏でられ、特大のミラーボールが作り出す幻想的な光の空間をこの壮大なバラードナンバーが制覇する。サビのリフレインでバックの演奏が鳴りやみ、ピアノの音色と客席の歌声だけが場内に響く。大合唱となった9千人の歌声を、両手を広げ全身で受け止めようとするTOSHI。この感動的な光景を前に、YOSHIKIも何か胸に迫るものがあったのだろうか、ずっと下を向いたままピアノを弾いている。しかし、本編ラストの「紅」では、そんなセンチな表情は消え、激しくタクトを振る指揮者のように全身全霊を込めた壮絶なドラミングで、客席のテンションを一気に爆発させた。

メンバーがサンタクロースにふんしステージに登場した2回目のアンコール。いくつもの大きな風船がアリーナに放たれたポップなR&Rナンバー「JOKER」でボルテージを最高潮にまで高め、TOSHIの「裸の付き合いしようぜー!」というMCでラストナンバー「X」を迎える。残ったエネルギーを爆発させる客席とステージ。頂点の一歩手前で会場に響いた「メリークリスマス」というHIDEの言葉に、両者の親密度はより強まったようだ。客席の至る所でYOSHIKIの激しいドラミングに合わせるようにヘッドバッキングを行うファンの髪がなびき、大阪城ホールの広い空間いっぱいに燃焼し切ったメンバーと、恍惚(こうこつ)としたファンから発せられた熱気が充満した。

これまでにもいろんなアーティストによって行われた阪神・淡路大震災関連の数々のチャリティーコンサート。参加者の好意によって寄せられた義援金は寄付されているのだが、実際どのように使われているのかは不明りょうである。ニュース番組の復興ドキュメンタリーなどによって、まだまだ不便な生活を送っている被災者の近況が伝えられると、本当に義援金が役立っているのか不安になってしまう。しかし、今夜のチャリティーコンサートでは、「被災した学校に音楽教材用のピアノを贈る」という目的を明確にし、ステージに寄贈する学校の代表生徒を招き、観客の目前で贈呈式が行われたのである。他のチャリティーコンサートを非難するわけではないが、集められた義援金の行き先まで見せたXジャパンのコンサートは、「ファンの好意を集めた」という強い責任感と、最後まで自分たちの手で目的を成し遂げるという姿勢が感じられ、いかにも彼らしく好感が持てた。今夜のコンサートを体験した者の胸には、音楽で得た感動だけでなく、自分たちもチャリティーに参加したという充実感も残ったことだろう。

[文・毛刈松佳　撮影・金原 誠、高木昭仁]

Play list

SE	AMTHYST
1	Rusty Nail
2	SADISTIC DESIRE
3	SCARS ON MELODY
4	DAHLIA
5	WEEK END
	～HEATH Solo
	～YOSHIKI DRUMS Solo
	～HIDE Solo
	～YOSHIKI PIANO Solo
6	ENDLESS RAIN
7	紅
encore	
	贈呈式
E1	Longing ～跡切れたmelody～
encore	
E2	JOKER
E3	X
SE	Tears

メンバーが去り、暗転したステージからの空気には先ほどまでの激しく熱いノリを見せた「WEEK END」の余韻がたっぷりと含まれていて、観客をざわめかせている。壮大なSEが神秘的にうねる広大な場内では、やっと会えた喜びなのか、「ひょっとしたらこのまま終わってしまうんじゃ…」などと不安にかられるのだろうか、常にどこかでメンバーの名を呼ぶ声が上がっていた。

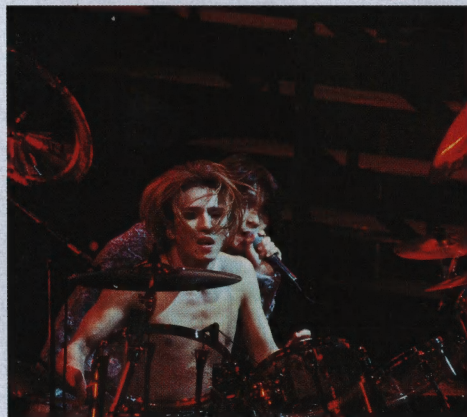
深いブルーのライトがともり、ステージが暗闇から解放されると、会場全体のテンションがぐっと上昇する。この高ぶりは叫びとして、だれも居ないステージにぶつけられたが、大音量で鳴り出したパイプオルガンの和音とぶつかり合い、何を叫んでいるのか聞き取れない。どこか不気味な香りのするパイプオルガンが「オペラ座の怪人」のフレーズを奏でる。これに同調して、2メートル程の高さのあるドラムライザー(ドラム台)の後ろから、せり上がってくる檻(おり)。その檻をとらえるスポットライトが緑、青、そして深紅へと変わった時、扉を蹴破ってHEATHが登場した。

これを合図にしてSEがドラム音に変わると、HEATHがベースを弾き始める。オープニングから5曲、初めてのツアー参加となる彼のプレイは、YOSHIKIのドラムと見事なコンビネーションを聴かせ、バンドのサウンドをしっかりと支えているという印象だったのだが…。今、階段を降りながら奏でられる彼のベースは、強烈なボディーブローをたたき込んでくる、ヘビーなグルーブだ。しかも、エフェクターを巧みに使い、ひずんだ音を幾重にも重ねたサウンドアプローチは鬼気迫るものがあり、会場中を自分の世界に引き込む。繰り出されるサウンドのすべてに彼の存在感と非凡なセンスが満ちあふれているのだ。ステージに降り立ったHEATHは、ノソリ、ノソリと、うろつきだした。

ステージ下手(左側)から中央に戻り、倒れ込んでプレイしていたHEATHが立ち上がる。上手へと向かおうとした時、スモークが吹き出し彼の足下を覆う。20歩ほど歩いたHEATHは、いきなりベースを床に打ちつけだした。断末魔の叫びを上げるベース。その残響音と、彼に向けて送られる歓声が交ざって、デンジャラスな空気が膨れ上がる。沸きかえる会場をぐるっと見渡し、満足げに階段を上がったHEATHが再び檻の中に戻るとその姿をスリリングな赤いライトがとらえ、HEATHの作り出した世界を広げようとする。そんな心地よい感覚に酔っていた僕の視界が突如真っ白にはじけ飛ぶ。大きな音と共に白い煙の柱が何本も吹き上がったのだ。「オペラ座の怪人」の流れる中、HEATHを乗せた檻が降りていった。

再びステージを暗闇が包み、場内には神秘的なSEが反響し合っている。先に行われた「DAHLIA TOUR」の初日の山形、そして次の札幌公演では、HEATHの次にHIDEのソロだったが、今夜はその知識をいい意味で裏切ってくれそうだ。ドラムセット付近で、ペンライトの小さな明かりがひらめいている。どうやら次に登場するのは…。

そろそろだ。時間を確認するとHEATHが去ってから10分が過ぎようとしていた。

SEがストリングスの切ない音色を聴かせ始め、強い光量を持つ一点のスポットライトが細いラインを描きながらステージ中央に落ちていく。その先にはドラムセットがあり、黒い布で目隠しをしたYOSHIKIの姿がある。浴びせられる歓声。ブルー、そして、赤の弱いライトがステージを彩りだすと、YOSHIKIは、それぞれの位置を確認するようにゆっくりとドラムに魂を注ぎ込む。軽やかに鳴り出したシンバル、強いアクセントを生みながらリズムを刻む

スネアとタム、場内の空気を揺らすバスドラ。YOSHIKIの放つビートは、単に速さや激しさといったリズムを形容する言葉では表現し切れない要素をはらむ。怒りと優しさ、そして切なさ、込められた感情がひしひしと伝わってきて、心を振動させているのだ。今や大阪城ホールに集まったオーディエンスの一人として、その

意識をここに向けていない者はないだろう。その、ドラムセットが突然浮上しながら、中空で回転し始めた。

昇っていくYOSHIKIをとらえようと、照らされたライトが彼を中心にして交差する。激しさを増すスティックワークと厚みを増してくるオーケストラサウンド。圧倒的な迫力で迫ってくるバスドラ、そして強烈なスピードのタムロールが気持ちを高ぶらせ、左右から放たれた数本のレーザー光線がそれをあおる。

いつしか、ビートがそのスピードを落とし、しっとりと響き始めると、観客は息をのんでそのサウンドに聴き入っている。なんだか胸が痛い。ドラムセットに集中する幾本ものライトが青白くなった時、力尽きたYOSHIKIはイスから崩れ落ちる。悲鳴と声援が飛び交う場内には「Say Anything」を奏でるオーケストラサウンドが鳴り響いていた。

ドラムライザーが空中で、斜め前へとスライドする中、YOSHIKIがおもむろに起き上がる。倒れている間もファンの声は届いたのだろうか。目隠しを外したYOSHIKIはちらっと客席に視線を向ける。そして、下降を始めるドラムセットの上でさらに熱く、激しい、ビートを放つ。セットが定位置に戻るまでずっと。

赤、青…　打ち出されるリズムに合わせて色を変えていたライトが最後に真っ白になり、ドラムセットを包む。わき起こる歓声と拍手に応え立ち上がるが、YOSHIKIはふらふら。それでも自分の足でステージ袖まで歩く。たどり着いたYOSHIKIが崩れるように倒れ込みスタッフに抱えられる。またも声援が飛ぶが、それは悲鳴ではなく「この胸の高ぶりをYOSHIKIへ伝えたい」という満ち足りたものだ。

YOSHIKIが去った後も、その存在は大きい。これまで以上のざわめきを会場に残している。だが、代わりに流れて来たピアノの響きと深くひずんだ声が世界をガラッと入れ替え、場内に滞っていた空気をうまく断ち切った。

淡い薄紫のライトが、ぼんやり染め上げているステージにピンクのテディベアが映し出される。スピーカーから聴こえていた、もの悲しくも不気味なメロディーが、「HOLLY NIGHT」に変わり、その声の主が、全身網タイツ姿のダンサー2人を引き連れて登場する。チューブをあしらったサイバーな衣装に赤い髪。HIDEだ。うれしいクリスマスプレゼントにわき返る客席。ここでもう一人、上下白のスーツを来たPATAがステージに姿を現し、「CELEBRATION」のイントロをフィーリングたっぷりのギターで披露する。歌詞の節々に"ジングルベル""大阪"などの単語を織り交ぜながら、拡声器を持ち出して歌うHIDE。ピンク、グリーン、イエローと鮮やかな色のライトが彩るステージ上の4人は、それぞれ動き回ったり、絡んだり、スピーディーなパフォーマンスを魅せる。そのきらびやかなステージングはラスベガスのショーを観ているかのよう。

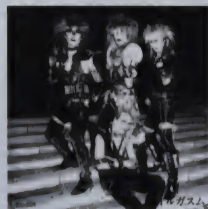
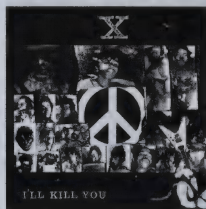
ソロアルバムをリリースしているHIDEだけに、「CELEBRATION」というXの曲をソロタイムでやる、その選曲をいささか意外に思ったりもしたのだが、観てみれば納得。Xジャパンでの時とは明らかに違う、このノリはHIDEならではの世界だ。こういったアプローチで個性を見せつけられる。それもソロタイムの楽しみというわけだ。

プロコル・ハルムの「青い影」が流れ出した会場では、HEATH、YOSHIKI、HIDEのそれぞれの世界をたん能したファンが座り込む。しばしの休憩だ。だが、それもほんの一瞬。BGMからオーケストラのSEに代わり、ピンク、赤、ブルーの淡い光がステージを染めると、燃え尽きたかに見えた観客もバネ仕掛けの人形のように飛び上がり、ステージに意識を傾け始める。

一段階ボリュームが上がったオーケストラの響きに誘われるかのように、上下共シルバーの衣装をまとったYOSHIKIが、スポットを浴びて登場。一度、客席を見渡してから、ゆっくりとした足どりで、ドラムセットの横に設置されているクリスタルグランドピアノの前に進む。ステージを優しく染める淡いブルーの光。もう一度客席に目をやってからYOSHIKIは鍵盤に指を乗せる。ゆっくりとした繊細な調べが流れると静まりかえるオーディエンス。

聴くものの心を洗うような流麗な響きが、時に激しく起伏し、次第に優しさを帯びていくと、「HOLLY NIGHT」のフレーズに変わっていく。一度手を止めるYOSHIKI。客席から割れんばかりの拍手と歓声。そんなざわめきの中、ピアノが耳慣れたフレーズを聴かせ始める。「ENDRESS RAIN」。いつのまにかステージ中央にTOSHIの姿があり、彼はゆっくりと歌い始めた。

［文・大西智之］

Photo:Makoto Kanehara

collection X JAPAN

文·青木美紀
TEXT by Miki Aoki

Jロックシーンはどんどん多様化が進み、様々なジャンルを巻き込みながら、音楽的にも興味深いサウンドを聴かせるグループの活躍が目立っている。何かと活気づいていて、人気バンドを次々生み出している世間一般から『ビジュアル系』と呼ばれている一派だが、彼らはどうだろうか？　そんな関心もあって、今回はこの一派の中核的存在、Xジャパンの『音楽』を検証してみたいと思う。彼らについて知識の少ない私にとっては、Xジャパンの音楽性も魅力も何もかもがX（＝未知数）。どんな感性を聴かせているのか、ファン的な雑念を一切耳に入れることなく、心を真っ白にして、彼らの音の世界へ飛び込んで行くことにしよう。

〈バンド・ヒストリー〉

Xジャパンの源流は、78年ごろ既に存在していた。YOSHIKI（Ds、P）とTOSHI（Vo）という二つの才能が出会う運命は、神様によってあらかじめプログラムされていたのかもしれない。幼なじみの2人は中学生時代にXの母体となるバンドを結成。ハードロックをレパートリーとし、校内イベントに出演したり、地元の千葉県館山で自主コンサートを開いて活動していた。82年にはようやく「X」を名乗り、オリジナル曲をプレイし始める。まだ高校生だった彼らは、学祭ライブやバンドコンテストへのエントリーを中心とした地道な活動を行っていたという。高校を卒業した84年、音楽で生きて行く決心を固め、Xの活動拠点を東京へ移すために上京。YOSHIKIは音楽大学への推薦入学を捨てて、バンドにすべてをかけたのである。翌85年から、Xは本格的に始動し、ライブハウスを荒らしまくる。一方、度が過ぎてライブハウスに出入り禁止となることもしばしば。メンバーチェンジが激しく不安定要素も多かったが、インディーズレーベルからシングル2枚、アルバム1枚をリリース。機動力あふれる活動でファンを確実に増やし、プロをも脅かす勢いでバンドは成長を続けた。このころようやくメンバーが固定し、HIDE（G）、PATA（G）、TAIJI（B）を含めた5人編成となる。レコード会社のオーディションに入賞したことをキッカケに、88年夏にプロ契約を交わす。89年春、ファン待望のメジャーデビューを果たし、アルバムはいずれも好セールスを記録する。ライブ会場をホールに移してからも彼らの快進撃は続き、90年2月には初めての武道館ライブも大成功。92年にはレコード会社を移籍、バンド名をXジャパンと改名。海外進出への一歩を踏み出し、外国のビッグアーティスト達と共演するなど活動の幅も広がった。同じころベーシストが脱退、HEATHが迎えられ、現在に至っている。今年は発売が待たれていたニューアルバムもようやくお目みえしそうで、話題を振りまいてくれることは間違いない。

〈アルバム＆シングル・ヒストリー〉

1stシングル「I'LL KILL YOU」（85年6月）は、自主制作でリリースされた。Xならではの過激な高速メタルナンバーが聴ける。彼らの迫力と勢いがとても演奏に表れているが、サウンド的にも音楽的にも未熟な点が多く消化不良気味。しかし音楽的な模索（インド音階風のギターソロやSEの使用など）も見え、当時のありのままのXを感じることができる。また2ndシングル「オルガスム」（86年4月）は、自らのレーベル、エクスタシー・レコードを設立しリリース。メジャー1stアルバムでリメイクされた、「X」が収録されている。TV番組「元気が出るテレビ」に出演、奇抜なルックスでお茶の間をあっと言わせ知名度を上げたのもこのころ。多くの人の耳に触れる事を意識してか、演奏力やアレンジ力が格段にアップ、けっして人気にあぐらをかかないバンドの姿勢がうかがえた。この2枚のシングルは、現在では入手困難で貴重な音源だ。

メジャーからのオファーを振り切り、インディーズにこだわって発表された『VANISHING VISION』（88年4月）はインディーズシーンを揺るがせた記念碑的作品。重厚で激しいサウンドは一貫しているが、ピアノを使用したり、曲中の展開に静と動を組み合わせるなど、繊細さも見え隠れする。ギターフレーズの動きやコードの重ね方、そしてベートーベンの名曲「月光」をモチーフにしたM-⑦「ALIVE」などに、クラシックの影響も濃い。1stシングルからのリメイク「I'LL KILL YOU」、メジャーデビューシングルとなった「紅」が英語バージョンで収録され、Xの過去〜未来が見渡せる1枚。CDで再リリースされ、インディーズアルバムの売り上げナンバーワンを誇る50万枚を超えるセールスを記録、現在も更新中だ。

堂々とメジャーシーンへ乗り込んで発表した1st『BLUE BLOOD』（89年4月）は、インディーズではおそらく出来なかったぜいたくな音楽表現に果敢に挑んだアルバムだ。オーケストラとの共演でサウンドの深みを追求してみたり、軽めのリズムでポップ寄りに仕上げられた曲、グッと心を引き付けるバラード曲などに表現の幅の広がりを感じた。メンバー全員の共作によるM-④「EASY FIGHT RAMBLING」はシャッフルの跳ねたリズムとウォーキングベースがカギを握るR&R、人間の精神世界を音楽に置き換えたようなM-⑧「XCLAMATION」なども新境地のサウンドだ。私の耳は、もう完全に彼らのペースに巻き込まれている…。

L.A.レコーディングの2ndアルバム『ジェラシー』（91年7月）はメンバー一人ひとりの作詞・作曲の個性が生かされ、バラエティーに富んだ内容で聴き応え十分。ヘビーメタルというカテゴリーに縛られずに、ますますジャンルの壁を破壊して聴き手を挑発す

collection X JAPAN

る。アクティブでポップ色の濃いR&RはHIDEの得意分野のようだし、ギターの速弾きがウリのPATAはアコースティックギターのインストで意外な一面を見せてくれた。またTAIJIのセンスも絶対聴き逃せない。ソウルフルなコーラスがカッコよく洋楽に肉迫したM-④「Desperate Angel」や、70年代ロックのアンプラグド・サウンドをイメージさせる曲は秀逸。

Xジャパンとなり、レコード会社移籍後に発表した3rdアルバム『ART OF LIFE』（93年8月）は彼らの大作指向を裏付ける1曲30分の超大作。そしてXジャパン独自のオリジナリティーあふれるサウンドの集大成だ。YOSHIKI自身の半生を描いた作品と言うが、だれの人生にも当てはまるだろう。現在という一瞬を生きる人の姿ははかなくも美しいものだと、曲を通して気付かされる。エンディングは予想を裏切りカットアウトしてしまうが、それは残像のように、心の中で曲の続きを響かせるための計らいだと感じられる。その先は聴き手それぞれが自分自身の「ART OF LIFE」を育てていくために…。

それではシングルにも目を向けていこう。ベストアルバム『X Singles』（93年11月）は移籍前の彼らのシングルすべてを発売順に振り返ることができ、1枚1枚そろえるよりお手軽。1stアルバムとはバージョンの違うM-⑤「WEEK END」やアルバム未収録曲M-⑨「Standing Sex」もまとめて楽しめる。移籍後の第一弾シングルは「Tears」（93年11月）。この曲はYOSHIKIが92年のNHK紅白歌合戦のテーマソングとして書き下ろした「Tears 〜大地を濡らして〜」のXジャパン・バージョンである。そして第2弾はオリコン初登場1位に輝いた「Rusty Nail」（94年7月）。続いて94年の東京ドームで無料配布されたデモテープに収録されていた「Longing 〜跡切れたmelody〜」（95年8月）をリリース。最新シングル「Longing 〜切望の夜〜」（95年12月）は、先行発売された「Longing 〜跡切れたmelody〜」のオーケストラバージョンで、途中にYOSHIKIの英語詞の朗読が入っていることでも話題を呼んだ全編15分を超えるナンバーである。彼らのシングルには、激しく牙をむくナンバーより、美しく分かりやすいメロディーを生かしたスケール感のあるバラードが多く選ばれており、そのせいか彼らのバラード曲ファンも多いと聞く。

唯一のライブアルバム『破滅に向かって（CD EDITION）』（95年1月）は、92年1月7日に行われた東京ドームでの3デイズ最終日の模様が収録されている。元々はビデオソフトだった音源だが、映像がなくてもメンバーの気迫や会場内の熱気が充分伝わって来る。また最後の「ENDLESS RAIN」で5万人のオーディエンスとステージ上のメンバーが歌によって盛り上がり、一体となる様子には正直言って感動した。TOSHIのMC、「瞬間の美学」という言葉に象徴されたパフォーマンスがまるごと詰まった本物のライブアルバムだ。

〈Xジャパンアナライズ〉

最後にXジャパンの魅力について二つ三つ。彼らの歌によく出てくる言葉に、「血」「薔薇（ばら）」「傷」「凶気（叫気）」があるが、これを深読みしてみると大きなテーマにぶつかる。血は生きている事、薔薇はナルシズム、傷は人間の弱さ、そして凶気はだれもが持っている過激な感情の一面を表していて、社会に押しつぶされそうな人間を、音楽を通して引き上げてくれているように思えるのだが…。アルバム『ART OF LIFE』は、その象徴と言える作品ではないだろうか。凶気と安静が入り組んだ、まさに人間の感情の起伏が彼ら流の言葉で描かれている。「破滅的」な切り口が、不透明な世の中の雰囲気にマッチして共感を呼ぶのかも知れない。また、彼らは「ビジュアルを越えた音楽性」をちゃんと備えている。バンドの重要な存在となっているYOSHIKIにスポットが当たりがちだが、実はメンバーの一人ひとりが強い個性とテクニックを持ったフロントマン。それぞれの音楽性が絶妙なバランスでブレンドされた結晶こそがXジャパン・サウンドなのだ。そして、その音楽、ビジュアル面を楽しむ事はもちろん、肉体・精神力の限界に挑むかのような手抜きの一切ない、気迫のプレイを聴かせてくれるライブにこそ大きな魅力が隠されている。しかし、気になるのは、体力の限りを尽くしメンバーが倒れてしまうほどの〝究極の表現〟を繰り返して、本当の「破滅」が訪れることはないのかということ。Xジャパンには、そんなリスクをどこかへ吹き飛ばして、Jロックシーンのためにも、まだまだ輝かしい軌跡を歩んでいってもらわないと…。

INTERVIEW

TAKURO and JIRO

GLAY

　グレイはニューアルバム『BEAT out!』について、それこそ数え切れないほどの雑誌にパワー全開でしゃべり倒している。この全開ぶりはどうも普通ではない。「ほんとにいつになくすごい剣幕でしゃべっていますよ。インタビュアーの方の向こう側にいる読者の人たちに分かってもらうためと言うより、まずは、自分の前に座っているその人に分かってもらうために必死になってるんです」（TAKURO）。インタビュアーに分からん奴が多すぎるのか、そこまでやるにふさわしい作品を作り上げたという自負が彼らにあるのか。それともその両方なのか…。グレイの記事をすべて読破して判断するのもいいだろうが、とりあえずアルバム『BEAT out!』がバンドにとってどんな作品なのかということは、その暴れ回るグレイ・サウンドを聴けば何の苦労もなく理解できるはずだ。

　ニューアルバム作りに向かったバンドの精神状態、ライブの思い出から初のホールツアーへの意気込みまで。僕は、マスコミ向けに誇張して飾り立てた言葉を話さないTAKUROとJIROとのライブな会話から、グレイを今まで以上に理解できたと思っている。このページを読むあなたにも同じ感覚が伝われば、2人が全開でしゃべってくれた甲斐があるのだが…。

「音楽ってこんなに楽しいんだ」って心の中でかみしめた

●ニューアルバム『BEAT out!』のジャケットは、えらくシンプルだよね。

JIRO（B、以下J）：いろいろ案が出て、もう面倒くさいということでこれになったんです。音が良いのは自分たちでも分かってるし、最初、写真を全面的に使いたいって話もあったんだけど、音的には原点に戻った気持ちで楽しくやってる作品なんで、ジャケットもシンプルでいいからっていうことでそうなったんです。

●最近チャラチャラと派手なジャケットが多いんで、シンプルだからその中で逆に目立つような気もする。

J：それも考えました。逆にこっちの方がインパクトがあるだろうなって。

●ビートルズのホワイトアルバムみたいな雰囲気もあるし（笑）。

TAKURO（G、以下T）：ビートルズのそれは一瞬、頭をよぎりましたけど（笑）。カッコいいからいいかと思って。

●音を聴かせてもらうとグレイらしいメロディーを大事にしたナンバーが目白押しっていう気がするけど、全編にわたって音が重くなったとか、いい意味で〝やかましいな〟っていう印象があった（笑）。その辺りは意図したものだった？

T：そうですね。メンバーの間では、最初ただひと言「もっとヘビーなものにしたい」とか、それこそラフなままでパッケージしちゃうような柔軟さは持ちたいねっていう話をしただけなんです。95年っていう年自体がものすごく構造的に複雑になってきていろんな事態が起きたりしてて。それを考えるとやっぱりその反動もあるし。今こういったざらざらした音になったのは、自然な流れだったなって気がしますけど。

●今回のアルバムでのそれぞれの目標はどんな所にあった？

T：俺の欲している音がとてもヘビーなものので。もう他の人に遠慮はなかったですね。以前だったら俺は軽くてクリーンな音で、HISASHIはヘビーな低音弦を強調したものっていう役割分担があったんですけど、今回はとりあえずそれはなしで、自分が欲している音を全部入れちゃうっていう作業をしました。だから、自分の頭で鳴っている音がHISASHIの音色に合おうが合うまいが、ぶつかろうがぶつかるまいが、とりあえず先に入れた者勝ちっていう（笑）。でも、HISASHIも後からその上にさらに入れて来ましたけどね（笑）。

J：僕はかっちり作りたくないっていうのがありましたね。レコーディングもそうだしライブもそうなんですけど、その場でしか浮かんでこないニュアンスを大切にしたくて。よりライブに近づけたかったっていうのが一番でした。レコーディングって時間をかけて、直せば直すだけ良いものが出来るのは分かってるんですよ。だけど、そういうレコーディングの仕方はしたくなかったんですよね。

●アルバムのオープニングを聴いても、前作のすごくドラマチックなオープニングから、今回はやかましいギターの音がガツンとくるようなスタートになって、第一声から「前とは違うんだぞ」って大声で言ってるなって感じたよ。

T：そうですね。今になって思うとそういう解釈が出来ますかね。やってる最中は、ようするに「バンドっていうのは、こんなに面白いんだよ」だとか「音楽ってこんなにワクワクするもんなんだよ」っていうことを、外に向けて言うんじゃなくて自分たちの心の中でかみしめていることが、すごくうれしくてね。今まで俺は、曲を作ったりすることが仕事だとかって言ってきたんですけど、あの瞬間は高校生に戻ってたなって。HISASHIも似たようなことを言ってて、高校時代にバンドをやってたような、練習に行くのが楽しかった時の気持ちがよみがえってきたって。

●2ndアルバムでそこに気づけたっていうのは、すごくラッキーだよね。

J：ドラムなんですよ、やっぱり。なかなかドラマーを見つけられずにずっときてて。ツアーとレコーディングを一緒に出来るドラマーがいいなっていう希望をかなえてくれる、永井さんと出会ったから。一緒にライブをしてる最中に思ったんですけど、これだったら本当に正式なドラマーはいらなくて、ただ5人で音を出して楽しけりゃいいんだっていう結論に達して。

●そういうことを気づかずにスタジオに入るたびに落ち込んで落ち込んで、結局音楽に対する熱意がなくなってしまう人って結構いるみたいだからね。

T：バンドってやっぱり、どの曲をやろうが楽しくないとっていうか、スリルがないとね。それは本当にラッキーだったのかもしれませんね。

リアリティーのない詞がものすごく滑稽に思えた

●ギターの話を聞きたいんだけど、2人のコンビネーションからなるユニークなギタ

インタビュアー・西原 朗　撮影・浅野順子

INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA PHOTO by JUNKO ASANO

ーのバッキングが演奏面でのバンドの大事な個性だなって思ってたんだけど、今回はその辺りにいろんな新しいアイデアが聴こえて興味深いよね。もうそろそろ2人が目指すギターのコンビネーションの形はある程度完成した？

T：どうでしょうねえ。レコーディングでブースに2人しかいなくて…。佐久間さんも席を外してて、アシスタント・エンジニアと、俺とHISASHIだけでやってたんですけど、「俺がこう行くから、こうこない？」とか、「後はカッコ良くしてくれ」って言われて「よし、分かった」って弾いて、「そうそう、やっぱりこれだよね」っていう会話があったり。2人の目指すギタリスト像はたぶん違うと思うんだけど、カッコいいと思うものは一緒だなっていうのが、今回すごくよく分かりましたね。

●そんな状況だったら、音を入れすぎて行きすぎたりしない？

T：最終的に音をミックスするマイケル・ツマイリングが、いろんな音が入ってる中から彼自身の感性で「これは今回、生かそうよ」「これはダメだね」っていうような作業をするんですけど、それに対しては、俺たちは何も言わないんですよ。〝あっ、そうか。俺の入れたフレーズはダメだったんだ。じゃあ、次頑張ろう〟っていう。

●謙虚な姿勢（笑）。

T：だって「俺のギターのボリュームを上げろ」なんてカッコ悪いじゃないですか。「じゃあ、もっといいのを弾けよ」って（笑）。「すみません」って（笑）。そうなっちゃいますよね。だからその辺はあまりエゴイスティックではない。

●でも、オーバーダビングする時っていうのは一回一回アイデアを絞って、必死でやってるわけじゃない…。

T：「結果が出ない努力っていうのは、全部ムダだ」って俺のすごく信頼してる友人が言ってたんです。仕事なんかもそうなんですけど、いくら努力してても結果を出せなかったら、端から見たら努力してないのと同じっていう風に言うんですよね。それはすごく極端な考え方だと思ったんだけど、も、ある場面においては非常に自分を奮い立たせる有効な考え方だなって思ってて、全く否定する気にはなれなかったんですけど、それと一緒ですね。だから、いくら「いいんだよ」って言い張ったところでグレイのバランス感覚としては、信頼してるメンバーがいいと言わないとダメっていう。それは、他の何千人というファンや友人たちがアウトテイクを聴いて「これ良かったのに」っていうのとは、またわけが違うから。

●でも、自分の弾いたのが、結局採用されなかったらしょんぼりはするでしょ？

T：しますよ。それこそ5時間も6時間もかけて重ねた十何本かの俺のギター・オーケストレーションが一切なかった時は、「うひゃ〜」とか思いましたけど（笑）。

J：TAKUROくんがHISASHIに、「あそこのギターって聴こえるかな」って聞いたら、「聴こえるよ」って（笑）。

T：「俺のコンポじゃ聴こえないけど」って言ったら、「安モノだからだよ」とか。そうやってごまかされちゃって（笑）。それは彼の一つのフォローだったりするわけで（笑）。

●それが彼の優しさだった（笑）。

T：今となってはよく分かりませんが（笑）。でも、不思議なもので実際聴こえてなくてもその存在感ってあるし、その後ろにある厚みっていうものは変わってきます。こういうのは前回のアルバムにはなかったですね。あの時は弾いたものは全部出てたから。

●少し詞の話もしよう。今回のアルバムの詞は、前作に比べてより情景が見えてくるような印象を持ったと同時に、表現したいことがあるから作ったんだみたいな衝動が強く感じられるんだけど。

T：フラフラした歌を歌うことにすごく嫌悪感がありました。自分のプライベートもそうだったし、日本全体を覆うこの黒い雲だとか、イヤなニュースがあふれる中で何の問題提起もないラブソングを聴いていくことに耐えられなくなったってことですかね。「生きてく強さ」も、横文字のカッコいい題名にすることに、なんかイライラしてて。グレイのイメージもあっただろうけど、なんでそんなものに縛られなきゃいけないんだろうなって思って、まず自分からぶっ壊していかなきゃって考えたんです。小説よりも不思議なことが身の回りでガンガン起こってるのに、それを無視することは出来なかった。身近でも、俺の知り合いの人がサリン事件に巻き込まれて入院しちゃったとかありましたから。そこで「君が好きだ」とか、やれ「海を見に行った」とかいうリアリティーのない詞が、ものすごく滑稽（こっけい）に思えた。

●「生きてく強さ」の詞の内容には、とにかく今これが言いたいんだっていうストレートな感情が感じられたし…。あの詞に対する読者の反響も、「力づけられた」みたいなものが圧倒的に多いよ。

T：ある雑誌で〝グレイの好きな曲〟っていう読者投票によるランキングをやったんですけど、その中で「生きてく強さ」が1位だったんですね。俺はまた「ずっと2人で…」辺りが1位になるのかなって思ってたんですよ。グレイに少しでも関わることによって、それぞれに今自分を取り巻いている状況を考えるきっかけになったんだなって思うと、ちょっと複雑な思いでしたね。こんなこと言っちゃなんですけど、やっぱりみんなもホントにちゃんと考えてるんだなって。何も考えないで好き好きって言ってるだけじゃないんだなって、すごく頼もしく思えました。

●ああいうことって今だからこそ歌ってほしいけど、悲しいことに斜に構えて「ダサい」のひと言で片付けてしまう人も多いね。

T：カッコいいとか、ダサイっていう、もうそれどころじゃねえだろうがって。自分のお尻に火が付いてて、まだ前髪を気にするかっていうそういう問題なんですよね（笑）。遠くに住んでてそういうことに全く関係のない人には、俺が何を言ってるのか分からないかもしれないけど、歌うべき対称がはっきり見えちゃった今、不特定多数に向けて歌っていくことは、もう出来ないんじゃないかと思います。

●それこそ数限りないほどの雑誌で、このアルバムについて「あーだこーだ」とレビューをされてるんですけども、そのレビューに対する印象はどう？

T：これは全部のことに言えますけど…、真実の物語っていうものは、自分たちの音楽がグレイを応援してくれてる人達にとっての生活のバックボーンになり得たら、もう気にならないですよね。一人の評論家がダメって言ったって、俺たちがレコード出すことによって励まされる何千人かの人達からの「ホントに良かったね。明日もこれで元気にそれぞれの場所へ帰れるね」って返答があれば、正直言ってどうでもいい。それさえあれば、何書かれても「分かってねえな、こいつ」のひと言で済ませられるし、ほめられても、それこそ対岸の火事のような「よく燃えてら」なんていう、そういうことなんですよね。もっともっと大事なものが、俺たちに返ってくるから。これは、すごく失礼な言い方かもしれないですけどね。

●JIROくんは？

J：『SPEED POP』の時はすごくイヤなことを書かれて、「ロックじゃねえ」とか書かれてたんですけど、この作品は自分の中で傑作なんで、そう思ってる以上何を書かれても全然構わないですね。やっぱり良いことを書かれたらうれしいですけど、悪いこと書かれても、さほど気にはならないだろうなって思います。それよりもなんか、その人達のために作ってるわけじゃないなっていう気持ちになると思うんですよね。

87年7月2日、TAKURO初めてステージに立つ

●もうすぐツアーがスタートする、いい機会なんで、歴代ライブでの面白い話とか、震え上がるような話とか、とっておきのエピソードを聞き出そうっていう魂胆なんだけど。まず、それぞれで初めてステージに立った時のことって憶えてる？

T：憶えてますよ。あれは、87年7月2日かな、高校1年生でした。

J：じゃあ、僕も同じぐらいかもしれない。

●初めてのステージに立った時の印象を。

T：どうもこうも（笑）、どうだったんだろうな〜。まだ、ライブのだいご味みたいなものは知らなかったですね（笑）。ライブし始めてしばらくは知らなかったんじゃないかな。

J:弾くことに精一杯だったんじゃないかなと思うんですけどね（笑）。

T:リハーサルスタジオで弾いてるのと同じような（笑）。客の顔を見る余裕もない。

●じゃあ、クオリティーうんぬんというのも（笑）。

J:クオリティーも悪いですしね。その当時だと。

●グレイになって、JIROくんがベーシストとして参加した時の初めてのライブっていうのは。

J:初めてのライブはお客さんが7人ですよ。

T:俺たちは横浜でライブをやってたんですけど、その日武道館では『エクスタシーサミット』があって、そのあおりをモロに受けまして。あの時はJIROに申し訳ないなって思いましたけどね（笑）。

●それは忘れられない経験だ。

J:しかも、チケットノルマは僕が立て替えたという（笑）。

●それはさんざん（爆笑）。

J:その時はまだサポートだったんですよ。

T:男らしい、しっかりもんだ（笑）。

●お客さんが7人っていうのは、自分たちの演奏とかに影響した?

T:いや、その時は良かったんですよ。逆に奮起しまして。でも、ホントに落ち込む時もありましたよ。15人で落ち込む時があるけど、7人でも頑張る時もあるっていう感じで。アマチュアだからそのへんのバランスが全然なかった。JIROとのその初ライブの時は、すごく良かったライブだったっていう風に自分では記憶してるんですけどね。

●現在のメンバーになってからということで、印象に残っているライブって。

T:やっぱり、エクスタシーとの契約の半年ぐらい前から自分たちで自主企画イベントをしてたんですけど、名前言うの恥ずかしいから言わないけど（笑）。すさまじい名前の…。

●『魔女狩りナイト』。

T:あららららら。俺たちの周りにビジュアル系で、すかしてて、怪しいヤツばっかりいたんですよ。「なんだ、こいつら」っていう気持ちがこのタイトルになった（笑）。でも、タイトルはオドロオドロしいのに、ライブは面白いんですよ。あれはもう、お祭りイベントだったから。俺とTERUがハンテンを着ながらギター一本でちょっと小話したり、マッド・カプセル・マーケッツのコピーバンドの「HISASHI・カプセル・マーケッツ」をやったり、JIROがたまにボーカルを取ったり。当然、最後はグレイの曲をきっちり聴かせるライブがあるんですけど、曲なんか一曲も知らなくても、「ああ、面白かった」って思えるライブだったと思う。あれで動員がどんどん伸びていったし、あの8回ぐらいのライブで、カリスマ性というものは、すましたところで作るもんじゃないっていうのが分かったし。怪しけりゃいいってもんじゃない、はかなけりゃいいってもんじゃねえなって、いろいろ思ったりして（笑）。その後にエクスタシーから話があったんで、ちょっとまじめにやろうってことで、更正したんです（笑）。

TERU先生のライブハウスでの大伝説

●ライブでのとんでもない失敗とか、恥ずかしい話を聴いてみたいな。

T:TERU先生の岡山ペパーランドでの大伝説があるんですけど（JIRO大うけ）。

●伝説になるようなことをやってしまった?

T:伝説です。

J:本当になったんだよね（笑）。

T:その日、岡山を襲った台風46号が…、46号かどうか分からないんですけど（笑）、台風が岡山を直撃しまして、交通機関がすべてストップ。で、100人ぐらい入ったら超満員になるペパーランドっていうライブハウスに、40人ぐらいしか入らなかったんですよ。前売りはいっぱい売れてたのに。「何でだろう。いやだな台風は」とか言ってて。でも、ライブが始まってみると、少ないながらもファンの子が一生懸命応援してくれてて、TERUはすごく感極まっちゃってね。で、MCを…。後から聞いたんですけどTERUはその時、「本当に今日はどうもありがとう。俺たちは今日ここにいるみんなのためにも、次はもっともっと大きな会場でやるから、もうこの会場で出来ないくらい頑張るからね」と言おうとしたんです。なのに思いが先に立っちゃって、「それじゃあ、みんな、俺たちはもうここへは来ない!」（全員爆笑）。この場所には来ないけど、岡山ではもっと大きな会場でやるぞってことを言いたかったらしいんですけど（笑）。

●それ角が立つよね（爆笑）。

T:お客さんがその瞬間、引いちゃったりし

て(笑)。あの時はあわてたなあ(笑)。

●どういうフォローを?(笑)

T:なしですよ(笑)。

J:ライブ終わった時に、気がついたからね。

T:後で「そういえばさあ、もう来ないって言ってなかった?」って(笑)。それ以来、行ってないです(笑)。

●約束通りに(笑)。

T:やばいなあとか思って(笑)。後は、前回の大阪で〝名古屋発言〟をしたのは、有名じゃないですか。大阪のライブで「愛してるぜ、名古屋」でしたっけ(笑)。

●彼は常に伝説を作る人なんだね(笑)。

T:チューニングがおかしくなったり、トラブったりとかっていうのはたくさんありますけどね。伝説は彼しか作らないかもしれない(笑)。

J:名古屋のライブで、「明日は大阪だ〜、大阪は近いからみんな来てくれるよな」とか言って。お客さんは「ぜんぜん近くなーい!」って(笑)。

T:新幹線で1時間ちょっとかかるのに(笑)。ちょっと地理関係弱いなと思って。

J:TERUがタムとタムの間にひょこんと座ったのは?(笑)

T:ああ、クルクル回って踊ったんです、あいつ(笑)。後にも先にもステージで彼が踊ったのは、それ一回きりで。そしたら目が回っちゃって、クルクル回りながらドラムのタムとタムの間にお尻がピョコンとはまっちゃって(笑)。それはビデオで残ってて、今でも見る度死ぬほど笑えます(笑)。

●目が回ってるということは、ちょっとの間そのまま動けないと(笑)。

T:そうそう(笑)。本人はその体勢のままきょとんとしてるんですよ(笑)。

●(笑)ライブで、危険なめに合ったことはない。

T:アマチュアのころ、ライブ会場で先輩バンドにあいさつしなかったということで、追っかけ回されたことがありますけど(笑)。その人達は今、メジャーデビューしてるから名前は言えないですけど(笑)。そういうおっかない体質がアマチュアのころはバンバンありましたけどね。

●何発かなぐられたとか。

T:グレイはないんですよ。その辺はうまくやって来ましたね。だれの下にも付かなかったし、ローディーバンドでもなかったから。他のバンドのローディーバンドは悲惨でしたよ。先輩とかにボコボコになぐられて。

●運動部のノリだ。

T:そうですね。でも、グレイには「HISASHIの笑顔を見たら、だれもなぐれないだろう」っていう、強力な武器があったから(笑)。

●じゃあ、今までにね、バンド史上「ああもう、最高だったな」っていうライブってあった?

T:去年の名古屋は、俺はすごく感動したライブでしたね。そのライブがひょっとしたら今までのベストライブかな。

●それは、どういう要素がかみ合って?

T:お客さんの気持ちと自分の気持ちが重なり合ったといいますか。言うなれば、同じ志を持つ者同士の共通言語がグレイの曲っていうものに変わる瞬間を感じた。

●別にプレイのクオリティーがどうのっていうレベルじゃなしに、もっと深いところで何か共有する感覚が出来た。

T:その共有具合が、自分が今までになかった初めての体験。それこそお客さんの上にちょっとした不思議な白い空気が流れるような。

TAKURO

●JIROくんは?

J:僕は前回の『SPEED POP』ツアーは全カ所が良かったと思ってるんですよ。たぶん自分が一本一本のライブごとに向上していったからでしょうね。その前のライブは思い出とかいっぱいあるんですけど、自分が進歩してるなって思えたことがなくて。だけど前回のツアーっていうのは、全カ所自分にとってパーフェクトだったと思うんです。いろいろ反省点はその時あったんでしょうけど、今考えるといいことばっかりしか思いつかないですからね。あれがあって、このアルバムが出来たとしか言えないですから、前回のライブは身になったんじゃないかな。

●自分に厳しいグレイだから聞きたいんだけど、ライブでの自分の弱点って冷静に見てる?

T:あるんですよ。どっかで冷静な目を持ってなきゃいけないのに、それをなくしてしまうことですね。感情が先に立っちゃってギターを弾かないで暴れ回ったりっていうのは、俺の理想とするのとは違うから(笑)、それは克服したいですね。どっか冷静で楽器を弾きながら、自分が満足するぐらいのキレ具合のバランスをちゃんと持ちたいなって毎回思いますね。

J:僕はあんまりライブで記憶がなくなるまでってことはないですからね。常に次は何をやろうってことを計算してるんで、あんまり弱点だとかっていうのは分かんないですね。今の時点で、自分のテーマとしては、出る部分は出て、引っ込む部分は引っ込んでっていう風に具体的に頭の中にはあるんですけど、その日のその瞬間のテンションを大事にしたいなと思ってるんで、自分の弱点だとか、ここはいい部分だっていうのは、その日にしか分からないです。

●一度くらい、分からなくなるほど切れてみたいなっていうことは思わない? まあ、ステージでメンバー全員がそうなってしまうというのは怖い話なんだけど。

J:冷静に聴かせなきゃダメだなっていう自分もいるんで。あんまり今は思わないですね。

●これがバランスだ(笑)。

T:お世話になってます。

J:もしかしたら楽器の性質上、ギタリストとは、気持ちが違ってくるのかもしれないですけどね。ベースがなくなっちゃうと演奏として成り立たないから。だからライブでキレる曲は僕の中で決まってますよ。

次のアルバムの出来は、今回のツアーにかかっている

●今回のツアーではどんなステージを見せようかと考えてる? まあライブは当然予定調和じゃないと思うけど。

T:そうですね、俺たちは今回がホールの一発目ということもあって、具体的には数限りない課題があるんですけど…。ホールをまずライブハウスに変えることが出来る力

きをつけたいっていうのはありますね。だから、いつでも大きな会場をライブハウスに出来るし、ライブハウスを大きなホールに見せることが出来るようなスケールを持つバンドにもなりたいし。今回は、ホールをいかに自分たちのものにするかっていうのが課題なので、会場が小さく見えるようなライブにしたいですね。「ここって、こんなに小さかったっけ」っていう、それぐらいスケールのデカいライブをやりたい。こぢんまりとしたライブはしたくないですね。キレちゃったら、キレちゃったで謝ればいいかって(笑)。

J:僕にとってライブっていうのは、やっぱり自分が一番気持ち良くなれたりとか、すごくステップになることを見つける場所で、そんな自分の姿を見て喜んでくれる人がいたらベストなんです。自分がお客さんに対して「カッコいいだろう」ってアピールするんじゃなくてね。ビデオで自分を見るのが楽しみだったりするんで、自分がよりカッコいいと思えるベーシストにより近づきたいなと思うんです。後は『BEAT out!』で「ライブはこうなるだろうな」っていうのを見せられたんで、それ以上の演奏だったり迫力だったりをお客さんにたたきつけることですね。

●今回のアルバムのサウンドにすごく自信を持ってるわけで、例えばライブでこのアルバム以前の曲を演奏するときに、このアルバムでの自信が影響して、今までと違うものになる可能性は?

T:それはありますよ。自分たちにとってベストなやり方がこの『BEAT out!』の作り方だって分かったから、曲はもうマテリアルでしかないから、そのやり方をあてはめればいいんですよね。だから、前回のツアーとはまた違った風に聴こえる曲もあるだろうし、前は細かいフレーズを弾いていたのが、今回はコード一発になっちゃう所もあるかもしれない。でも、スケールは今の方がデカイよねっていう、たぶんそういったことになるんじゃないですかね。旧曲と新曲とのバランスっていうのは。

●アルバムを出すごとにレパートリーも増えてくるわけで、曲を選ぶのがハードになってくるよね。

J:これがすごくハードなんです(笑)。そろそろ具体案が出されるんではないかなと思うんですけど、多分ひと悶着(もんちゃく)あるかなっていう感じですね(笑)。

●選曲の時は修羅場になったりするの。

T:ありますね。グレイの中では、それを修羅場って呼ぶのかどうか分からないですけど、イヤなムードにはなりますね(笑)。

●でも、グレイの場合は"どつき合い"で解決するようなバンドじゃないよね(笑)。

T:口はきかなくなりますね。イヤなバンドだな(笑)。そんなことないですけども。でもライブは一本だけじゃないし、いつも「明日なんかないんだ」ぐらいの気持ちで与えられた2時間を全力投球してるんですけど、その後に絶対出てくる反省の部分で「この流れはよくない、この曲とあの曲をチェンジしよう」っていうのがあるから。最初の一本目はそんな緊張感が見られるライブだし、真ん中ぐらいは緊張感と安定感が同居するし、最後は安定感がかなりの比重を占めると思うんですけどね。そういった楽しみ方もお客さんはもちろん、自分たちの中にもあるから、もめはするだろうけど、そんなに大したことじゃないような気もしますね。

JIRO

●どこも、前回よりも大きな会場でというのはどんな気分?

T:この1年の努力が実ったんだろうと(笑)。よく頑張ったなって気はしますけど、まあ厳密にコンサート会場が大きくなるというのは、音楽的な切磋琢磨(せっさたくま)とはちょっと違う、スタッフのお陰というのも感じますからね。グレイに同じ夢を見てくれてる人がたくさんいるんだなってことには、すごく胸を打たれるし。即日完売という話を聞いて、やっぱりうれしいと同時に、ああ、期待されてるんだなっていう風に思います。

●最近、ライブからライブへの期間がちょっと長くなったみたいだけど、そういうことに対するフラストレーションみたいなのは。

T:ありますよ(笑)。

J:前回は5月ぐらいにライブをやって、その後11月ぐらいまでレコーディングでしたからね。もしも、そこでライブをやってたら、このアルバムは多分、出来なかっただろうなっていう気がするから、去年は去年で充実した1年だったんですよ。だから今年は早いうちにリリースして、ライブも早いうちに出来るんで、まあ夏ぐらいにはもう一本ぐらいやりたいなって…。いや、やります(笑)。

●フラストレーションを吐き出すように(笑)。

J:このアルバムが出来たのは、永井さんとD・I・Eさんと一緒に回ったツアーのお陰なんですよね。ライブを一本やるごとにみんなが急成長していくのも目に見えて分かるし。だからつくづくうちはライブバンドなんだなっていうのを、前回のツアーで感じましたからね。今年は一本でも多くやりたいです。

●そのライブによって次のアルバムにも大きなプラスがどんどん表れると。

T:次のアルバムはもう、今回の『BEAT out! TOUR'96』にかかってるんじゃないですか(笑)。それでどれぐらい自分たちが伸びることが出来るか、それが次のアルバムの尺度になるんじゃないかなと。

●じゃあ、今回のライブを観て「えらく良かったなー」と僕が思えたとしたら、次のアルバムはきっと…。

T:とんでもないことになるでしょう(笑)。

●じゃあ最後に、来てくれるファンは今回のライブに何を期待できるかな。

T:根本的なところでは音楽っていうものは、楽しむものっていうことに俺は賛成だから。ただホールになったことで今までのステージに向けられる思いが倍になったりするわけですよね。それを全部受け止めて、みんなの気持ちをくんだ上で、それぞれにいろんな事情があるないに関わらず最後は「ああ、楽しかったね」って言えるライブにはしたいですね。TERUが「家に帰ればいろんな現実があるだろうけど、この2時間なり2時間半は忘れさせてあげたい」って、そんなことを言ってました。俺もそれには賛成だし。そんなに大した力はないかもしれないけれども、それぐらいのことは出来るだろうと自分たちで信じてます。

協力：MUSIC BAR ROCK ROCK

INTERVIEW
DEEN

「瞳そらさないで」「思いきり 笑って」「未来のために」「LOVE FOREVER」を始めとする、透明感があってメロディアスなナンバーで、さ細なことで簡単にとげとげしくなってしまう僕らの心に、優しさと元気を取り戻させてくれるDEEN。

個人的な意見で恐縮だが、僕はこれらの曲が、聴く者に、彼らの音楽センスやクオリティーの高さをはっきりと示しているにもかかわらず、「チャート何位だ」「シングルが何枚売れてる」、揚げ句の果てに、お笑いタレントが面と向かって「さわやかすぎて腹立つな!」などと暴言を吐くなど、時として音楽の質とは別次元のイメージが勝手に先走っている状況にいら立つことがある。

彼らの音楽を素直にじっくり受け止めてみると、その音楽的な核にブラックミュージックのエッセンスが脈々と息づき、誠実なアーティストの姿が見えるはずだ。その聴きやすさは、「ポップだね」という単純な言葉だけで片付けられるものではなく、人間の感情的なリズムに同化できる、すなわちそこに"グルーブ"が存在するということなのだ。

ニューシングル「ひとりじゃない」のリリースを控え、バンドのボーカリスト池森秀一とギタリストの田川伸治が語ってくれた、自身の音楽のルーツや音楽に対する考え、ライブへの思い、そして現在レコーディングが続けられている2 ndアルバムなどについての言葉で、そんな雑音を盲信している音楽ファンのイメージがぬぐい去られることを願ってやまない。

「ルーツはスティービー・ワンダーです」(池森)

●DEENの音楽性に迫りたいと思うので、まず、二人のルーツを知りたいのですが、影響を受けたアーティストを一人ずつ挙げてくれませんか。

池森(Vo、以下I):スティービー・ワンダー。

田川(G、以下T):僕は、自分をギターに誘ってくれたという意味で、ゲイリー・ムーアを崇拝しちゃいまして。最初はハードロックをやっていたもんで、ずっと彼ばっかりを追いかけていた時期がありました。

●池森君はスティービーのどんなところにひかれたんですか。

I:6つぐらい違う姉貴の影響で…。彼女が17、8歳で、僕が小学校の5、6年生ぐらいのときに、はやっていたディスコサウンドが、たまたまブラックミュージックだったんですよ。今だとハウスとかユーロとかいろいろあるけど、その当時はソウルミュージックだった。その影響があるせいか、ずっとそんなのばっかり聴いていたからね。

自分でも「何で黒人音楽が好きなんだ?」って考えるんだけど、何でなんだろうね(笑)。何でか分からないけど好きなんだよね。

●(笑)でも小学生がブラックミュージックというのは珍しい。

I:後に音楽にはまっていくときに分かったことであって、もちろん小学生のときには、「これがブラックミュージックだ」っていうのは全然分かってないんだよ(笑)。

●妙に"ませたガキ"ですよね(笑)。

I:本当に、ませガキ(笑)。

●田川君はゲイリー・ムーアのどんなところに?

T:その当時、ゲイリー・ムーアは自分の周りでは全然人気なかったんですよ。イングウェイ・マルムスティーンとかもっと技巧派に走っている風潮があったけど、自分はそれよりもゲイリー・ムーアのガッツがあるところにひかれたんです。今でもゲイリーのアルバムは全部持っているんですけどね。

●でも、今のDEENの音楽を考えると、池森君のスティービー・ワンダーは分かるんですが、ゲイリー・ムーアというのは…。

T:そうですよね(笑)。その後むちゃくちゃ変遷がありました。

●今のソフトな音に移行したのは、最近なんですか。

T:楽曲に反映されているかどうかは分かんないですけど、AORとかすごく好きなんで、そういうのは随分前から聴いていました。

●アマチュアのときはどんな音楽をやってたんですか。

I:コピーばっかり。アマチュアのときはライブハウスでハコバン(ライブハウスのレギュラーバンド)やってたから、もうソウルものばっかりの。

●田川君は、やっぱりハードロックですか。

T:僕は高校に入ったらバンドをやりたいと思ってたんですよ。でも周りにロクなのがいなかったという状況で、うまい人たちとバンド組もうとすると社会人とか、自分よりも年上の人たちの中に入っていくしかなくて、「ギターやりたいんだけど」みたいな感じでセッションしてもらう。そしたら、やっぱり自分の要求は全く受け入れられない環境で、言いなりなんですね。興味のなかったカシオペアだとか、角松敏生だとかを演奏するようになって、最初は全く出来ない。まず、16ビートとか知らなかったから。そんな人たちの中で未知なことをやらされていたときが、今になって思えば大きな分岐点だったと思うんですけどね。そういうところからいろんな音楽を聴くようになりました。

音楽理論の勉強をしなきゃいけないということで東京の専門学校に行って、そこでもかなりのおっさん連中とラテンファンクというか、ホーンセクションやパーカッションがわんさかいるような12~3人ぐらいの大所帯のバンドに参加して。ここが第二の転機というか、全然聴かなかったようなKC&サンシャインバンドとかをやらされて。当時はどこがカッコいいのか分かんないし、全然ギターも目立たなくてカッティングばっかりやっていたんですけどね。それも、今思えば大きかったと思うんですよ。

●その辺りで池森君の影響を受けたブラックミュージックに少し接近したということになるんでしょうね。

I:僕はロック、ハードロック全然知らない。全く知識がない(笑)。

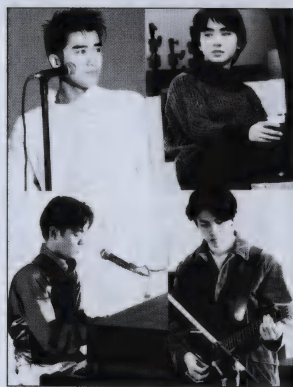
T:基本的に後の二人のメンバーは、僕に近い流れを踏んでいると思いますね。どこかでハードロックを通っているメンバーなんですよ。「こんなのあるね」とか、ロック的な部分で結構話が通じますね。

●メンバーそれぞれに音の好みもあると思うのですが、それをどうまとめているんで

インタビュアー・西原 朗　撮影・大野晴己
INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA　PHOTO by HARUMI OHNO

すか。
T：自分たちの場合、個々が聴いてきた音楽を理解できる性格なんでね（笑）。頭ごなしに「それは良くない」とか、「それはこうしよう」という部分がない人間が集まっている感じなんで…。
I：DEENは平和主義ですから（笑）。
T：ああいう音楽の良さも分かる、こういう音楽の良さも分かるみたいな。

ベースラインにはちょっとうるさいですよ（笑）

●DEENはメンバー全員曲が書けますよね。それってすごい強味だと思う半面、収拾がつかなくなったりしないのかという心配もしてしまうんですよ。
T：曲を書いてきた人が絶対的な主導権を持ってやるようにはしているから収拾がつかなくなることはないし、気が付いたら全然違う曲のようになってたというところまで、いじくりまわすこともないんですよ。ちょっとしたアイディアを出し合うとかで。
●曲を作るときというのは〝DEEN〟という一つのテーマを頭に入れて作るんですか。それとも強引に自分のスタイルに引っ張っていくとか。
I：半々かな（笑）。
T：どっちがなくなっても良くないと思うんですよね。やっぱり自分らしさとか、今しかできないことというのもあるし、そういうものを取り入れるのも大切だし、DEENらしさを守って出していくのも、ど

ちらも大切だと思うんですよね。
●田川君が、池森君の曲を客観的に判断すると、やっぱり影響を受けている黒人音楽が出てきていると感じる?
T:そうですね。一番、自分のやりたい音楽というのが明確な人なんで、自然と曲にそういう今までの培ってきた部分が出てきているような感じがしますよね。意図的な部分が一番少ないというか…。
I:それしか知らないとも言えるんですけどね(笑)。
T:コード進行が一番予想できない曲を書いてきますよね。曲を聴く度に必ず一カ所は、新しい発見があるんですよ。
●曲が浮かんでくるのは、どういうときなんですか。
I:様々。そんなに忙しくない日が続くときに、いろんな音を聴きたくなったりするんですよ。それは自分の趣味でね。「ああ、こんな曲を聴いていると気持ちいい」って曲を次々聴いていると、だんだん作りたくなってくる。そういうときに作るか、車乗ってて何か浮かんで、それを家まで鼻歌で歌って帰って作ったりとか。追い詰められて作るときもあるし、あんまり決まってない。
●どちらでもできるって感じ。
I:ただ、追い詰められて作った曲に、今まで自分で「いいなぁ」と思ったことがないかもしれないね。1フレーズがフッと出てきたときの方が良いみたい。それが、いっつも出てくれるといいんだけどね(笑)。
●田川君は?
T:やっぱり、作ろうとして作れる人ってそんなにいないんじゃないですか。結局、作ろうとして作るというのは、何パターンか自分の中で持っているパターンのつなぎ合わせでしかないよね。時間があるときに、いろいろ音楽をいっぱい聴いてインスピレーションとか、「こんな曲書きたい」とかき立てられるもので盛り上げていって、ガーっと作っていくという方法を取っている人って多いと思いますけどね。そうじゃないと新しいものって生まれないし。パクリとまでは言わないけど、何かの音楽に影響されてポッと自分のフレーズが出てくるという作り方がいいと思うんですよ。
●DEENの曲の中には共作曲もあるんですが、共作って面白いですか。
I:面白い。今まで数曲しかないけど、絶対にイメージ以上のものになっちゃうもんね。例えば僕が「サビがあるんだけど、ちょっと田川、AメロとBメロを書いて」ってできた曲は、「メチャクチャ良くなったね」という印象の方が多いかもしれない。今のところは(笑)。
T:はなから共作でやろうというのはないな。
●ある程度まで作って、そこでサポートしてもらってという形なんですね。
T:そうですね。自分では「これ以上のものはない、これでいいじゃないか」と思っているんだけど、周りからみると「もうちょっと、どうにかならないか」というのがあって。でも自分には曲に思い入れが入っちゃってるから、それ以上出てこないという場合が多いんで、「サビ全体がちょっと弱い…」って他の3人に託してしまう。共作っていうのはある意味で逃げのテクニックなのかな(笑)。
●(笑)逃げかかな? それがバンドでやっている特権でもあり、理由なんだから。今後、どんどん共作というのは増えてくるでしょ。
I:そうですね。
●それぞれ曲を持ち寄る時のデモテープって、アレンジ的にもある程度完成されているんでしょうか。
T:そうですね。特に最近は曲ができた時点で、どんなアレンジにしたいというコンセプトもできるだけ持ち寄るようにしてますけどね。最初のころは漠然とピアノ1本で、どんなアレンジになるのかまるっきり見当も付かないようなデモテープを持ってくる場合も多かったんですけど、「これはこんなアレンジで行きたいんだ」というのが見えるデモテープというのが各自多くなったよね。
●曲と同時進行でアレンジも生まれていると。
T:そうですね。特に最近はそういう傾向が強いですね。…というか、そういうふうにしようということだよね。
●DEENの曲を聴かせてもらうと、メロディーがきれいだとかいうのは当然あるけど、シンセベースのラインが印象に残って、カッコ良かったり、気持ち良かったりというのがあるんです。そんなベースラインもデモテープの段階で入ってたりは…。
I:する。
T:それが曲のモチーフだったりするから。
I:僕には、そういうのが良くある。
●そうじゃないかなと思ってたんですよ(笑)。
I:それはすごい(笑)。そう言ってもらえるとホントうれしいです。
T:ベースにはちょっとうるさいんです(笑)。
I:メチャクチャこだわっているから。
T:これは、今までバンドをやっていた流れなんですけど。ベースというか、リズム隊にはこだわります。
I:好きなところだから。多分、自然に出ているんだと思うな。
●スローな曲でもベースラインからグルーブが感じられたりして、気持ちいいですよね。
I:打ち込む人が上手だっていうのもありますよね(笑)。

ゴールは絶対にない 延々と昇り続けるのも楽しい

●詞の話も聞きたいんですが、池森君の詞って、「前向き」や「勇気」というキーワードが浮かぶんです。これは実際に池森君がそういう考え方を持っているということなんでしょうね。
I:そうだと思う。人に言ってるんじゃなくて、自分を励ましている部分もあるかもしれない。自分に言い聞かせれば自分も頑張れるでしょ。
●それは詞からはっきり感じますね。結構、詞で書かれている情景というのは、ドラマがありそうな…。実際にそういうことがあったんじゃないかっていう印象があるんですけど、やっぱり実体験に近いことがないと書けないタイプ?
I:そういう曲もあるけど…。人の話を聴いたりとか。あんまり「現実にこんなことはないだろう」と思うことは書いてないですよね。特に、最近はそういう流れでしょ。すごく現実的だし。「夢でしか、こんなことはないよ」っていうのはあんまり受け入れられない風潮だし。
●田川君は池森君の詞をどう思いますか。
T:ずいぶん変わってきている。特に「未来のために」あたりから詞に艶(つや)が出てきたって感じますね。今までが悪いというのではなくて、"切ない"というセピア色の詞が多かったのが、今は透明感があるというか…。
●DEENってシングルヒットしている曲に、バラードが多いんで、どうしてもバラードバンドだっていうイメージでとらわれがちなんですけど、そういう見られ方はどう思います?
I:それは全然抵抗ない。ボーカルとしては、バラード歌って支持されればやっぱりうれしいですよ。黒人音楽はバラードが大前提だしね。
●「リズムを前に出した曲もあるんだぞ」という気持ちは反感として出たりしないんですか。
I:確かに、そこら辺も出していきたいとは思ってる。両方をバランス良くやれれば、本当は一番いいんだけどね。
●池森君のボーカルをデビューから順を追って聴かせてもらうと、テクニックの面もそうなんですけど、表現が自由になってきたって感じるんですよ。
I:だいぶん自分でイメージしている通りに歌えてきたかな。
●勝手な思い込みだけど、最初のころのシングルを聴くと「こんなふうに歌わなければいけないんだ」と何か束縛されているような感じがするんですね。
I:鋭いですね(笑)。
●ここ最近の曲は、それがなくなって自由に歌ってて、感情的なレベルで解放されている感じがしたんですけどね。
I:いつもそこを目指しているしね。やっぱり黒人音楽が好きな人って、ずっと伸びていく人が多いんですよ。黒人というのは果てしないほどの歌のうまさがあって、常にそこと自分を比べてやっているから、いつまでたっても自分の歌に納得できない。だから、黒人音楽が好きで良かったという気持ちもあるしね。
●じゃあ池森君はお姉さんに感謝しないといけないですね(笑)。

I:いや、本当ですよ。
●池森君にとってボーカリストとしてのゴールというのは…。
I:僕は絶対にないと思いますね。延々昇り続けるのも楽しいから。
●田川君にとって理想のギタリスト像は?
T:曲によって自分のギターの位置づけというのが一番難しいし、大切だと思っているんですよ。ガーって出さないといけないときは出さないといけないし、何かに徹しなければいけないときは徹するというか、楽曲第一で考えてやらないといけないんで、その辺は自分にはまだまだ足りないような気がします。楽曲に対するギターの役割というか、アレンジのスタイルに対してどんなギターを弾けばいいのかっていう辺りが勉強しなければいけない部分だと思っているんですけど。

完成間近の2ndアルバムは予想を裏切った感じになる

●期待の集まるライブについて聴きたいんですが、一昨年は学園祭でライブをやって、去年はファンクラブのイベントでもライブを見せたとか…。手応えはどうでした?
I:学祭のときは初めてだったし、正直言って楽しむ余裕がなかったかもしれない。
T:何か空気っていうのかな、さっきのバラードの話じゃないですけど、みんなが何を聴きに来ているのかがよく分かったという意味では、勉強になった。バラードはノリノリで聴くものじゃないんで、すごく聴いてくれているというのは分かるんだけど、アップテンポの曲になったときに「まだ難しいな」というのを感じたんです。お客さんに「どういう見方をすればいいのかな」というのがあって、うまくやり取りができなかった。
I:でも、ライブの緊張感って、一度味わうと絶対にやめられないものがあるよね。
●ステージに上がる前に、体が震えたり?
I:…っていうか、すごくテンションが高くなる。”楽しい“を超えちゃったテンションになっちゃう。
●学祭では余裕がなかった分、自分たちの中でも若干盛り上がりという部分が欠けていたかもしれないと。
I:自分たちじゃなくて、自分の中でですね。
●じゃあ演奏面では?
T:みんなイメージを持って見に来るんで、とにかくそのイメージ通りみんなの目に写っているのかということにばかり気が行っちゃってて、「僕たちはこういうバンドなんだ」と観せるところまで気が回らなかった。自分たちの中で”楽しんでいる“という雰囲気までたどり着けなかったというのもある。どういう曲を聴きに来ているとか、どういうイメージを持って来ていると考える以前に、ライブを観終わって帰るときに「ああこんなイメージのバンドなんだ」と逆にこっちがイメージを植え付けて帰ってもらうぐらいのものがないといけないと思うんですよね。だから、まだまだ全然こっちが与える側になれていない。
●なかなかシビアに自分たちを見ているんですね。
T:テレビとかにあんまり出ないんで、かなり凝り固まったイメージを持たれているところがあるんでね。
I:ライブやったのは、テレビに出る前だったからね。
T:やっぱりそういうところばっかり気になっちゃってて。
●じゃあ、最近あったイベントの方は?
I:イベントはやっぱり一回学園祭でやっているから、自分で「ああしよう、こうしよう」ってのが見えてくるし、そういう部分でちょっと昇れたというのがありますね。下がってはいない。
●2回目ぐらいで「満足できました」ってのはないですよね。
I:演奏曲も3曲ぐらいなんですよ。音もアコースティックだったんで、ガンガンじゃなかったしね。
●そういう二つのライブを経験したら、当然、本格的なライブをやりたいだろうし、ツアーもやりたいと思うんですけど、DEENはどういったステージを作っていきたいですか。
I:やっぱり「DEENのライブに行ったら踊れるよね」というライブにしたい。もちろん、その中には涙モノのバラード有りでね(笑)。見せる側として、そういうバリエーションが付けれたらいい。まず、自分がステージで踊りたいというのがあるけどね。
●やっぱり、これは2ndアルバムが出てからになりますよね。実現する日は近いと思っていいんですか。
I:いいんじゃないですか。
●その2ndアルバムの現段階での進み具合は?

池森秀一(左)と田川伸治

I:楽曲はほとんで決まっていて、アレンジもできているし、あとは歌入れとかのダビングもの。歌詞をまだ書いていないのも1、2曲。もうそのぐらいのところまで来てます。だから、シングルが終わりしだいアルバムですね。
●1stと比べると、どんな作品になりそうですか。
I:「カッコいいな」っていう感じになっていると思う。ファンの人が聴いてマニアックに思えるかもしれないけど、自分たちでアレンジまでやっている曲もあるし、その辺の曲とかカッコいいんじゃない(笑)。何か自分のイメージしているものに近いものができていると思う。
T:曲を並べてみると、1枚目に比べて「さわやか」って言われている部分は色合い的に薄らぐと思いますね。
●それは意表を突くような曲があるということですね。
T:結構…。
I:あると思うね。
●それは楽しみです。
T:バラードのイメージがあるんで、何をやっても「えっ」ってのはあると思うんですよ。ある意味では予想を裏切った感じになるかもしれない。自分たちにとっては自然な成り行きなんですけど、今まで日の目を見なかったというか、前面に出て来れなかった曲をアルバムのコンセプトにして曲作りもやっているんでね。
●ここ2枚のシングルは自作曲で、かなりの支持を受けてるだけに、ソングライターとしての自信も出てきた?
I:いやぁ…。ソングライターって言われると、すごく重いものを感じてしまう(笑)。ただ何かを作って、色を塗ってというのが好きな人だから、どっかオタクみたいなところがあるからね。僕は小室(哲哉)さんみたいに次々曲を作ることはできないから(笑)。
●DEENは結成されて4年。まだまだこれからのバンドだって思うんですが、今後こんなバンドにしていきたいというイメージはありますか。
I:僕は楽曲で言うと、次のアルバムでみんなでアレンジしているような曲が定着してくると面白いかなと思う。
T:今までは「詞がいい」とか「歌がいい」とか「楽曲がいい」とかでポイント的に評価されていたものが、サウンドすべてを指して「音がいい」と言われるようになるのが目標ですよね。個々の楽器がもっと前に出て、サウンドすべて評価されたい。それがバラードであっても、ダンサブルなものであってもね。
　邦楽っていうのは評価が詞とかに行きがちなんですけど、全部ひっくるめて良いと言われるようなものにならないと。さっき言われたようにベース一つとっても、何をとっても評価してもらえるようにね。
●じゃあその問題作となる2ndアルバムとライブを楽しみにしていますね。
I:ぜひ、楽しみにしててください。

6日　メルパルクホール　撮影：佐藤潤一

Eins:Vier Tour Walk '95-'96

January 6th 1996 at Osaka Mielparque Hall
January 7th 1996 at Osaka MUSE Hall

7日　ミューズホール　撮影：高木昭仁

「よかったら前に来いよ」というHirofumiの言葉に、テンションが異常に高まったファンがなだれ込むようにしてステージ前へ押し寄せ、会場のイスが幾つか壊れる事件までも巻き起こした前回のツアーファイナル大阪御堂会館。それは、バンド結成からこのステージに立つ瞬間までに経験した"喜び"や"悲しみ"などをすべてエネルギーに変えて発散し、ファンも心からバンドに応え燃焼した、自他ともに認める"バンド史上最高"のライブだった。

それから約4カ月後。メジャーデビューアルバム『Walk』を引っ提げて、アインス・フィアは御堂会館よりも広いメルパルクホールのステージに立った。ステージ中央にそびえ立つらせん階段。これにはアルバムタイトルであり、ツアータイトルでもある"Walk（歩く）"にちなんで、"一歩ずつ踏みしめ昇って行く"という意味が込められているのだろう。両サイドには太陽と三日月をあしらった柱が立てられ、どこか幻想的なステージセット。また、華やかなライティングもドラマチックに曲を盛り立てている。これらは、狭いホールやライブハウスにはない、広いホールならではの演出効果だ。そして、その中で堂々とプレイする彼らも、もう御堂会館で最高のライブを見せたアインスではなかった。このわずか4カ月の間に…、いや御堂会館のライブが終わった瞬間に、彼らは大きな成長を遂げており、千人の収容力を持つメルパルクホールの空間でさえも狭く感じさせたのだ。

演奏レベルのミスなど反省材料もあるのだが、ステージの広さやセットに気負うことなく、楽しそうにプレイするメンバー。彼らのサウンドにファンは、身振り手振りを付け全身で応え、演奏に参加している。この現象をミーハーチックな行動ととらえ怪訝（けげん）に思う人は結構多い。しかし、感情を込めプレイするメンバーの放った音を受け取り、一緒になって心の高ぶりを表現しているファンの行動をだれが責められるものか。このメルパルクホールの空間いっぱいに広がった熱気に、"バンド史上最高"といったモノサシ的な評価が、成長を続ける彼らには全く無意味なものであることを思い知らされる。二回目のアンコールのMCでは、そんな高揚したファンに向け「明日、懐かしの大阪ミューズホールでライブするんで、よかったらみんな遊びに来て下さい」という言葉まで飛び出したのだった。

そしてメルパルクホールの余韻を残したまま迎えた翌日の大阪心斎橋ミューズホール。ここは、かつてインディーズ時代のアインスがホームグランドとしていたライブハウスである。それだけにメンバーだけでなく、午前10時に発売された枚数制限のチケットを根性でゲットしたコアなファンにとっても懐かしく、思い入れは特別に深いはずだ。

開演予定時刻ピッタリに落とされた客電。SEをかき消すほどのメンバー名を絶叫する甲高い声が響く中、最初にスモークが立ち込めるステージへ現れたのはLuna。前に出て来てうれしそうに両手を広げ声援を受け止める姿は、間近に感じるファンの体温を確認しているかのようだ。彼に続くようにYoshitsugu、Atsuhitoも姿を見せ、最後にピースサインと共にHirofumiが登場した。

1曲目は「The prayer」。人が密着し、バンドのエネルギッシュなサウンドを"空間"というものに邪魔されずに伝えることができるライブハウスというスペースで、アインスの放ったアグレッシブなナンバーは即座に一体感を生み出し、ファンを自分たちの世界へぐいぐい引き込んでいく。そして、いつもの"包み込むような温かさ"よりも"胸の奥から広がっていく熱さ"という空気を感じさせた。

昨夜のライブであまりにも熱唱し過ぎて顎（あご）の下に付いてしまったマイクの網目が、まだ取れていないという話をするHirofumi。なんとも彼らしい

エピソードに、バンドとファンの距離がより一層近付いたようだ。僕の耳には「Bravo」でHirofumiが転んでマイクを落としたときに、代わりにボーカルを取ったファンの声と「Dear Song」でファンのために「ミンナノ　ツライカコカナタへ　サヨナラ…」と歌詞を変えて歌ったHirofumiの声が、場内の雰囲気と一緒になってまだハッキリと残っている。

　Atsuhitoの繰り出すタイトなビートによる疾走感と、ボーカルと一緒に歌うようなLunaのベースが与える安定感、Hirofumiの伸びのあるボーカルが持つ安心感、そしてYoshitsuguの広がりのあるギターが作り出す開放感によって形成されるアインスのそう快なサウンド。やはりこのライブでも一番印象に残ったことは、そんなアインスのメンバーの演奏に、ステージ前方へ結集したファンも身振り手振りで加わっているということだった。

　ミューズホールのライブは、正直言って「ホール進出したバンドが行う、ライブハウスならではの緊張感あふれる白熱したライブ」を楽しみにしていた僕にとっては期待を裏切られたところがなかったわけではない。しかし、「今日は本当にグチャグチャって感じでしたけど、気持ち良かったんで、今日はこれでいいのです！」という最後のHirofumiのMCを耳にして、場内に広がるアットホームな空気に包まれていた僕も〝これでいい〟と思えたし、胸には気持ちいい満足感が残っていたのも確か。演奏内容などでクオリティーばかりを追求するのが良いライブの条件ではないのだ。これは、メルパルクホールのライブで精も魂も使い果たしたはずのメンバーが、ファンの体温を感じるステージで満面の笑顔を浮かべプレイする姿と、彼らを身近に感じることを喜び、無心にライブを楽しんでいるファンの姿に教えられた。

　今後、アインス・フィアはもっともっと成長していき、どんどん大きなホールへと進出していくことだろう。しかし、たとえ、それが何万人規模のアリーナクラスの会場になろうとも、ミューズホールのライブで感じさせたバンドとファンの距離は変わることはない。この大阪での二日間もまた、そのことを痛感させられた〝バンド史上最高〟のライブなのだ。

［文・樹音檸檬　撮影・佐藤潤一、高木昭仁］

Photo by Junichi Satoh　6日　メルパルクホール

Photo by Akihito Takagi
7日　ミューズホール

TALKING ABOUT LIVE AT OSAKA MUSE HALL

メルパルクホールのライブについて「終わってから反省点や課題点がいっぱいあったんですけど、やってて広いから気持ちが良かったですね」と語るYoshitsugu。確かに彼が言うように減点材料も目に付いたが、僕にはそれ以上にライブを楽しんでいるメンバーの気持ちが伝わり、場内の雰囲気もすごく良かったという印象が強い。そんな感想を告げると、彼は「OKですね」とほほ笑んだ。

メルパルクホールの翌日、アインス・フィアは大阪ミューズホールでシークレットライブを行った。前回のツアーからホール進出した彼らが、ホールライブの翌日にライブハウスのステージに立つ意義は何だったのだろうか。また、実際にステージに立ったときの気持ちは？

Hirofumi（Vo、以下H）：単純にやりたかった。ホールをやり始めて、ホールの楽しさが分かるようになってからは、ホールでやって、次にライブハウスでやりたいというのは、ずっと俺の中にはありましたね。もちろん、楽しみ方が違うだけで、ライブということには変わりない。だから、その楽しみ方のギャップを楽しみみたかったんですよ。逆にそれはホールでできるバンドになったからこそ実現できたことだから、それについては感謝し、喜びたい。

L:una（B、以下L）：久々のミューズで〝充実した〟というよりも、〝楽しかった〟っていうライブでしたね。

Yoshitsugu（G、以下Y）：会場に入ったときもそうだったんだけど、ステージに立ったときに、やっぱり懐かしさが強かった。

Atsuhito（Ds、以下A）：俺は何か笑えた（笑）。ファンの子もみんな単純に楽しんでいて、その理屈のなさに笑ってしまった。

それだけ思い入れの強い場所でのライブとなると、やはり演奏曲も気になる。ミューズホールで披露されたのは、『Walk』の曲を中心に全部で13曲。果たして、この選曲はライブハウス用の特別メニューだったのだろうか？

H：メルパルクとミューズの違いを付けたいと思ってるんだけど、やっぱり『Walk』のツアーの一環で考えていたから、アルバムの核になる曲はやりたいし、なおかつホールと違う感覚で楽しみたい。そういうところからこの13曲になったんです。

L：「懐かしい曲を並べてみました」という感じじゃなくて、ツアーの一環ということでね。もし、懐かしい曲を並べてやりたかったのなら、次の日にはやらなかった。なんで次の日にやったかというのは、それを拒んだということ。

曲順についてL:unaは「始まりと最後の選曲さえ間違えなかったら、その過程で失敗することはない。もし、始まりと最後がしっかりとしていて、それでうまくいかなったら、それは…」と語ってくれた。では、このミューズホール用に選ばれた13曲は、なぜこのような曲順になったのか。また、メンバーはプレイしてみてどんな気持ちだったのだろうか。

H：イベントなんかでは1曲目が激しいという構成は結構多かったんです。この時も、ツアーの一環だと考えてはいるけど、メルパルクとの明らかな違いも持たせたかったんですよ。今回のミューズホールは〝楽しむ〟ということに意味を持たせたライブだったんで、来てくれているファンに対して失礼なんですけど、プロ意識を捨ててでも何にも考えずにやりたかった（笑）。

Y：頭2曲で気持ちが入ることができたから、後は結構リラックスできましたね。

H：頭からノリのいい曲が続いたんで4曲目にしっとりとした「街の灯」。「Staying and ～」は重要な曲でもあるんで、そのしっとりとした感じのまま行きたかったんです。その後は、緩やかに盛り上がるのではなくて、ドーンと行きたかった。でも、アグレッシブなナンバーで終わるのは俺たちらしくないから、激しく始まって激しく終わるんじゃなくて、やっぱり激しく始まったのなら笑顔で終わりたい。

A：かつ勢いがある曲ということで最後は「Both We ～」。

H：1回目のアンコールは、みんなに応えたいというところからメニューに加えた曲で、プラスアルファの部分。この「In a void ～」は、アインスにとって核となる曲で、俺らにしか絶対にできないと思う曲の一つだし、「聴かせたい」という気持ちが強かったんです。いつもならアンコールは2曲ぐらいするんですけど、この曲の後には曲をやりたくなかった。

A：この曲はピリッとした隠し味的な部分ですね。

H：1回目のアンコールの後も、みんなが僕たちの演奏をもっと聴きたいという声があったし、僕たちももっとやりたかったんで2回目のアンコール。もう、ここはデビュー作品でもある「Dear Song」。そして、次のツアーで会うまでに俺たちを感じていてほしいという意味で「I feel that ～」。

途中、ちょっとしたハプニングもあったこのライブ。Hirofumiはエキサイトするあまりステージで何度か転んだし、本編ラストの「Both We ～」では、客席へのダイブも見せた。

H：出だしから2回こけましたから（笑）。足がはれ上がって、切れてました。こんなの初めてですよ。ダイブは基本的に好きじゃないんですけど、本能のまま行ってしまいました。

最後に今後の予定についてリーダーでもあるL:unaは、「レコーディングですね。4月には何か音源を出したいなぁ」と話してくれた。きっとその音源を引っ提げた春のツアーでは、また大きく成長したアインスのライブを体験させてくれることだろう。当然、演奏面に関しても、失点のないエキサイティングなライブを期待しているし、常に前回よりも素晴らしいライブを観せるのがプロのアーティストの宿命である。そして、いつ実現されるかは分からないのだが、今度はプロ意識を持ったままのミューズホールのライブを観せてもらいたい。

Play list

6日　メルパルクホール

1 Not saved yet
2 The Hallucination for this only night
3 Exact clock
4 Stranger said to me like this
5 Notice
6 新曲
7 Bravo
8 and I'll
9 Staying and walking
10 君が捨て去ろうとも
11 L.E.S.S.O.N
12 Dear Song
13 I feel that she will come

encore

E1 街の灯
E2 Both We and Audience

encore

E3 E3　The prayer
E4 E4　In your dream

7日　大阪ミューズホール

1 The prayer
2 In your dream
3 Notice
4 街の灯
5 Staying and walking
6 Bravo
7 君が捨て去ろうとも
8 Not saved yet
9 L.E.S.S.O.N
10 Both We and Audience

encore

E1 In a void space

encore

E2 Dear Song
E3 I feel that she will come

CHAGE & ASKA CONCERT TOUR '95-'96 SUPER BEST 3

January 7th 1996 at Osaka-Jyo Hall

CONCERT TOUR '95-'96 SUPER BEST 3

1996年1月7日大阪城ホール

あれから97日。95年10月3日、この同じ場所でCHAGE&ASKAのライブに初めて酔った。今夜の僕は、あの時と同じ大きな感情の波を期待するのと同時に、けっして疑っているわけではないが、同じツアーの中で彼らが一つの結果にあぐらをかかずにどれだけの変化を見せてくれるか、彼らがどれほどまでに音楽とピュアに向き合っているのか、そんなことをしっかりと見てやろうという冷静さがあった。確かにあったはずだった…。

1月7日、大阪城ホール。定刻を少し過ぎたところでコンサートのイントロダクションとして用意された映画がスタートする。このゴージャスな演出は何度体験しても見る者の胸を高鳴らせてくれる。映画の中の2人はコンサート会場へ向かうヘリコプターが墜落して、あの世へ行く中継地点にやって来る。そこで岸谷五郎が演じる案内人とのやりとりの中で、彼らは映像を見つめる観客の一人ひとりに向けて、いきなり自分たちにとってライブが、そして自分たちの音楽を待ってくれているファンが、いかに大切なのかを分かりやすく伝えた。「地獄に落ちてもいいからもう一回だけコンサートをやらせてくれないか?」という言葉で。

それを許された2人はあの世からの階段を降りて来る……。

大阪城ホールの現実のステージが華々しく幕を開けると2人はステージの階段から降りてくる途中。オープニングナンバーはだれの気持ちをも高揚させてしまう不思議な力を持つ「HEART」。ASKAは第一声から伸びのある声を惜しげもなく披露。CHAGEのハイトーンのハーモニーが絶妙の間でASKAの声に絡み付くと"これがCHAGE&ASKAだ"と当たり前過ぎる感情が湧出(ゆうしゅつ)する。客席も身体をそのリズムに任せて心地よく揺れ、間奏では彼らの音楽に向けて大きな歓声がごく自然に沸き上がった。

3曲目の後、MCで超満員のホール中に歓迎のメッセージを送ると、ASKA流のビートルズへのオマージュ「ある晴れた金曜日の朝」。ブラス、スライド・ギター、ピアノ、コーラスな

ど、曲の至る所にまぶされた〝ビートルズ・センス〟がライブならではの楽しさをまき散らす。クリエイターである姿と同時に一人の音楽ファンである彼の姿が浮かび上がり、音楽に向かう純粋さが伝わってくる。

CHAGEがアコースティックギターを抱えて歌った新曲「NとLの野球帽」はフォークロックタッチのストレートなナンバー。朝起きると同時に「今日は何をして遊ぼう」ってワクワクできた無垢(むく)な時代。疲れを知らなかった心。彼がこの詞とメロディーに注ぎ込んだ光景に、大人っていうポーズが板について、かたくなに閉じてしまった僕の心が音を立てて少しだけ開いたような気さえした。これが音楽に突き動かされる瞬間の快感だ。僕はもう冷静さをどこかに置き忘れてしまったようだ…。

ステージ中央の階段に二人がアコギを抱えて座ったアコースティックタイムでは、くだけたMCでレイドバックした空間に、ワンコーラスだけだが「エピローグ」「万里の河」といったナンバーが、2人だけの声と演奏で響きわたる。懐かしさに埋もれる暇もなく続けて聴こえてきたのはあの「男と女」。ASKAは長年歌い慣れたこの曲を今の彼だからこそのフィーリングで歌い上げる。彼らがその活動を広げた中国でも知らない人がいないというほどのスタンダードナンバーへと成長したこの曲と、続いて、ピアノの伴奏のみでしっとりと演奏された、台湾の名曲「何日君再来(ホーリーチンツァイライ)」の流れから、2人が本当にアジアのC&Aになったんだという感慨が押し寄せてくる。

バンドセットに戻って披露されたのは、緩やかな川の流れを思わせる優しく穏やかな新曲「river」。ライブで初めて耳にするこの曲のリリカルなピアノの調べに乗るASKAの温かい歌声に誘われて、客席のハートはこの川にゆっくりと静かに沈んでいく。アメリカ人のコピーでソウルを気取るえせシンガーよりもずっと本当の魂=ソウルをあふれさせた歌声に会場中の空気がきしむ。

「PRIDE」で深い感動を生み、宮崎駿氏が描き出したアニメーション叙事詩「On Your Mark」の短編映像の後スタートした後半は、「Mr. ASIA」「YAH YAH YAH」といったおなじみのパワフルなナンバーをたたみかけ、興奮の頂点を目指してひたすらステージの温度を上げていく。「僕はこの瞳で嘘をつく」でエキサイトしたASKAが片手倒立からの側転というアクションを見せると観客はその光景にますます盛り上がる一方。とどまるところを見せない勢いは「ロマンシング ヤード」まで登り続けた。このナンバーの2コーラス目で2人はクレーンに乗ってステージ上空で熱く歌う。気持ちが行きすぎたCHAGEはクレーンを自分で激しく揺すってハラハラさせられる光景も。

暗転しても静まるはずのない会場に聴こえてきたのは「Love Song」のアカペラ風バージョン。この素晴らしいメロディーが情感たっぷりに歌い上げられた後は、ラストナンバーの「On Your Mark」へ。力強く前向きなメッセージが観客を大きく煽る。しかし、会場中に現れたのは熱狂的な盛り上がりではなく、地にしっかりと足の着いた感動だった。「そして僕らは…」という力強いフレーズで幕を閉じた約3時間。歌も音も歓声も熱気も興奮も、そこにあったものはすべてが心のグルーブから生まれ出たものだった。

〝予定調和〟――ハプニングをよしとできないアリーナクラスのライブを、何年間も続けているアーティストがそれを簡単に受け入れてしまえるのは自然かもしれない。

でも、僕たちは、いつ見ても金太郎飴状態の悲しいライブはゴメンだ。アーティストが心の中でそれをよしとした時、ファンの純粋な思いは情け容赦なく打ち砕かれ、アーティストの音楽への衝動は死後硬直を始める。

C&Aのライブはち密に構成されたもので、演出面での決めごとはあるだろう。でもそのち密なリングの中で汗をかく2人の感情のスタンスはあくまでも自由。ギターを抱え、マイクの前にしっかり立ち、激しく踊り、完ぺきなハーモニーを生み出すかと思えば、繊細さよりも荒々しい勢いを振りまいて2つの声を熱く絡ませる。その心地よいあいまいさが、そこで同じ空気を共有するものに、生身の人間が作り上げる音楽を感じさせるのだ。

ライブの気持ち良さと、どんなビッグになってもアーティスト自身に、音楽に対する前向きささえあれば、予定調和の流れ作業になってしまうことなんてないんだって安心感が、僕の気持ちを穏やかにしている。そして…、大阪公演の最終日終了後に行われた打ち上げパーティーで、ライブに力を注ぐあまり完全に疲れ切ってしまった2人の目を見て、僕は彼らの予定調和のない感情のフォームに再び胸を熱くしたのだった。

［文・西原 朗　撮影・佐藤潤一］

Play list

1. HEART
2. Love Affair
3. BROTHER
4. ある晴れた金曜日の朝
5. Hung up the phone
6. SAY YES
7. NとLの野球帽
8. 紫陽花と向日葵
9. 男と女
10. 何日君再来
11. river
12. PRIDE
13. On Your Mark (Film)
14. SOMETHING THERE
15. Mr. ASIA
16. モナリザの背中よりも
17. 僕はこの瞳で嘘をつく
18. YAH YAH YAH
19. can do now
20. ロマンシング ヤード
21. Love Song
22. On Your Mark

LAUGHIN' NOSE TOUR '96

January 12th 1996 at Osaka ROCKETS

TOUR '96 1996年1月12日大阪ロケッツ

「ラフィン・ノーズが大阪で公演できるのはロケッツのみですので、ロケッツが使用できなくなると次回からの大阪公演は不可能になります。これらのことを理解の上、危険な行為のないよう…」

注意というよりもまるで脅し文句のようなアナウンスが響く。しかしそこまで言わなければならないほど、彼らのライブはヒートアップするのだ。私は不謹慎ながらワクワクして自分の立っている場所を若干ステージに近づけた。「何や、つまらんなあ…」、アナウンスを聞いて後方に撤退していく観客も数人いるが、そのすき間をめがけて少しでも前へ行こうと別の観客たちがもがき合っている。開演前だというのに、フロアにはすでに息苦しい圧迫感をはらんだ空気が渦巻いていた。

19時20分。客電が落ちるとさわやかなSEと共にメンバーが登場。最新アルバム『IF YOU DON'T MIND PLEASE LAUGH』と同様、オープニングは「WARZONE」だ。待ち切れないとばかりに強力なフレーズを響かせたBELLEYのギターに続いてPONが雄叫びを上げると、それが合図だったようにWANTANのキレのいいタイトなドラムが乗っかってくる。全身でリズムを取りながら、狭いステージをせわしなくうろついて歌うCHARMY。立ち止まって片足をアンプの上に乗せたと思えば、顔をぐしゃぐしゃにして感情を振り絞り言葉を吐き出すように叫んでいる。底辺をがっちりと支え揺るぎないリズムを繰り出しているドラム。うなりを上げながらスピード感をアピールするPONのベースは、息つく間もない曲のすき間をさらに埋め尽くすギターと共に、曲を強引なまでに引っ張っていく。ステージに4人がそろったその瞬間に作り出された音の塊は、観客の頭のてっぺんからつま先までを手加減することなく巨大なパンチで連打した。

すさまじい勢いとパワーを持つ、単調で性急なリズムで構成された短い曲。観客はお互いにもみくちゃになりながらも、そのサウンドに反応して爆発する本能を抑えることができない。あふれるままの感情を全身で表現し、ついに「THIRTY」ではステージに上がってダイブを始める者も現れた。しかし、だれも気にかける様子はない。メンバーも観客もただ自由に楽しむのみだ。

「BROKEN GENERATION」のイントロが鳴り響くと、後方で楽しんでいた観客たちもステージ前に飛び跳ねながら走っていった。メンバーの流れる汗を洗うようにCHARMYが勢いよく水をまき散らし、観客は前後左右に飛びはね腕を振りながら一緒になって叫ぶ。ライブ全体の構成とか、演奏のクオリティーとか、音のバランスとか、ここではそんなことに大きな意味はない。ライブが一つの大きな音の塊として存在している。彼らが「CRUNKY DAUGHNUT」で歌う"パンクとはこうだ"という"こうだ"を、目、耳、体が実感している。

ハイペースに突き進んだライブは、観客をかけ声という形で巻き込んだ「I CAN'T TRUST A WOMAN」「GET THE GLORY」で一気にマックスまで加速し、その後も失速することなくアンコールを迎えた。再びライトがついたステージに現れるメンバーに、観客は両手を上げて喜びを示す。対するステージからの答えは、本編と変わりない限りなくパワフルで熱いビートだ。PONが抑え切れないテンションをたたきつけるようにマイクスタンドをけり倒し、CHARMYは全身で絶叫する。「戦争反対」「聖者が街にやってくる」で7曲ものアンコールが終えんを迎えるころには、ダイブしようとステージに上がってくる観客とそれを防ごうと必死の形相で押し返すスタッフの戦いが繰り広げられ、ステージには場内に混在するすべての人間の感情が、ものすごい勢いでうごめき絡み合う。トータルで1時間のライブは、時間的には短かったが、そこで生まれたエネルギーは「これを人類のために役立てる手段はないものか…」と思わせるものだった。

音楽によって感情を爆発させ、一触即発のスリルを運ぶラフィンのライブは、最近あやふやになりつつある"パンク"という音楽を明確に思い出させてくれた。とてつもない興奮のるつぼとなったこの空間を生み出す。シンプルなメロディーと軽快なビートを怒涛(どとう)のごとく聴かせるカッコ良さで勝負する。観客が暴れる、危険な行為(?)に走る。それらはすべて、彼らがパンクロックをやるパンクバンドであることの証(あかし)なのだ。

ラフィン・ノーズはちまたにゴロゴロしているパンキッシュなバンドではなく、生粋のパンクバンドなのである。

[文・山田純子　撮影・金原 誠]

Play list

1. WARZONE
2. CRUNKY DAUGHNUT
3. THROW YOUR JOB
4. FILL MY HEAD
5. FALL OUT
6. FRUSTRATION
7. THIRTY
8. BASEMENT CLUB
9. ABORTION
10. LAUGHIN' ROLL
11. NO FEAR
12. BABY GO
13. BROKEN GENERATION
14. I CAN'T TRUST A WOMAN
15. GET THE GLORY

encore

- E1 WONDERFUL TV
- E2 DANCE I (REALLY)
- E3 LETS ROCK
- E4 HELL HOME
- E5 PARADISE
- E6 戦争反対
- E7 聖者が街にやってくる

GARGOYLE

January 5th 1996 at KOBE CHICKEN GEORGE

1996年1月5日　神戸 チキンジョージ

Play list

1 CRAZY SADISM
2 脳内自殺
3 ±0
4 ときめき
5 雨ニモ負ケズ
6 太陽の翼 〜イカロス〜
7 潜在的幻狂覚無差別覚醒菌感染者
8 澄緑祭
9 神意 〜Providence For Decadance〜
10 ナチュラル
11 ダメージ
12 サムライダイナマイト
13 れなにうゆじ
14 NO GAS
15 風の街

encore
E1 約束の地で
E2 HALLELUYAH

encore
E3 人の為
E4 あめえば　らいふ
E5 完全な毒を要求する

「帰ってきたぞ、神戸〜!!　1年ぶりにまた帰って来れたことがうれしいぜ〜!!　去年も年明けの一発をここチキンジョージやって、それから今度は3月に帰ってくる予定だったんですけど帰って来れなくてね。ようやく1年たって神戸に戻って来ました。うれしいです。僕たちと同じくらいここに来るのを楽しみにしてくれていたみなさんがいて、こうやってみんなに会えて良かったよね。なんかもう、感無量やわ」

96年1月5日、2回目のMCでKIBAが発した言葉。去年の1月に神戸を襲った震災後、約1年を経て営業が再開されたここチキンジョージでのステージがガーゴイルにとって、今年の初ライブとなった。

スモークの立ちこめる真っ暗なステージの右手から幾本かの緑色のライトが照らされ、ガーゴイルのライブではおなじみのSE「ナウシカ・レクイエム」が神々しく流れる。チキンジョージで久しぶりに聴くこのSEに心をとらえられたかのように、観客が一斉にメンバーの名を叫び出す。幾重にも重なる声が、私の全神経を目の前のステージに集中させる。KIBA以外のメンバーが姿を現し始まったのは、力強くも高らかに響きわたる「クレイジー・サディズム!」の掛け声。いつもなら心地よい疲労感いっぱいのライブ後半を彩るはずのこの曲が、今夜のスタートを飾るナンバーとして選ばれたのだ。観客も負けじと掛け声をステージに返し、両者の掛け合いへと発展。すさまじい一体感が最高潮に達したかというその時、KIBAが現れ、持ち前の鋭さで「クレイジー・サディズム!　クレイジー・サディズム!」の声を浴びせかけ、客席へダイブ。スピード感あふれる攻撃的なサウンドが、KIBAのダイナミックなアクションとともに場内を圧倒した。勢いは増幅しながら激しくヘビーなナンバー「脳内自殺」へ。KATSUJIの速いビートに食いつくようにTOSHIのベースが絡むと、重低音の迫力が下半身にくる。続く「±0」は打ち込みを導入し、タイトなドラムに導かれダンサブルに始まったが、KENTAROと与太郎のギターは分厚い音でアグレッシブに迫り、KIBAのボーカルも豪快でロック色を前面に押し出す、あくまでも彼ら流のダンスナンバーだ。

アップテンポでグイグイ押し寄せる曲が続く前半、ステージ上のメンバーはそれぞれの持ち味で観客をあおり、ダイレクトに返ってくるリアクションを楽しみ、笑顔さえ浮かべている。

「…この曲は一緒に力になって生きていきたい、そんなあなたたちのことを歌った歌です。『太陽の翼』」。KIBAの言葉に観客は拍手を贈り、メロディアスなイントロダクションが静かに流れる。KIBAは包み込むようなメロディーに乗って歌詞をかみしめながら歌い、ファンはその姿を静かに見守る。

疾走感たっぷりのビートにあおられて2本のギターが勢いよく突っ走る「神意」で叫びにも似たコーラスを怒涛(どとう)のごとく聴かせた後、感極まった観客の盛大な歓声が飛び交う中、KIBAが口にした言葉は「やってすごくドキドキするわ。どうしようもなくみんなに会いたくてここに来たから、その気持ちを音で出せてるかなと思ってドキドキする。それは伝わってますか?」。「伝わってる〜!!」と歓喜に満ちた声で叫ぶファン。

KENTAROの力強いアコースティックギターのストロークからスタートした最新アルバムのタイトルナンバー「ナチュラル」は、本当なら去年の3月にここで、どこよりも早く演奏されるはずだった曲である。優しくも切ないサウンドは、KIBAの突き抜けるように真っすぐ響く歌声によって温かく大きな力を感じさせた。

後半に突入するとアルバム『natural』からのアップテンポでノリのいい「ダメージ」「サムライダイナマイト」が披露され、続く「れなにうゆじ」ではメンバーそれぞれのメッセージとともに観客との掛け合いバトルが始まった。両者の大バトルはまるで永遠に続きそうなほどエスカレート。笑顔であおるメンバー、笑顔で反応する観客。激しいながらもアットホームなその雰囲気は、"これぞライブのだいご味!"と言える熱い快感を沸き上がらせる。

KIBAの「ラスト〜!!」の雄叫びとともに始まった「風の街」。聴く者の心をグサリと突き刺すような"生"に対する意味深長な詞と、スピーディー&メロディアスなサウンドは、メンバーそれぞれの感情が音に声に込められ強烈なエネルギーとなって襲いかかる。

KENTAROのギターソロに差し掛かるころ、何かKIBAの様子がおかしい。客席を背にうずくまっている。ボーカルのパートになっても歌おうとしない。彼の様子を察したメンバーは代わりに歌いフォローする。どうしたんだろう?　もしや…。やがてこちらを向きマイクを捨てた彼は、涙で顔をグシャグシャにしながら歌うが声は聴こえない。彼を見守り合唱する観客の歌声が温かく場内を包む。

KIBAが泣いていた…。彼がどんな気持ちで涙を流したのか、その心情は彼自身にしか分からないことだ。だけど、それはきっと待ち続けた1年間の思いと今自分がそこに立っていること、そしてそれを楽しんでくれている人たちが目の前にいることへの喜びがふつふつとこみ上げてきた心の動きが涙となって現れたのだろう。それが証拠に彼がその後見せたのは、この上ない笑顔だった。

1年のブランクを経てようやく実現したチキンジョージでのライブ。自身にとって特別な意味を持つ今回のステージで彼らが見せ聴かせたのは、感情をむき出しにした人間のありのままの姿と、その感情からストレートに生まれるロックサウンドだった。「感無量やわ」の言葉が物語るように、冷静さを欠き最後には涙を流して自分の気持ちを訴えてきたKIBA。サウンドクオリティーうんぬんが大した意味を持たないほどの衝撃と感動を与えられたとともに、音楽の持つ"偉大な力"を思い知らされたライブだった。

［文・村田圭子　撮影・金原 誠］

インタビュアー・西原 朗　撮影・金原 誠
INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA　PHOTO by MAKOTO KANEHARA

INTERVIEW

明石昌夫

MASAO AKASHI

B'z、ZARD、大黒摩季、T-BOLAN、WANDSなど数多くのアーティストの作品にアレンジャーやサウンドプロデューサー、マニピュレーター、プレイヤーとして参加し、またあるときはサポート・ベーシストとして、B'zのステージに立ち、彼らの音楽を根底でしっかりと支える明石昌夫。

昨年後半からは、従来のスタジオワークに加えてパーマネントなバンド、明石昌夫グループ（AMG…アー・マー・ゲー）の活動をスタートさせ、そのレッド・ツェッペリン直系のブルージーなハードロックサウンドは、すでに何度か行われたライブで聴く者を圧倒、期待の高まるバンドのデビューアルバムは現在レコーディングのまっただ中という。

このマルチに活躍するアーティストはいったいどんな人物なんだろうか？

僕たちが待ち望んでいた、”Jロックシーンの表舞台への意欲“をにわかに見せ始めた彼に、自身の”過去・現在・未来“について話してもらおう。

僕たちのころの”ロック“は”生き様“と”人生観“があった

●明石さんというと、B'zのライブやアルバムでベースを弾いているし、マニピュレーターとしてクレジットされている時もあるし、当然アレンジャーでもあるし、またギターを弾いているのも見たことがあって、本当に幅広い人なんですけど、そもそもはベーシストなんですか。

明石（以下A）：…そうですね。でも、ベースを意図的に弾いていなかった時期もありますし、ひと言で”ベーシスト“っていうんじゃないと思いますね。

●じゃあ、音楽を最初に始めた時持った楽器は。

A：親父がクラシックが好きで…、4歳の時にバイオリンを習ったというタイプなんですよ。僕みたいに子供のころからクラシックを聴いてて今音楽をやってるっていう人は結構多いんです。B'zの松本君もそれで、彼の作る曲にはそんな影響が出てると思うんですけどね。MANISHで曲を作っている西本も、やっぱり親父さんがクラシックが好き。僕もそういう系統なんですよ。4年生ぐらいの時にピアノ習ったりとか、そのころからポップスとかは好きだったんですけどね。それで、小学校の6年生の時に小遣いを貯めて、ドラムを買ったんですよ（笑）。

●いきなりドラム。

A：僕の小学校の卒業文集の作文に載ってますよ。「将来ドラマーになりたい」って（笑）。あのころはタイガースやスパイダースとかのグループサウンズが全盛期でしたね。アメリカのミーハーでC調でポップなモンキーズっていうバンドが好きだったり…。中一の時にフォークギターを買ったんですけど、その後に、なぜかベースを買うんですよ。ちょうどそのころ、大阪に移って来て、それから30歳で東京に行くまでは大阪でいろんな形でバンド活動してました。

●始めて買ったロックのレコードを覚えてますか。

A：僕が一番最初に買ったロックのLPはC.C.R（クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル）の『コスモス・ファクトリー』っていうアルバムでしたね。この間CDで買い直して、今聴くとメチャクチャいいんですけど、そのころはその良さが全然分かんなかったんですけどね。

その後は、グランド・ファンク・レイルロード。『グランド・ファンク・ライブ』ってすごく売れた2枚組のライブアルバムがあって。このバンドはトリオ編成で楽器が三つしかないじゃないですか。僕、ギターとベースとドラムと歌と全部のパートをコピーしましたよ。

●すべての楽器をコピーしないと気が済まなかった（笑）。

A：…っていうかすべてのパートをバラバラに聴けたんですよ。小学校6年生ぐらいのときに親父がステレオを買って、クラシックを聴きながら「これがトロンボーンの音だ」「これがトランペットで、これがフルートの音だ」って教えてくれるんですよ。言われると聴き取れるんですよ。「ああなるほどね。音はバラバラに聴けるんだ」って、そのときに気が付いて。親父の影響ってすごいありますよね。子供のころにも「全部の音楽は、全部ドレミで歌えるんだ」って教えてもらって、”相対音感“ってヤツなんですけど。それも、今だに役に立ってますからね。メロ譜取ったりするのメチャクチャ速いですから。

グランド・ファンクから、ディープ・パープル、レッド・ツェッペリン、マウンテンなんかに好みが広がって行きました。その後にフォーカスとか、PFMとかプログレにはまった時期があったんですよ。それでバンドがうまく行かなくてロックが急に嫌になって、ユーミンとか尾崎亜美を聴いていた時期もあったし。フュージョンに染まったり。

その後で突然、大阪のハードロック・ムーブメントがあって、そのころにやっぱりハードロックをやり出して。それからパンク系の奴とバンドやり始めて、27歳くらいの時に打ち込みを始めて当然の流れでダンスミュージックに行くんです。

●明石さんのロック界での永遠のアイドルっていうと。

A：マウンテンのフェリックス・パッパラルディとか言っておくとカッコいいですよね（笑）。あの人はキーボード弾いて、ベース弾いて、プロデュースもしてという人でしょ。何かバンドで音楽的に一番すごそうじゃないですか。気が付いたら、僕自身も結局そんな人になっているんですよね（笑）。それに、朝帰りしたところを奥さんに「どこで浮気してきたんだ！」って撃ち殺されたところなんかも、どうも他人とは思えない（笑）。

僕たちのころって”ロック“というのは”生き様“だったり、”人生観“だったりした時代だったから、基本的に「人の指図は受けねぇ」というのがロックだと思うんですよ。そんなこと言ってたらだれも相手にしてくれなくなるし、ビジネス的なこととか、人付き合いとかもあるから、そんなこと言ってられないし、そんなこと言わなくなったから、こんなに仕事できるようになったんですけどね（笑）。でも、基本はそうだと思うんですよ。そこは、絶対になくしてはいけないと思うんですよね。

●フェイバリット・アルバムは？

A：レッド・ツェッペリンの1枚目と2枚目ですね。B'zの松本君とも話してたんですけど、ジミー・ペイジが頭の中で考えているサウンドって今聴いても何年か進んでるんじゃないかと思えるくらいすごいんですよ。でも、結局、彼って弾けてないんですよね。すごいこと考えているんですけど、テクニックが付いてきてない（笑）。

B'zの『The 7th Blues』が僕にとって一つの集大成

●大阪でのバンド時代の後、東京に行ったときはもうアレンジャーとしての仕事をしていたんですか。

A：いえ、東京へ行く時はまだ単なるベーシストでした。クラブとかでベース弾いたりとかしてましたよ。今、CHAGE&ASKAのバックでドラムをたたいている菅沼孝三なんかと一緒にライブハウスを回ったりしてました。フルバンドでもベース弾いてましたから、そこで演歌の村田英雄さんのバックやったりとかね（笑）。髪の毛が長くて、ヒゲ生やしたり、ピンク色のベース持ったりして変だったでしょうね。ジャズもやってて、ウッドベースを練習させられたりとか。結局、それはものにならなかったんですが、この間B'zのツアーでエレクトリックアップライトベースを持った瞬間に弾けるとかラッキーなことがあったり（笑）。

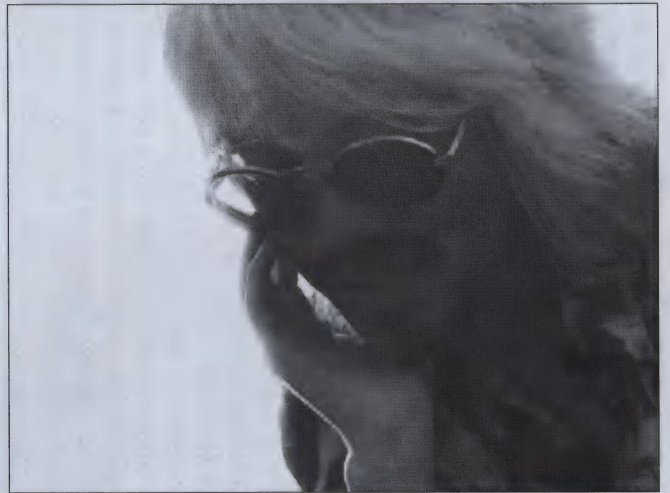
●練習がきっちり生きているじゃないですか（笑）。

A：世の中、損になることはないですから、みんな頑張りましょう（笑）。本当に、そうやってすごくいろんなジャンルをやっているんですよ。レゲエとかも、ボブ・マーレーを聴いていた時期もあったし。

まともな音がするリズムマシーンが出始めて、シーケンサーもある程度安くて、僕は根っから機械好きですから当然打ち込みとか好きになって機材を買いそろえたんですよ。それでデモテープを作り始めて…。自分で曲作って、自分で歌って、ベース弾いて4トラックレコーダーでデモテープを作って、いろんな人に聴かせた時に、「やってみないか」という声が掛かって今に至ると。

●じゃあ東京に行って、最初の大きいプロジェクトというのがB'zだったのですか。

INTERVIEW

明石昌夫

A:ええ。そのころは大きくなかったですけどね(笑)。

●最初にB'zの二人に会った時はどんな印象でしたか。

A:あの二人が出会うよりも前に、僕はそれぞれ別々に会っているんですよ。東京に行ってすぐに、「ベース弾けるんだったら、いいボーカリストがいるバンドがあるから手伝いに行ってくれないか」って言われて行ったのが稲葉バンドだったんですよ。それで稲葉君を紹介されて、訳の分からないハードロックをいっぱいやっていたんですけど、彼の声を聴いた瞬間にぶっ飛びましたね。「ワー」って叫んだ瞬間に「ロバート・プラントの成分が声の中にあるぞ。すごい声だなぁ」って。今ほどカッコ良くはなかったですけど、ルックスは悪くなかったから、売れるに違いないっていうか、こういうヤツが売れてほしいと思いましたね。

松本君は、僕がアレンジャーの仕事していたときに「スタジオミュージシャンのギタリストに松本って奴がいるんだけど」って言われて頼んだのが最初。その後、2、3回一緒に仕事をしたことがあったんで、彼とも知り合いだったんですよ。

それでB'zの1枚目のアルバムを作るときに、7曲ぐらい松本君が完ぺきにデモテープを作ってるんですよ。ちょうど打ち込みでオケを作るようになった時代で、彼はメチャクチャ打ち込みうまいんですよ。最近絶対にやりませんけど。ドラムフィルの打ち込みがすごくカッコいい。今となっては「自分でも信じられない」って言ってますけどね(笑)。

最初は、そのデータをスタジオのシーケンサーに移していく作業を手伝ってて、その中でアレンジを一緒にやるようになったんです。

●明石さんのアレンジャーとしての仕事はB'zから、どんどん広がったってことなんですね。

A:たまたま最初にB'zに関わっただけなんですけどね。その次の年にはZARDで、また次の年にT-BOLANになるのかなぁ。もう、あんまり覚えてないですね。大黒摩季のファーストもやっているし、WANDSのファーストもやっているし。

●自分自身をどんなアレンジャーだと思いますか。

A:アレンジャーというか、プロデューサーというのは、"全部自分の色に染めちゃう人"と"その人なりにやっちゃう人"という二つタイプがあって、僕はどちらもできちゃうんですよ。年のせいもありますけど、人の話をよく聞きますから僕(笑)。そのアーティストのやりたい音があれば、それをいくらでも反映して音を作っていける用意もあるし。また、音楽をいっぱい知ってますから、そういうふうにどんどん利用してもらいたいなってのもありますしね。だから、うまく使えばメチャクチャ面白いんです僕って(笑)。

●明石さんが今までアレンジに参加した曲って、それこそいっぱいありますが後世に語り継ぎたいような作品というのは?

A:僕にとってはB'zの『The 7th Blues』っていうのが、一つの集大成なんですよ。あれ以来、気が抜けたというか、やりたいこと全部やっちゃったからね。例えばビートルズっぽいクラシックのホーンセクションの感じを出したくて、トランペット、ホルン、トロンボーン、それもクラシック系も吹ける人を呼んできてもらってやったりとか、本当に好き勝手やったから僕にとってはモニュメントですよ。

ライブはメチャクチャ好きだから体が続く限りやります

●ベースプレイヤーとしての明石さんはB'zのライブで楽しそうにプレイしているんですが、基本的にライブは…。

A:メチャクチャ好きですよ。ライブは体が続く限りやるんじゃないですかね。

●スタジオとライブって比較できますか。

A:だれでもそうですけど、レコーディングの方が好きな人なんていませんよ(笑)。

●そうなんですか。

A:絶対にライブの方が好きですよ。でも、レコーディングをやらないと、次のツアーでやる曲がないじゃないですか(笑)。特に歌入れって辛くて苦しい作業だから好きな人はまずいないでしょ。歌詞を考えるのなんて大変だし、曲を考えるのも辛いし。ライブの方がお客さんがいるし、絶対楽しいです。

それに、中高生のころに僕が持ってた夢ですからね。自分がベース弾いて全国を回って、お客さんがいっぱいいて…。2千人ぐらいでも、死んでもいいと思ってましたから。今、何万人ですからねぇ。

●自分をどんなベーシストだと思いますか。

A:ロックベーシストですよ。ロックベーシストって結構少ないんですよ。簡単に考えるとロックのベースってあんまり面白くないんです。ベースは絶対にブラックミュージックですからね。モータウンですからね。チョッパーを無理矢理ロックでやっても主流じゃないですから。

少ないでしょ、ロックベーシストって。日本だとハウンド・ドッグの鮫島さんがそうですけどね。彼がカッコいいですね。あと、SLYの寺沢君はうまいですよね。彼はロックベーシストですよね。

●B'zの今回のアルバム『LOOSE』には一人のベーシストとして参加しているせいか、すごくベースの音で暴れてるって感じがするんですが。

A:あれはベースのことしか考えてないですから。全体のアレンジのことは考えてないです。やっぱりロックの基本なんですよね「俺が目立ったる」というのは(笑)。でも、結果的には良かったんですよ。松本君も僕をベーシストとしてだけ使ったら面白いんじゃないかっていうので、そうなったんですよね。彼もいろんなベーシストを試して、それで最後に僕を使ったんですよ。僕もやっぱり(アレンジから)外されていたから悔しいじゃないですか。結構そういう「ちきしょう」とか負けん気って大切で、ガンガンにやったんですよ。自分で聴いていいなって思いましたもん。全然、ベース弾いているだけの方がカッコいいって(笑)。

●TWINZERのシングル「STOP IN THE BURNIN' LOVE」も、ベースが暴れてますね。

A:その味をしめてからは、もう(笑)。TWINZERの今回のアルバムでも全曲ベー

スを弾いてて、結構あんな感じですよ。

"新しくてカッコいいもの"をやってみようかなと

●明石昌夫のこれからの話を聞かせてください。

A:いろんな仕組みが分かって、いろいろ仕事もして、幸い売れるようなこともいろいろできて、僕自身は今それとは違うところで何か面白いことができないかなって思ってるんですよ。例えば僕のサウンドって最初はシンセサイザーとかいっぱい入れていたじゃないですか。それがだんだん少なくなってきてて、『The 7th Blues』なんてあんまり入れてないんですね。ただ、そうすると音の雰囲気が暗くなってしまうんですよ。でもツェッペリンの「胸いっぱいの愛を」なんかは、シンセなんて一音も入ってなくて世界的にヒットしたわけだし、もちろんイーグルスの「ホテル・カリフォルニア」にも入ってないわけだし。

　時代がどうこうっていうんじゃなくて、ああいうヒット曲が日本でも出せないかなと思ってね。きっと今の日本の人たちもシンセが入って、メロディアスなのに飽きてはいるかもしれないと思うんですよ。それで何か新しい…と言うか、今までと違うことが出来ないかなぁと。シンセ入れるのも楽しめなくなってきちゃったから、今いろいろ模索中なんです。

　友達の漫画家と話しててよく思うんですけど、畑違いのアーティストと話すと面白いんですよ。二人でしゃべってることは表面的には全然違うんだけど、クリエイティブというレベルで言っている内容は一緒だってことがあったりしてね。レストランの料理長やってる友達と話していても、「自分が一生懸命に作ったものって人気がない」って(笑)。ポップなものや大衆芸能的な仕事をやっている人というのは、やっぱりそういうもんなんですよね。大衆の求めているプラスアルファと自分の求めているプラスアルファというのは、当然レベルが違うじゃないですか。でも、それで大衆の求めているプラスアルファの方がレベルが低いと思ったらダメなんです。いいものが作れないんですね。

　B'zだって、「BAD COMMUNICATION」から売れ始めたんですけど、あれは売れるために作ったんじゃなくて、売れることを全く考えずに、「究極のユーロビートを作ってやろう」と一生懸命作って、結果的にはそれで成功したんですよ。

●その新しいアクションの一つがAMGですね。今までは縁の下の力持ち的な存在だった明石さんが、パーマネントなバンドを作ろうと思ったきっかけは?

A:きっかけというか、自分のプロジェクトをやるっていうのは、5年ぐらい前から言ってて、それで何回かチャレンジしたことがあるんですけど…。もう3、4回目じゃないかな(笑)。ちょっと前にはtrfみたいなレイブサウンドをやろうとしていた時期もありますしね。今回ようやく具体的な形になったんです。

　僕には「こういうのがやりたい」というのがないんですよね。「こういうのいいね」ってだれかに言われたら、「そういうのだったら、こういうのがカッコいいんだよ」みたいなのはあるんですけど。それで「ブルース的なことが好きならそれをやってみたら」ってある人に言われた時に、今の日本の音楽の売れているものの中には、そういうのってないから、それを"新しくてカッコいいもの"としてとらえてくれないかなと思って、やってみようかなと。

●メンバーを紹介してもらえますか。

A:ベースが僕で、ギターは団篤史で、ボーカルが千葉恭司。パーマネントなメンバーはこの3人で、ドラムとキーボードは、サポートです。

●AMGのサウンドというのはメンバーが集まる前から、具体的に明石さんの頭の中にはあったんですね。

A:ええ、もう完全にそうですね。

●じゃあ、そのサウンドを想定しながらメンバーを探した。

A:そうですね。ギターの団は、予想外だったんですけど。彼なんか大阪じゃないと存在し得ないギタリストですよね。東京だったらバカにされて、相手にしてくれる人がいないですよ。ああいうタイプのギタリストが、あの年齢で1995年に存在するということ自体が、東京ではあり得ない。あんなギター持って、あんな太い弦張って、あんな音出して…。だから、関西はやっぱりいいなあって思いましたよ。

●ボーカルの千葉さんの印象はどうですか。

A:基本的にいいんですけど、まだまだこれからですよ。これから本腰を入れて、鍛えようかなと。

●今後、ドラムとキーボードに正式なメンバーを迎えて、5人のバンドとなることは?

A:ないですね(笑)。ドラムとキーボードって僕が基本的にできちゃうから、メンバーを決めちゃうと制約になっちゃう。「ドラムはこんな感じがいい。キーボードはこんな感じがいい」という明確な音が自分の中にあるんですよ。その自分のイメージの中のものを越える音を出せるプレイヤーがいれば、その人には喜んでメンバーになってもらいますけど。ただ、あんまり船頭が多いと収拾つかなくなっちゃいますから。でも、サポートに入っているキーボードの広原伸泰はいいですよ。才能もあるし。彼はミナミのクラブでバイショウ(演奏)しているのをスカウトしてきたんですよ。スタジオに呼んで弾いてもらって、そのテイクがそのままブルースのコンピレーションアルバム『J-BLUES BATTLE Vol.1』に入っているんですよ(笑)。

●その、アルバムに千葉恭司&団篤史名義で収録されてるカバー曲の「PALACE OF THE KING」も、基本的にこのメンツでのレコーディングだから、僕はAMGのサウンドをイメージする材料になると思うんですけど、あれってオリジナルとは全然雰囲気が違って、まるでレッド・ツェッペリンでしたね(笑)。

A:そうでしょ(笑)。コンピレーションって、要は目立ったもん勝ちでしょ。オーバーアレンジでもいいからっていうんで、気合を入れてガンガンにやろうと思って。頭は静かで、後で盛り上がってっていうのはドラマチックでカッコいいんですよ。これは必勝パターンです(笑)。

●大阪アメリカ村のグラン・カフェでのライブでは、4曲ぐらいオリジナルが聴けましたが、レコーディング中っていうアルバムは、やっぱりそんなタイプだと考えていいんですね。

A:そうですね。ツェッペリンの1枚目と2枚目を目指して(笑)。

●オリジナルナンバーは全部英詞だったんですけど、今後も?

A:最初のうちは全部英語です。別に「英語じゃないと」なんてこだわりはないんで、今後は日本語の曲もやろうとは思っていますけどね。ただ、一つのアルバムの中に英語と日本語の曲が混じって入っているというのは基本的にやりたくないな。

●詞でも何かを伝えたいと思う方ですか。

A:僕はもともと歌詞なんか全然聴かないというタイプの人間でしたから。稲葉くんも、昔はそうだったのに、今はとてもいい詞を書きますからね。歌詞は、あんまり書かないかもしれない。歌詞は才能ないもん(笑)。

●バンドはライブで育つって言うじゃないですか。今まで数回ライブを行っていますから、成長はかなり…。

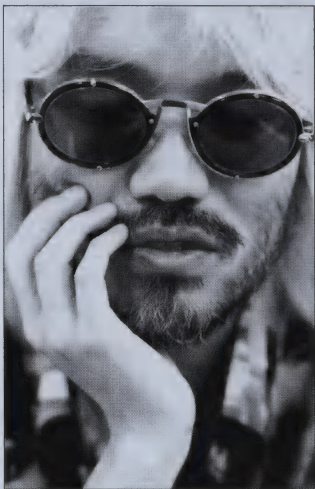
A:ありますよ。それはライブをやるたびに感じています。

●アルバムのリリースが楽しみなんですが、明石さんの今後の活動というのは、AMGの活動がメインになる。

A:リリースの後は当然バンドでのライブ活動は考えてるけど、やっぱりマルチなスタンスでいたいですね。プロデューサー的にも動きたいし、プレイヤーも体が動く限り続けたいと思ってます。

INTERVIEW

甲斐よしひろ

YOSHIHIRO KAI

某テレビ局の小さな控え室で行われた甲斐よしひろのインタビュー。あいさつ代わりに、今までに甲斐よしひろの記事が掲載されたジェイロックマガジン数冊を見せると、「今日は面白い話だけを書き抜いて記事にして下さいね。別に音楽のパブ(パブリシティー=広告)にならなくて全然いいですから。そういう面白い記事が結局パブになっていくんですから」と本誌の姿勢を後押しするかのような言葉を投げてくれる。

今年でデビュー22年を迎え、「ロックは生き方の音楽。人間を観せる音楽」と語る甲斐よしひろ。今までに築き上げてきた確固たる実績の上に胡座(あぐら)をかくことなく、常にチャレンジ精神でそれを踏み台にし、新たなサウンドアプローチを開拓し続けている。インタビューで返された”パブリシティー的“でない言葉の節々からも、そんな彼の生き様や人間性がはっきりと伝わってくるはずだ。

武藤の足4の字を表現者たちは見習わないとダメ

●ニューアルバムのタイトルを『GUTS』に決めた理由はなんだったのですか。

甲斐(以下K):全然説明がいらないすごくシンプルなタイトルを付けたかったんですよ。内容がシンプルでストレートにも関わらず、タイトルに説明がいるというのはキツいんで、タイトルを言えばみんなが納得できるものにしたかったんです。ということはインパクトもなければダメだしね。

神戸の地震とオウム以来、説明しなければいけないものって、何かしんどいじゃない。難解なものとか、ジャージーなものとか、そういうものって僕らはしばらくもういいでしょ。そのままの意味合いのやつが、そのまま入ってくる明解なやつの方がいいから、アルバムの内容もそうしたかったし、僕自身が今の時期に難解なものを聴きたくないんですよ。だから、自分が作るものも明解なのを作りたい。

●言われているようにアルバムの内容はシンプルでストレートなんですけど、それだけでは終わらない”太さ“や”根強さ“も感じるし、甲斐さんの声にも力があって、すごく突き抜けていますよね。

K:ロックミュージックって、基本的にテンションが高ければいいってものじゃないから。もちろんテンションが高くなければダメだけどね。言いたいことは分かるんだけど、もどかしくて伝わらないのって暑苦しいだけじゃない。そうじゃなくて、テンションは高いんだけど、明解に、打てば響くように伝わらないとね。そういうところ気を付けた。

”王道アメリカンロック“ってのを一応サウンドのキーワードにして、そこから外れないように、例え外れたとしても納得がいくような外れ方とかね。

●前作『太陽は死んじゃいない』は甲斐さんの20年以上にもなる音楽活動の中で、初めてプロデューサーを立てて作られていたんですが、今回は鎌田ジョージさんとの共同プロデュースなんですよね。

K:前作はシンガーに徹してたから。生ギターで弾いたデモテープをプロデューサーに渡して、サウンドは一切関与しないというやり方だったのね。今度は共同プロデュースだから、前にやった部分というものを進化させた形を取りつつ、新しいものを加えるというやり方でね。

ここで僕がまた一人でプロデュースするんだったら、あんまり前回のことに意味がなかったんだけど、やっぱり前回にやったテイストも続けつつやらないと。だから、デモテープのときからアレンジっぽく関与しているやつと、全くそうじゃなくただ生ギターのやつを渡したものとあるんですよ。

●ジョージさんを選んだ理由は?

K:さっきも言ったようなシンプルでストレートなやつをやりたかったという理由が一番大きい。”王道アメリカンロック“というキーワードを立てたときに、横を観れば一番近くにいいヤツがいるじゃないかと(笑)。彼とは1年ぐらい一緒にやってるんで、そういうバイブレーションが、いい意味で僕の脳ミソを冒しつつあったんだと思うんですよ。それと時代の読みということで、難解なものの方へ絶対に行かない方がいいだろうと、僕の直感がずっと言い続けていたから、そこでうまくマッチしたというかね。

僕はUWF(関節技など玄人好みの技を使いスポーツとしてのレスリングを目指したプロレス団体)が好きなんだけれど、あれだけ関節技がどうだと言っていた高田(UWFの設立者)を、武藤(アントニオ猪木が設立した”見せるレスリング“を追求したプロレス団体、新日本プロレスの主要レスラー)が足4の字固めで仕止めたりするわけでしょ(笑)。ホールド技としては一番古いタイプで、思いっ切りプロレス的なプロレス技で仕止めたという。あれは、もう大笑いじゃない。そのプランに感動するよね。次の試合では高田が勝ったんだけど、僕たちはそこに何ら意義を見いださないわけ。それを観てもそうだけど、やっぱり明解なものがいいんだよ(笑)。

パンクラス(UWFよりもさらにスポーツ的なレスリングを目指したプロレス団体)みたいに行くのもいいんだけども、行けば行くほど地味にしか感じないじゃない。地味なものが悪いと言うんじゃなくて、地味なものの危うさって、行き着くところまで行くと、そこでポキッて折れるでしょ。エンターテイメント性が、すごく薄くなっていると思う。「観客のことをどうでもいいと思っているんじゃない」と言われるギリギリの狭間のところへ行きたいんだろうけど、やっぱりこっちの方が分かりやすい。武藤の足4の字は、ここ10年ぐらいの伝説をすべてなきものにするぐらいのすごいプランだよね。たぶん、武藤はこのことばかり4カ月ぐらい考えたんだろうね。本当に感動した。このプランは、表現者たちはみんな見習わないとダメですよ。

エンターテイメントだからやっぱり人間を観せていかないと

●甲斐さんは今までに数多くアルバムや曲を作ってますが、やはりアルバム作りや曲作りというのは毎回チャレンジなんですか。

K:僕は完全にそうだね。金太郎飴みたいに、ずっと同じことを10年も続けていくヤツって信じられないもん。それは逆に買い手に対してサービスしていないと思う。2枚か3枚まで続けていくというのはサービ

インタビュアー・石田博嗣　撮影・金原 誠

INTERVIEWED by HIROSHI ISHIDA PHOTO by MAKOTO KANEHARA

スかもしれないけど、それ以上続けていくのはサービスの度合いを越しているよ。だって、いろんな見解があるけど、僕の見解は〝甲斐よしひろ〟という男のプロセスを観せることがテーマなんですよ。それは人間を観せるわけですから、人間変わらないわけないじゃない。ずっと同じような金太郎飴みたいな色のアルバムを出し続けるというのは、絶対この業界をバカにしていると思う（笑）。

20歳のときの音楽と、30歳のときの音楽が同じなのって…。変な話だけど20歳のときに作ったガールフレンドと30歳で付き合っている女性とでは、20歳のときってまだ〝ちんぴら〟で、30歳では〝レイディ〟なわけじゃない（笑）。その一点を取ったって、それぐらいみんな大人になって変わっていくわけだから、何かが変わらないとおかしいよね。〝商売〟をキーワードにするから、ずっとそこから離れないと思うんだ。もちろん経済的な裏付けは必要なんだけど、それが一番に来ることはないじゃない。

雑誌でも記事の2、3ページ後に広告が来ているのは嫌だもんね。雑誌を3年くらい読んでいると、そういう体質にも気付くでしょ。素人だってバカじゃないんだから。本当は、素人の人ほどすごい。真剣にお金出して買っているから。10代なんてお金ないじゃない。だから真剣だもんね。そういう人たちに、どうやって訴えかけていくかというと、やっぱり人間を観せていかないと、まずいと思うんだよ。自分が目いっぱい表現をしていても、結果が低調なときもあるよ。それは表現した後の問題であって、それに逃げないで真摯（しんし）に受け止めて、どう次に表現するかというところに生かせばいいわけだからね。僕は、いつもこれの繰り返しですよ。

●前作の曲なんですが「恋愛平行線」を聴いたときに、今の厳しい時代に生きる人の危機感というのをリアルに感じたんですよ…。

K：そんなに重たく感じたの？　プールサイドで出会った男と女を歌っただけなのに（笑）。でも、僕が持っている体質というのは、そういう体質だと思うんですよ。それをすごくポップなテイストで仕上げるという。

昔、亀和田武が「第三文明」に僕の評論を延々35ページ書いたりというのがあったんですよ。僕は自分の動機で曲を書くんだけど、曲ってその後は一人歩きじゃないですか。だから、百人が聴いたら、百人の動機で受け取ってくれるのが一番うれしんです。だから、僕はそう言ってもらって内心はうれしいんですよ。

曲ってそういう形で聴いた人の中に入り込んでいかないとダメだと思うしね。「今度の曲、いいじゃん」とひと言で終わらせるヤツっているじゃない（笑）。それだって「どうもありがとうございます」って思うもん。みんな自分のスタイルで生きて、自分のスタイルの感性で感じていかないと。曲でも雑誌でも推理させるのって大事な要素だと思うしね。それは別に古畑任三郎が好きだというわけじゃないですよ（笑）。

●さっきの「恋愛平行線」もそうなんですが、甲斐さんの詞には、きっちり時代背景が織り込まれていますよね。

K：でも昔からそういうとこってない？　この間、何かのTV番組に出てたら、いきなり本書きか何かが質問するコーナーがあって「甲斐さんの歌で『アウトロー』なんて、正に去年一年のようですよね」って。それは普遍的なことしか書いていないから、「接点はいっぱいあるでしょう」としか答えられないもんね。まさか震災とオウムのことを予想していたわけじゃないもん（笑）。

でも、僕は小学校の3、4年ぐらいからストーンズの大フリークできていますから、「ストリートファイティングマン」をいつか自分の形で書きたいとか、「悪魔を憐れむ歌」みたいな歌を自分の形で書きたいというのはずっとあるわけよ。考えてみればストーンズってずっと普遍的なテーマを歌ってきているわけじゃない。そういう影響ってあるかもしれないね。すごくジャーナリスティックな視点とかで、ロック的なポイントをとらえるという。それこそがロックだから。ポップなことがロックじゃないもん。ポップも大事な要素なんだけど、何ら裏付けのないポップさって、どうしょうもないからね。やっぱりポップな裏付けにジャーナリスティックな部分がないとダメですよ。ロックって問題意識ということだから、問題意識がなくなるとダメなんだよね。僕はそれに10代のころから、はっきりと気付いていたの。20歳の終わりごろにこの世界に入ったんだけど、そのときはまだそんなふうには全然書けなかったのね。だけど3年、4年とそういうことばっかり考えてやっていると、できるようになってくるんだよ。せっかくできて、それが甲斐の持ち味になっているんだったら、変になくしたくはないというのがあるし、今も問題意識で曲を書いているんだったら、やっぱりその部分ってあるよね。

ロックを選んで良かったと思ってます

●以前、中島みゆきさんのアルバムのプロデュースを手掛けたりしていましたが、最近のアーティストでプロデュースをしてみたいアーティストっていますか。

K：日本人は全然いない。権利関係が面倒くさいというのもありますけどね。プロデュースということに関して言えば、一時期「渡辺満里奈いいなあ」ってのはあったけど、それはたまたま違う世界だから思うことであって、面白がって興味を感じるだけだよね。

…今、思い出したんだけど、一人いると言えばいる。ちあきなおみ。もう一回復活しないかなと思っていて、そのためにだったらどんな手助けしてもいいと思うね。

●好きなシンガーということで？

K：いや、彼女は完全に天才だから。都はるみが今の形で延々行くんだったら、僕らとの音楽的な接点は感じられないからね。ちあきなおみだけは、その接点を延々持ち続けている唯一の天才肌だから、みんなで何とかしなければいけないなという感じがしますね。

●ちょっと抽象的な質問になるんですが甲斐さんにとって〝ロック〟とは？

K：やっぱり問題意識ですよね。ロックは生き方の音楽だから。人間を観せる音楽だから。ロックを選んで良かったと思ってますよ。

●そのロックを選んだ甲斐さんは、今まで22年間に渡って作品を発表し続けているわけですが、やはりその過程にたくさんの転機があったと思うんですが。

K：それは自分では分からない。「これが転機だ」って思うのは他人なんじゃない。それは聴き手の感じ方ですよね。すごく変わったと思っても、実は、その構想は2年も3年も前から考えてあったりするしね。

●逆に自分から大きな変化をもたらせようと思ったりは？

K：それはありますよ。一緒に音楽を作っていたクルーを一切その時点で変えちゃうとかね。そういう意味では甲斐バンドのときに日本人のエンジニアではなくて、ニューヨークへ行ってボブ・クリアマウンテンというホール&オーツとかブルース・スプリングスティーンをやったエンジニアとやり始めたときというのは、最大の転機だったけどね。

僕は、本当はあの時点でバンドをやめようかと思ったんですよ。でもメンバーのこととか考えたときに「やめられないな」と思ったの。自分のもろさに、自分でガックリきましたけどね。「俺ってやさしいんだな」って（笑）。それまでは自分のことを〝ひどいヤツ〟だと思ってましたから。僕は表現であきらめたりするようなことは絶対に嫌だし、出来る限りやってきてないんだけど、それは諦めざるを得なかった幾つかのうちの一つですね。でも、それは今思うとそうして良かったと思うけどね。やっぱり表現というのは情愛というのも、その裏付けの中にないと絶対にダメだからね。

●甲斐さんも例えばニール・ヤングみたいに、今までのイメージを全部捨ててしまって、全く新しいものに取り組んだりする可能性はありますか。

K：あそこまで極端にしませんが、ニール・ヤングの気持ちは良く分かりますよ。表現ってテーゼをやったらアンチテーゼをやって、それでテーゼに戻ってという幅で、その振幅度合いの幅が広い方が表現力としては強いんですよ。だから僕は「ヒーロー」を書いたときに次は絶対に「アウトロー」しかないと思ったもん。いつできるかは自分には分からなかったから、その間にだれか

に気付かれたらやだなと思ってたし、取材受けてても、そのことだけは口に出さないようにものすごく気をつけてた（笑）。

聴衆のリアクションがあってネクストにつながっていく

●この本が出るころは『Welcome To The "GUTS FOR LOVE"』ツアーも最後の渋谷公会堂を残すだけなのですが、すぐその後に『オルタネイティブ　スター☆セット"GUTS"』というクラブツアーが始まりますよね。

K：キーボードを外してアンプラグド的なスタイルでやるんですけれど、それは去年の4月から3カ月間新宿のパワーステーションでやったスタイルなんですよ。そのときはキーボードが入っていたけど、これはさらにキーボードを外して余計なぜい肉をそぎ落とすという非常に危険なパッケージです。僕にはどうなるのか予想もつきません（笑）。

これもさっきのテーゼとアンチテーゼじゃないけど、ホールツアーじゃないんだったらやっぱり対極的なやり方じゃないと面白くないでしょ。ホールツアーはもちろんガンガンにパワフルにやるけどね。

●甲斐さんにとって"ライブ"というのは？

K：自分の作った楽曲をレコーディングをして、ライブでオーディエンスのリアクションを受けたところで初めて定着していくもんだと思っているから…。そうじゃないと自分の作った楽曲に決着が付かないんです。結局、そのリアクションを体感して、ネクストにつながっていくと思っているからね。

だからライブは一番大事な場所だと思ってます。ローリング・ストーンズがずっと続けていて、ビートルズが途中で止めちゃったというのは、すごく大きな部分だよね。やっぱり、それはビートルズは解散するよ。ストーンズが解散しないのは、やり続けているからだよね。ライブで、次の創造とか、自分の中の意識とかを確認しているんだよ。そういうところで帰結させると、次に行けるのね。だからチャートで1位になったり、何百万枚売れたということでは、あんまり帰結しない。生きた客を目の当たりにして初めて、これはどれだけいいんだとか、これはスベっているんだとかが見える（笑）。

●そんなライブに対する気持ちというのは、年齢を重ねるごとに変わるものなのですか。

K：それは全然変わっていない。ずっと体を鍛えたりしているのは、いつもそれが頭の中から離れないからじゃないかな。アルバムを作った後にはライブをするもんだと、自分の中で一貫オートメーションシステムになっているからね。だから、どんどん20代よりも30代よりも声が出てきているし、体はどんどん丈夫になってきているんですよ。

僕は体を鍛え始めたのは28歳ぐらいからなんですけど、それはこのままいくと本当に体が衰えると思ったからなのね。そのころってツアーで年間120本ぐらい全国を回っていて、それでまた平気だったんですよ。いつでも朝の6時まで酒飲んで、4時間寝て10時に起きて、列車で移動してその間に若干の仮眠を取って、リハやってコンサートやるわけじゃない。終わったら朝の6時までまた飲むんだから。

●体にいいはずがないですね。

K：そういうのを8年ぐらいやってたわけですから。それで北海道かどこかのホールのすごく寒い楽屋で、ノドにタンみたいなのが詰まったから、ペッて吐いたら真っ白な洗面台に真っ赤な血痕（けっこん）が飛んだんですよ。それで体を鍛えなければいけないと思ったの。

今でこそジムに行くのってはやっているけど、そのころはロックミュージシャンが体鍛えるなんてもってのほかって感じだったから、黙ってやってましたよ（笑）。

●最後に、変化を続ける甲斐さんは今後どう変わっていきますか。

K：変わりゆくことが自分の中の望みですからね。そのプロセスをどう伝えるかというようなものだから、足4の字で仕止めるような感じだよね（笑）。だから最高のプランこそ最高の表現なんだよ。

INTERVIEW
甲斐よしひろ

SELECTEDARTISTS

ICE、Eins:Vier、ACTION、THE YELLOW MONKEY、生沢佑一、石田長生、忌野清志郎、Valentine D.C.、X JAPAN、大黒摩季、奥田民生、小沢健二、ORIGINAL LOVE、GARGOYLE、甲斐よしひろ、筋肉少女帯、久保田利伸、栗林誠一郎、GLAY、CRAZE、黒夢、QUNCHŌ、幻覚アレルギー、cornelius、米米CLUB、近藤房之助、ZARD、斉藤和義、坂本龍一、サザンオールスターズ、佐野元春、ZYYG、シーナ&ザ・ロケッツ、sheen、シェラザード、塩次伸二、SION、SIAM SHADE、JUDY AND MARY、JUN SKY WALKER (S)、少年ナイフ、SUPER JUNKY MONKEY、THE STREET BEATS、SPAED、SLY、妹尾隆一郎、ソウル・フラワー・ユニオン、Char、CHAGE&ASKA、Chap Chimes、CHARA、D.T.R、DEEP、T-BOLAN、DEEN、DER ZIBET、DOG FIGHT、TOMOVSKY、DREAMS COME TRUE、永井隆、長渕剛、nuvɔ:gu、NOKKO、PERSONZ、HYPERMVNIA、BOW WOW、BUCK-TICK、浜田省吾、浜田麻里、PAMELAH、B'z、PIZZICATO FIVE、BIG LIFE、氷室京介、FEEL SO BAD、FIX、BLOODY IMITATION SOCIETY、BLANKEY JET CITY、布袋寅泰、松任谷由実、THE MAD CAPSULE MARKET'S、MANISH、Mr.Children、media youth、modern grey、THE MODS、矢沢永吉、山岸潤史、憂歌団、LOUDNESS、RUFFIANS、LAUGHIN' NOSE、L'Arc~en~Ciel、LUNA SEA、渡辺美里、WANDS

(ニュースは96年2月現在)

1 ICE

2月7日にニューアルバム「We're In The Mood」をリリースした。ライブツアーは、4月5日仙台イズミティ21より、7日札幌ファクトリーホール、11日名古屋ダイアモンドホール、12日福岡スカラエスパシオ、15日大阪IMPホール、17日東京中野サンプラザで行われる。

No.1

Artist : ICE

2 Eins:Vier

3月24日、アクトシティ浜松で行われる「ミュージックコンテストin浜松 第2回ジャパンオープン」にゲスト出演。また、4月26日札幌ペニーレイン24を皮切りに、29日名古屋ダイアモンドホール、5月1日大阪メルバルクホール、9日東京日本青年館でライブが行われる。4月22日には、ミニアルバムのリリースも決定。精力的にライブを続けてきた、彼らの成長を目の当たりにする1枚になることは間違いなし！

No.2

Artist : Eins:Vier

3 ACTION

2月25日に神戸チキンジョージで行われたライブ以降は、現在のところ未定。次の動きに期待したい。

No.3

Artist : ACTION

4 THE YELLOW MONKEY

2月29日に話題曲「JAM」を緊急リリース！3月30日には、この最新シングルを含む全シングルのプロモーションビデオクリップ集「CLIPS」も発売する。5月17日埼玉戸田市文化会館からは大規模なツアーもスタート。5月19日鹿児島市民文化ホール、20日宮崎市民会館、21日熊本市民会館、23日長崎市公会堂、24日山口スターピアくだまつ、26日神奈川県民ホール、27日千葉市川市文化会館、29日神戸国際会館ハーバーランドプラザホール、31日三重四日市市文化会館、6月4日京都会館、15日福岡サンパレス、24日北海道厚生年金会館など、全国40カ所での公演が決定。

No.4

Artist : THE YELLOW MONKEY

5 生沢佑一

TWINZERのシングル「HOT TIME」(NHK-FMミュージック・スクエア オープニングテーマ)、3月21日にアルバム『STRANGE BLUE』をリリース。1年半の制作期間をかけられたこのアルバムは、テーマアルバム。"自分への開放"というサブタイトルがついていて、様々な視点から現代社会をとらえた作品が並んでいる。そしてルーツをうかがわせるレッド・ツェッペリンの「ROCK AND ROLL」もカバーされている。アルバムリリース後から全国でイベントも企画中。問い合わせはメルダック(03-3423-3022)まで。

No.5

Artist : 生沢佑一

6 石田長生

3月29～31日神戸チキンジョージでは、劇団リバット・アーミー第29回公演「レッドネックブルース」(音楽劇)に出演。また、3月にはオセアニア諸国を訪問する企画するらしい。春ごろにはベストアルバムの発売も予定しているそうだ。

No.6

Artist : 石田長生

7 忌野清志郎

ニューシングル「Good Lovin'」を引っ提げて、『TOUR 1996 リトル☆スクリーミング☆レビュー』を展開中。3月1日函館金森ホール、3日札幌ペニーレイン、4日旭川市民文化会館、6日帯広市民文化ホール、10日神戸チキンジョージ、12日愛媛県民文化会館、13日高知県民文化ホール、18日藤沢市民会館、20日長野NBSホール、22日金沢市文化ホール、23日名古屋ダイアモンドホール、29日クラブチッタ川崎、4月3日CLUB JAVY沖縄、5日宮崎イベントホール、6日大分トップス、8日長崎NIB出島、10日大阪IMPホール。

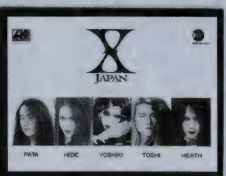
No.7

Artist : 忌野清志郎

8 Valentine D.C.

2月14日にミニアルバム『BRAND V.D.C.』をリリースした。それに合わせて展開中のトークイベント「meet the V.D.C.」は、3月2日函館あうん堂ホール、3日札幌自由空間ホール、9日BMGビクター名古屋営業所、10日東京BMGビクター。また、3月20日新潟O-DOから『BRAND V.D.C. TOUR』がスタート。3月22日大阪ウォーホール、29日市川クラブGIO、4月5日京都ミューズホール、6日名古屋クラブクアトロ、14日東京オン・エア・ウエスト。各地でパワフルな新作が聴けるはず！

No.8

Artist : Valentine D.C.

9 X JAPAN

コンサートツアー『DAHLIA TOUR 1995-1996』を展開中。3月13・14日名古屋レインボーホール、23日福岡ドーム(1月14日の変更分)、27・28日横浜アリーナ。2月26日にはすでにライブでおなじみになったハードな楽曲「DAHLIA」がニューシングルとしてリリースされた。

No.9

Artist : X JAPAN

10 大黒摩季

2月26日にニューシングル「あぁ」をリリースしたばかり。現在は次作品のレコーディング中。

No.10

Artist : 大黒摩季

No.11

Artist : 奥田民生

11 奥田民生

ツアー『イージューライダー』が3月22日府中の森どりーむほーるよりスタート。3月26日山梨県民文化ホール、28・29日渋谷公会堂、4月7日アクトシティ浜松、9・10日名古屋市民会館、12日グリーンホール相模大野、15日大分文化会館、16日熊本市民会館、17日長崎市公会堂、19日鹿児島市民文化ホール、22・23日北海道厚生年金会館。5月以降も1・2日福岡サンパレス、8・9日広島厚生年金会館、20日京都会館、21日神戸国際ハーバーランドプラザ、23・24日大阪厚生年金会館など、全国各地を細かに回る。

No.12

Artist : 小沢健二

12 小沢健二

コンサートツアーがいよいよスタート。2月29日浜松アリーナ、3月8・9日横浜アリーナ、13日札幌月寒グリーンドーム、18日広島グリーンアリーナ、21日名古屋レインボーホール、23・24日大阪城ホール、26・27日福岡国際センター、30・31日日本武道館。そろそろ新作のリリースも期待されるが……。

No.13

Artist : ORIGINAL LOVE

13 ORIGINAL LOVE

包み込むような温かさを持ったニューシングル「プライマル」は、もう聴いただろうか。現在は創作期間で、この新曲を上回る楽曲が田島の頭の中で渦巻いているらしい。期待して待っていよう！

No.14

Artist : GARGOYLE

14 GARGOYLE

3月24・25日渋谷オン・エア・ウエストからツアーがスタート。3月28日長野J、30日高岡もみの木ハウス、31日金沢バンバンV4、4月4日熊谷VOGUE、6日新潟CLUB RIVERST、9・10日札幌メッセホール、13日仙台バードランド、16日市川クラブGIO、17日横浜7thアベニュー、19日名古屋クラブクアトロ、21日神戸チキンジョージ、24日高知キャラバンサライ、25日松山サロンキティ、27日大分健楽夢TOP'S、28日熊本ジャンゴ、29日福岡DRUM Be-1、5月3日大阪ウォーホール、4日京都ミューズホール、7日岡山ペパーランド、8日広島ネオポリスホール。ツアーファイナルは未定。

No.15

Artist : 甲斐よしひろ

15 甲斐よしひろ

2月28日にニューシングル「レディ・イヴ」（TV番組『ダウンタウンDX』のエンディングテーマ）をリリース。現在は『Welcome To The "GUTS FOR LOVE"』ツアーを展開中で、残るは2月28・29日に渋谷公会堂のみ。3月17日高知ZE／YOからは、『オルタネイティブ スター☆セット「GUTS」』がスタート。3月19日高松オリーブホール、20日松山サロンキティ、22日京都ミューズホール、23日神戸チキンジョージ、26日札幌ファクトリーホール、27日仙台ビーブベースメントシアターで行われる。

No.16

Artist :筋肉少女帯

16 筋肉少女帯

東名阪ライブ『筋少リベンジ！ および新曲発表会』も3月3・4日新宿日清パワーステーションを残すのみ。3月6日には「リルカの葬列」から1年3カ月ぶりとなるシングル「トゥルー・ロマンス」、23日には約2年ぶりとなるオリジナルアルバム「ステーシーの美術」を発表。久しぶりに筋少ワールドに浸れることは間違いなし！

No.17

Artist : 久保田利伸

17 久保田利伸

年末年始に日本に帰ってきた以外は、ニューヨークでキャンペーン活動を行っている彼。次の動きに注目！

No.18

Artist : 栗林誠一郎

18 栗林誠一郎

引き続き楽曲制作中。

No.19

Artist : GLAY

19 GLAY

1月に発売されたツアー『BEAT out! '96』のチケットは、全国各地で30分でソールドアウト。そのツアーがいよいよ2月29日広島南区民文化センターよりスタートする。3月2日愛知県勤労会館、4・5日渋谷公会堂、7日大阪サンケイホール、8日福岡ももちパレス、26日新潟フェイズ、27日仙台市民会館、29日札幌市民会館。2ndアルバム『BEAT out!』の楽曲を、ライブで聴ける日が楽しみだ！

No.20

Artist : CRAZE

20 CRAZE

東名阪ライブ『UP COMIN' CRAZY DAYS』を展開中。2月27日愛知県勤労会館、3月3日は東京NHKホールで。同日ニューシングル「RISKY」もリリースされる。また、4月5日にはビデオ『CRAZE FILM CUSTOMIZE』をレーザーディスクと同時発売。昨年の1年間のライブを凝縮したドキュメンタリー的な内容で、ファンは必見だ。

No.21

Artist：黒夢

21 黒夢

注目のニューシングル「SEE YOU」を2月21日にリリースした。このシングルは1曲入り。12月の武道館で披露された「COMICAL」、アルバム『feminism』に収録されていた「くちづけ」のニューバージョン「KISS」が収録されている。3月3日には、イベント『ホット・サウンド・ジェネレーション』(大阪城ホール)に出演。

No.22

Artist：QUNCHŌ

22 QUNCHŌ

引き続き、L.A.にてレコーディング中。

23 幻覚アレルギー

2月21日、プロデューサーに元ジキルのKENを迎えた新作『「D」のススメ』をリリースした。現在は、ツアー『BOLLOCKS TO EVERYONE 1996 TOUR』を展開中で、3月4日京都ミューズホール、6日松山サロンキティ、7日広島ネオポリスホール、9日熊本ジャンゴ、10日福岡Be-1、12日岡山ペパーランド、16日長野J、17日新潟O-DO、19日札幌ペッシーホール、21日函館金森ホール、23日仙台バードランド、4月4日名古屋クラブクアトロ、5日大阪ウォーホール、8日新宿日清パワーステーション。

No.23

Artist：幻覚アレルギー

24 cornelius

オフ。

No.24

Artist：cornelius

No.25

Artist：米米CLUB

25 米米CLUB

3月1日にシングル「STYLISH WOMAN」をリリース。ホーンセクション、BIG HORNS BEEのツアー『FRIDAY NIGHT SPECIAL '96 "BHB FUNK LOVE"』も各地で展開されていて、3月15日渋谷オン・エア・イースト、29日福岡イムズホール、4月12日新宿日清パワーステーション、26日大阪ウォーホール、5月10日新宿リキッドルームで行われる。

No.26

Artist：近藤房之助

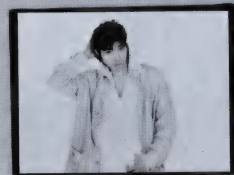
26 近藤房之助

かねてから計画されていたTHE GRUB STREET BANDのレコーディングのためロンドンに向かう。また2月21日にリリースされたオムニバスアルバム『江戸屋百歌撰』に参加している。

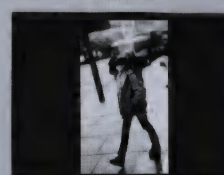
27 ZARD

アルバムのレコーディング中。ボーカルの坂井泉水がFIELD OF VIEWのニューシングル「DAN DAN 心魅かれてく」の作詞を手掛けている。

No.27

Artist：ZARD

28 斉藤和義

2月28日にニューアルバム『FIRE DOG』をリリースする彼は、2月中全国キャンペーンで大忙し。ライブツアー『お待ちなさい』も4月5日福岡クロッシングホールを皮切りに、6日広島南区民文化センター、8日大阪厚生年金会館、9日名古屋ダイアモンドホール、18日札幌サンプラザホール、22日仙台市民会館、23日新宿厚生年金会館で行われる。

最近またまた愛車が爆発。気持ちよくドライブを楽しんでいると、ボンネットから煙が…、強烈な爆発音と共に車はストップ。それ以降バックギアに入れるとエンストする彼の車は、前進しかできなくなったらしい。

No.28

Artist：斉藤和義

No.29

Artist：坂本龍一

29 坂本龍一

ただいまトリオ編成のアルバムを制作中。

No.30

Artist：サザンオールスターズ

30 サザンオールスターズ

レコーディング中。ただし彼らだからこそ、長い目で期待しておいた方がよさそう…。今年中には聴けるか!?

No.31

Artist : 佐野元春

31 佐野元春

新曲『楽しい時-FUN TIME』が、テレビ朝日系TV番組「ビートたけしのTVタックル」(毎週月曜・20：00～)のエンディングテーマとしてオンエア中。3月1日から東京有楽町マリオンミュージアムで行われるアートイベント「イレーヌ・メイヤーの世界」では、イメージ音楽制作担当として参加している。パワフルなライブを各地で展開し「今度のバンドはすごい」と多くの声が続々と届けられたツアーも無事終了。彼のホームページ内の「ライブレポート」でも公開されている。また3月上旬にカルチャーマガジン「THIS」が発売になる。

No.32

Artist : ZYYG

32 ZYYG

ニューアルバム『Noizy Beat』をリリース。そしてついに彼らが、3月26日福岡DRUMBe-1、4月4日横浜CLUB24、6日市川CLUBGIO、13日前橋CLUBFLEEZにてライブを行う。今後の精力的な活動を期待しよう。

No.33

Artist : シーナ&ザ・ロケッツ

33 シーナ&ザ・ロケッツ

ニューアルバムのレコーディング中。また、大阪ウォーホールで行われる『ROCK'N'ROLL NEVER DIE VOL.2』に出演。3月1日にワンマンライブを行う。

No.34

Artist : sheen

34 sheen

96年はライブ中心に活動する予定で、まずは4月2日大阪バナナホール、5月30日渋谷オン・エア・ウエストでライブを行う。パーカッションの松本宏幸が原付免許試験を24回目にしてめでたく合格。急に試験が受けられなくなったり、遅刻したりと理由はあるようだが24回は驚異だ。またメンバーの中でいつもだまされ役の彼は、現在岡久津兄に「カールの新製品"焼き肉鉄板味"っておいしいけど、雨期限定商品だから冬は食えない」とだまされているらしい。きっと6月ごろまで彼は信じ続けるだろう。

No.35

Artist : シェラザード

35 シェラザード

未定。

No.36

Artist : 塩次伸二

36 塩次伸二

3月4日静岡浜岡町レストラン椿、5日新大久保サムデイ(バースデーライブ)、8日高円寺JIROKICHI、9・10日横浜ブルースカフェ、23日高円寺JIROKICHIでライブを行う。

No.37

Artist : SION

37 SION

引き続き創作期間中。

No.38

Artist : SIAM SHADE

38 SIAM SHADE

NHKポップジャムのオープニングテーマにもなっているニューシングル「TIME'S」が好評。3月10日広島ネオポリスホールからは、ツアー『スーパーKAZUMAウルトラ博士の大冒険'96』がスタート。3月12日福岡DRUMBe-1、13日熊本ジャンゴ、15日名古屋ダイアモンドホール、16日大阪ウォーホール、19日仙台ビーブベースメントシアター、21日新潟OIDO、26日札幌ペニーレイン24、30・31日新宿日清パワーステーション。4月1日には、もう一日パワーステーションでのライブが決まった。

No.39

Artist : JUDY AND MARY

39 JUDY AND MARY

2月19日にシングル「そばかす」をリリースしたばかり。絶好調のアルバム『MIRACLE DIVING』を堪能できるツアーは、2月28・29日福岡サンパレス、3月2日広島厚生年金会館、4日倉敷市民会館、6日大阪城ホール、13・14日日本武道館、18日新潟テルサ、19日石川厚生年金会館、21日名古屋国際会議場センチュリーホール、24日長崎市公会堂、26日鹿児島市民文化ホール、29日那覇市民会館で行われる。3月中旬にはソニーマガジンズより「J.A.M.BOOK」を発売。ライブ写真、インタビューなど充実した内容だ。

No.40

Artist : JUN SKY WALKER(S)

40 JUN SKY WALKER(S)

レコーディングもいよいよ最終段階！ 3月中旬からロスにて海外レコーディングに突入。5月にシングル、7月にアルバムをリリース予定だ。今年のジュンスカは、目が離せない！

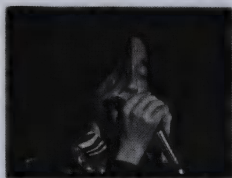
No.41

Artist : 少年ナイフ

41 少年ナイフ
6月に公開予定の映画の挿入歌を企画制作中。ニューアルバムの制作準備もいよいよ大詰め段階だ。

No.42

Artist : SUPER JUNKY MONKEY

42 SUPER JUNKY MONKEY
3月1日下北沢SHELTERでAGGRESSIVE DOGSと共に『超猿暴犬生人宴』と題したライブを、8日には新宿リキッドルームでDROOP、CLANE、DEMI SEMI QUERVAR他と『Lady Steady Go 2』ライブを行う。4月12日にはニューアルバム『地球寄生人//PARASITIC PEOPLE』とライブビデオ『HOLY MOTHER OF MEATLOAF Vol.2 5/14/'95』をリリース。5月からCD発売記念ツアーを予定している。

No.43

Artist : THE STREET BEATS

43 THE STREET BEATS
2月29日、大阪ウォーホールで行われるイベント『ROCK'N'ROLL NEVER DIE Vol.2』に出演。3月9日には渋谷公会堂で『GET TOUGH! '96』と題したライブを横道坊主と行う。3月6日にはシングル「GOOD HEART,BIG HEART」を、3月23日にはアルバム『LOVE,LIFE,ALIVE』をリリース。また、4月から広島FMでOKIーがパーソナリティーをやるらしい。内容が楽しみだ。

No.44

Artist : SPAED

44 SPAED
ニューシングル「LED MOON」(日本テレビ系「全日本プロレス中継30」のエンディングテーマ)をリリース。現在メンバーは3rdアルバムのレコーディングに入った。メンバー全員が作曲を手掛け、それぞれの曲を持ち寄ってヘッドアレンジの作業に入っている。

No.45

Artist : SLY

45 SLY
3rdアルバムのプロデューサーであるマックス・ノーマンが年末年始に来日し、熱いプリプロダクションを行った。曲に関しては、もちろんアメリカリリースを念頭に置いていて、ハードでアグレッシブな新しいスタイサウンドが期待できそうだ。3月からはレコーディングを開始。今夏には、アルバム、ライブビデオがリリース予定だ。

No.46

Artist : 妹尾隆一郎

46 妹尾隆一郎
妹尾バンドとして3月1日伊那グラムハウス、2日松本ラ・ルーズ、3日飯田CANPASに、ローラーコースターとしては19日新大久保サムディ、23日高円寺JIROKICHIに出演。その他にも5日神戸楽屋、9日東中野キング・ビー、10日横浜ブルースカフェ、24日高円寺JIROKICHI、29日京都ラグでもライブを行う。

No.47

Artist : ソウル・フラワー・ユニオン

47 ソウル・フラワー・ユニオン
ソウル・フラワー・モノノケ・サミットのCD『アジール・チンドン』はもう聴いただろうか？ 3月16日神戸チキンジョージ、20、21日新宿日清パワーステーションでは、ソウル・フラワー・ユニオンとしてライブを行う。

No.48

Artist : Char

48 Char
引き続き創作活動中。2月21日にオムニバスアルバム『江戸屋百歌撰 子 1996／NEZUMI』をリリースした。このアルバムは、毎年江戸屋レコードが個性的な10アーティストを集め、彼らの楽曲を特別編集して、21世紀まで続く壮大なロック歌集を作ろうという一大プロジェクト。今年のテーマは「ブルース・ギター」で、近藤房之助、山岸潤史、石田長生、仲井戸麗市などが参加している。

No.49

Artist : CHAGE&ASKA

49 CHAGE&ASKA
コンサートツアー『SUPER BEST 3』も大好評を得て終了。2月19日には、ニューシングル「river」(TBS系ドラマ「リスキーゲーム」主題歌)をリリースした。また『CHAGE&ASKA ASIAN TOUR 2』と題して、3月22日シンガポール、4月3・4日ホンコンでライブを行う。

No.50

Artist : Chap Chimes

50 Chap Chimes
2月29日に大阪ファンダンゴでライブを行う。

51 CHARA
3月より、岩井俊二監督の映画の撮影に入る。いろんな方面で才能を発揮する彼女。活動の幅は広がるばかりだ。

52 D.T.R
ボーカルの竹内が脱退！ 今後の展開についての詳細は次号にて。

53 DEEP
引き続き創作期間中。春ごろから、本格的にレコーディングに入る予定だ。

54 T-BOLAN
テレビ朝日系「オリンピッククイズ 燃えろアトランタ王」のオープニング曲に新曲が、エンディング曲にあの名曲「Heart of Gold」がニューアレンジでオンエアされている。チェック！

55 DEEN
フジテレビ系「ドラゴンボールGT」のエンディングテーマとして、ニューシングル「ひとりじゃない」がオンエアされている。この新曲のリリースは、3月下旬から4月上旬になる予定だ。

56 DER ZIBET
3月23日に12枚目になるアルバム『キリギリス』とベストアルバム『アリ』をリリース。ツアー『アリとキリギリス』は、4月13日CLUBGIO市川、16日新潟O-DO、17日金沢VANVANV4、19日大阪バナナホール、21日福岡DRUMBe-1、23日岡山ペパーランド、25日名古屋クラブクアトロ、30日新宿日清パワーステーション。新作を引っ提げてのツアーは、昨年以上にパワフルな内容になるに違いない！

57 DOG FIGHT
ニューシングルのレコーディング中。夏前には新作が聴けそうだ。

58 トモフスキー
現在、レコード店などで『FREE SOLO LIVE』(すべて入場無料)を展開中。3月3日タワーレコード名古屋パルコ店、4日名古屋HMV、10日仙台HMV、20日タワーレコード新宿ルミネ店。23日新宿&池袋HMV、24日タハラ町田ジョルナ店、25日タワーレコード渋谷店。3月21日には、アルバム『ネガチョフ&ポジコフ』をリリースする。ライブは、4月18日神戸チキンジョージ、19日大阪クラブクアトロ、21日名古屋クラブクアトロ、27日新宿リキッドルーム。現在彼はインターネットのホームページを制作中。詳細は次号にて！

59 DREAMS COME TRUE
4月にリリース予定のニューアルバムのレコーディング中。完成が楽しみだ。

60 永井隆
アルバムのレコーディングの予定。神戸Kiss-FMでオンエア中のラジオ番組「FUTURE PARADISE」(毎週土曜日・14：00～)では、彼が大好きだったウルフマンジャックをイメージしたDJを行っている。自らが選曲に携わり、彼ならではのR&Bの隠れた名曲を数多くオンエア中。3月29日には、新潟燕3条BIG BEAT HALLでライブを行う。

61 長渕剛
最新アルバム『家族』が発売中。次の動きに注目が集まる！

62 ニューヴォーグ
3月29日福岡DRUMBe-1より『Children Coup d'etat 1996』がスタート。3月30日広島ネオポリスホール、4月1日大阪ウォーホール、3日名古屋ダイアモンドホール、5日仙台ヤマハホール、7日札幌ペニーレーンホール、11日新潟DO、14日東京オン・エア・イーストでメジャーデビュー後初のツアーが展開される。

No.51
Artist : CHARA

No.52
Artist : D.T.R

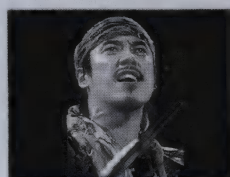
No.53
Artist : DEEP

No.54
Artist : T-BOLAN

No.55
Artist : DEEN

No.56
Artist : DER ZIBET

No.57
Artist : DOG FIGHT

No.58
Artist : TOMOVSKY

No.59
Artist : DREAMS COME TRUE

No.60
Artist : 永井隆

No.61
Artist : 長渕剛

No.62
Artist : nuvɔ:gu

63 NOKKO

夏ごろにリリース予定のニューアルバムのレコーディングを3月中ごろまで続行中。今回のテーマは、骨太なロックと前作『colored』の浮遊感をミックスした感じ。ファンが期待する以上の作品を届けてくれそうだ。レコーディング終了後は、久しぶりにビデオクリップ制作に入る予定。こちらも注目を集めること間違いなし!

64 PERSONZ

4月から5月にかけて『COME ALIVE TOUR! 1996』と題した10周年スペシャルライブを全国で行う。春ごろには初のライブアルバムをリリース予定で、今年は一段とアグレッシブに動き回るパーソンズが期待できそうだ。

65 ハイパーマニア

3月12日に渋谷エッグマンでライブを行う。「青春の断片」がエンディングテーマとして流れているテレビ東京系「昼どき! 見聞録」(毎週土曜・11:30〜)も要チェック!

66 BOW WOW

現在曲作り期間。メンバー全員、黙々と(?)作業中だ。3月末よりレコーディングに入り、夏ごろには新作シングル&アルバムをリリース予定。次号では、驚くような情報が期待できそう。

67 BUCK-TICK

彼らの新事務所「バンカー」が設立された。デビュー当初より所属した事務所を離れ、BUCK-TICKは96年を新たにスタート。長引いていた曲作り期間を終え、いよいよアニイとユータのリズム隊がスタジオ入りしリハーサルを開始した。2月より全員がスタジオ入りし、レコーディングリハーサルに突入。3〜4月にかけて、シングル&アルバムを制作する予定だ。前作『Six/Nine』の完成度が高かっただけに、新作でどんな世界を聴かせてくれるのか想像するのは難しいが、とにかく楽しみにしていよう。待望のツアーは、夏ごろに行われるかも!?

68 浜田省吾

2月29日にビデオ『ROAD OUT "MOVIE"』&CD『ROAD OUT TRACKS』をリリース。また、TFM出版より彼のバイオグラフィーから、ツアーのMC、演奏曲目リストなど、活動の集大成とも言える「浜田省吾辞典」が発売される。

69 浜田麻里

3月11日にニューアルバム『Persona』をリリースする。久しぶりのアルバムは、内容が楽しみだ。

70 PAMELAH

ニューシングル「I shall be released」(テレビ朝日系「音楽ニュースHO」エンディングテーマ)をリリース。このリリースに合わせ全国キャンペーンも行う予定。ラジオから彼らの声が聞こえてくるかも…。同時にアルバムに向けてのレコーディングも行っている。

71 B'z

3月6日に両A面のニューシングル「ミエナイチカラ〜INVISIBLE ONE」「MOVE」(進研ゼミ中学講座CMソング)をリリース予定。そしていよいよ3月15・16日グリーンドーム前橋を皮切りに、ツアー『LIVE GYM'96 spirit LOOSE』が始まる。今回はアリーナクラスの会場をメインにこれまで以上にすごいライブが展開されそうだ。3月20・21日浜松アリーナ、25・26日広島グリーンアリーナ、29・30日神戸ワールド記念ホール、4月6・7日アスティとくしま、9・10日愛媛県県民文化会館、17・18日横浜アリーナ、23・24日新潟市産業振興センター、27・28日石川県産業展示館、5月2・3日名古屋レインボーホール、8・9日仙台市体育館、11・12日盛岡アイスアリーナ、18・19・21・22日国立代々木競技場、28・29日大阪城ホール、6月1・2日真駒内アイスアリーナ、11・12日大阪城ホール、15・16日名古屋レインボーホール、20・21日日本武道館、25・26日マリンメッセ福岡、29・30日鹿児島アリーナ、7月5・6日沖縄コンベンションセンター。

72 PIZZICATO FIVE

3月20日にニューシングル「ベイビィ・ポータブル・ロック」(日産ミストラル・キャンペーンソング)をリリース。同時にアナログ盤も発売される。

73 BIG LIFE

2月1日をもってドラムの足立が脱退! 当分の間は、サポートメンバーでライブを行っていく。3月16日オン・エア・ウエスト(イベント)、31日渋谷エッグマン(ワンマン)で新しい彼らを見てみよう。

74 氷室京介

順調にニューアルバムのレコーディングを行っている。とっておきのロックンロールを作っているとのことで、待ち遠しいリリースは春ごろになりそうだ。

No.63

Artist :NOKKO

No.64

Artist : PERSONZ

No.65

Artist : HYPERMANIA

No.66

Artist : BOW WOW

No.67

Artist : BUCK-TICK

No.68

Artist : 浜田省吾

No.69

Artist : 浜田麻里

No.70

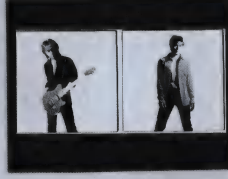
Artist :PAMELAH

No.71

Artist : B'z

No.72

Artist : PIZZICATO FIVE

No.73

Artist : BIG LIFE

No.74

Artist :氷室京介

75 FEEL SO BAD

着実に実力をつけている彼らの神髄が発揮された、シングル「いつも心にFIRE」をリリース。ユーモアあふれるカップリング曲「気の毒」も必聴だ。待望のライブも、5月16日福岡DRUMBe-1、18日大阪ウォーホール、25日渋谷オン・エア・イーストで決定した。

76 FIX

ギターのSHOJIがプロデュースした別冊少女コミック「アムネジア」のイメージアルバムを3月25日にリリース。さらに彼がプロデュースした新人バンド、ROUAGEのメジャーシングルもリリースされる。スタジオワークが増えているように見える彼らだが、夏にはドカンと花火を打ち上げる予定。今はその準備段階らしい。

77 BLOODY IMITATION SOCIETY

ニューアルバム『LOUD MAN』を3月23日にリリース。3月前半からは、収録曲「BAD DICTION」のプロモーションビデオもオンエアされる。4月6日熊谷VOGUEからはツアーもスタート。8日仙台バードランド、10日札幌カウントアクション、12日新潟O-DO、14日大阪ロケッツ、15日岡山ペパーランド、17日福岡DRUMBe-1、20日名古屋ハートランド、22日渋谷クラブクアトロで行われる。

78 BLANKEY JET CITY

メンバーはそれぞれ創作活動中。そんな中、中村達也はDJに挑戦。浅井健一はギターを持ってパリへ行き、路上演奏で小銭をかせいできたらしい。今は今後の活動再開に期待するのみ!

79 布袋寅泰

2月28日にリリースするニューアルバム『King & Queen』を引っ提げて、3月9・10日の神奈川県立県民ホールよりツアーがスタート。3月13・14日京都会館、21・22日大宮ソニックシティ、29・30日名古屋センチュリーホール、4月3・4日福岡サンパレス、6・7日鹿児島市民文化第一ホール、10・11日宇都宮市文化会館、15日石川県厚生年金会館、19日群馬県民会館、24・25日静岡市民文化会館、30日浜松アクトシティー他。

80 松任谷由実

全国ツアー『KATHMANDU PILGRIM』が大好評。3月18・19日大宮ソニックシティー、22日和歌山県民文化会館・25日宇都宮市文化会館、26日群馬県民会館、29日アスティーとくしま、30日愛媛県民文化会館、4月1日高知県民会館、2日香川県民ホール、4・5日京都会館、7日福井フェニックスプラザ、8日石川厚生年金会館、12日釧路市民文化会館、13日帯広市民文化ホール、16日青森市文化会館他。

81 THE MAD CAPSULE MARKET'S

3月23日にアルバム『4 PLUGS』からされた「WALK!」が日本語バージョンでシングルカットされる。3月19日熊谷VOGUEからは、ツアーがスタート。先月決定していた3月20日前橋クラブフリーズ、22日クラブチッタ川崎、25日神戸チキンジョージ、26日広島ネオポリスホール、28日福岡クロッシングホール、31日仙台ビーブベースメントシアター、4月2日札幌ペニーレイン24、4日新潟フェイズ、6日名古屋クラブダイアモンドホールに加えて、4月7日大阪IMPホール、29・30日東京赤坂ブリッツが決定。見逃すな!

82 MANISH

シンプルな中にも彼女達ならではのポジティブなメッセージが秘められた新作「この一瞬という永遠の中で」。ずっとレコーディング中の二人だが、最近キーボードの西本が、マックでのサンプリングにはまっている。その成果が詰まったアルバムは、春ごろにリリース予定。

83 Mr.Children

シングル「名もなき詩」が注目を集める中、ニューヨークにて新作のレコーディングを続行中だ。夏前にはリリースされるか!?

84 media youth

新宿ロフトで3月15・16・17日に行われるライブで、新曲「BROKEN VIOLET」の別バージョンプロモーションビデオにマル秘情報の入ったビデオを入場者全員にプレゼント。また、ゴールデンウィークに東宝洋画系にてロードショーの「ルパンⅢ世 DEAD or ALIVE」のエンディングテーマに決定したニューシングルを4月中旬にリリース。

85 modern grey

シングル「Kiss Me」に続き、3月6日にアルバム『GREEN』をリリース。ビデオコンサート(無料)は、3月8日HMV横浜、9日HMV池袋、12日仙台NTTタウンページハウス、15日岡山表町FAN-Qビル3Fホール、16日HMV大阪、17日HMV名古屋、20日熊本マツモトレコード。4月12日福岡DRUMBe-1からは、ツアー『GREEN』がスタートする。4月13日熊本ジャンゴ、21日札幌メッセホール、23日仙台ビーブベースメントシアター、25日金沢AZホール、27日大阪クラブクアトロ、28日名古屋クラブクアトロ、5月17日渋谷オン・エア・イースト。

86 THE MODS

現在ニューアルバムのレコーディング中だが、その完成を待たずしてツアー『LIVE ESPECIAL 5』が決定。5月4日名古屋ダイアモンドホール、6日神戸チキンジョージ、7日福岡クロッシングホール、10日大阪ウォーホール、12日東京赤坂ブリッツ。

87 矢沢永吉
4月のビッグプロジェクトに向けて始動開始。心して待て!

88 山岸潤史
引き続きニューオリンズにて活動。2月末からは、L.A.にてクンチョーのレコーディングに参加。2月21日に発売された『江戸屋百歌撰』にも参加している。

89 憂歌団
2月25日にシングル「ゲゲゲの鬼太郎」をリリースした。この曲は、もちろんテレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」のオープニングテーマだ。

90 LOUDNESS
いよいよレコーディングに突入。すでに30曲近くある新曲は、バリエーションに富んでいて、今までのラウドネスにはなかったビックリするような曲も聴けそうだ。
また高崎晃のソロアルバムも3月よりレコーディングに入り、6月ごろリリースの予定。前作の延長を行く世界に加え、新たなるゲストミュージシャンとのコラボレーションによる曲、かねてから定評のある高崎のドラムプレイも聴けそうで、完成が楽しみだ。さらに5月に発売されるプレイステーション対応のゲームソフト「カート・グランプリ~アイルトン・セナ メモリアル・ソフト~」の音楽制作を高崎が行うことになり、その中のメインテーマにはラウドネスの新曲が決定! アルバムに入らない曲もあり、ファンは要チェックだ。

91 RUFFIANS
3月15日に大阪ファンダンゴでライブを行う(with コンベックス・レベル)。また、朝日放送のTV番組「金曜玉手箱」にて、2月3日のライブの模様とインタビューがオンエアされる予定。お楽しみに!

92 LAUGHIN' NOSE
4月1日に大阪QOO、2日東加古川STAR DANCE、4日京都ミューズホールでライブを行う。4月5日には、大阪ベイサイドジェニーで行われるイベント『RHYTHM,RHYME & CORE Vol.4』に出演。

93 L'Arc~en~Ciel
3月9日にライブ写真集「heavenly photographs」を、3月21日に武道館でのライブビデオ『heavenly~films~』をリリース。全国ツアー『キスミーヘヴンリィ'96』は、4月3日結城市民文化センターよりスタートする。4月6・7日日比谷野外音楽堂、11日市川市文化会館、14日宮城県民会館、15日秋田市文化会館、17日札幌市民会館、18日旭川市公会堂、23日新潟テルサ、24日金沢市文化ホール、26日大阪厚生年金会館、27日名古屋市公会堂、5月1日京都会館、3日広島アステールプラザ、5日熊本県立劇場、6日鹿児島市民文化ホール、8日福岡市民会館、10日愛媛県民会館、12日岡山市民文化ホール、13日高知県民会館、15日栃木県総合文化センター、16日郡山市民文化センター、21日浦和市文化センター、23日長野県民会館。

94 LUNA SEA
いよいよ3月25日にニューシングル「END OF SORROW」をリリース。大ヒットした前作「DESIRE」に勝るとも劣らない強力なナンバーだ。カップリングはアルバム未収録曲「TWICE」で、その待望のアルバムは4月22日発売予定。熱い期待に応える充実した作品を届けてくれそうだ。

95 渡辺美里
順調に新作のレコーディングを続けている。

96 WANDS
両A面のニューシングル「WORST CRIME~About a rock star who was a swindler」(TBS系「COUNT DOWN TV」オープニングテーマ)「Blind To My Heart」をリリース。さらに研ぎ澄まされたこの2曲には、彼らの明日への提示が見え隠れしている。3月中旬には、ファン待望のベストアルバムもリリース予定だ。

企画・構成 **ジェイロックマガジン**
directed by J-ROCK magazine

イラストレーション **山木俊幸**
illustrated by TOSHIYUKI YAMAKI

album credit

毎月何百枚と市場に送り込まれて来る数々のCDの中から手にした1枚。あなたは、まずこの作品のどの部分に目をやるだろうか。最初は、自然に目に飛び込んでくるジャケット。そして歌詞カード（最近はブックレット形式が主流）？　では、その歌詞カードのどこを見る？アーティストの写真を見て、次に歌詞を読む？　その後は？　…ここで、きっと「写真、歌詞以外のところは見ない」という答えがたくさん返ってくるだろう。

お気に入りのアーティストの楽曲が聴けて、どんなことを歌っているのか歌詞を読んで確かめて、アーティストの写真もたん能できれば、〝彼らの音楽〟を楽しむということに関しては十分なのかもしれない。でも、本当にお気に入りのアルバムには、そんな接し方だけで満足できるだろうか。実はその自分にとって大切な作品をさらに楽しむ方法がまだある。歌詞カードの後ろの方に必ずと言っていいほどある、作品が完成するまでに携わった人たちの名前のクレジットページがそれ。何度か目をやったことがあっても「〝ミキサー〟や〝エンジニア〟って何？」とか、「〝SPECIAL THANKS〟のか所だけ読んでいる」という人が大半だろうし、マニアックな領域だと顔をしかめるかもしれない。でも、このクレジットの意味する内容が少しでも分かるようになれば、「この人知っている」「この人○○のアルバムでもやっていた」と新しい発見があったりしてなかなか面白いし、それが分かったからといってけっして聴こえてくる音楽が変わるわけではないが、自分が感動している音楽がどんなふうに出来上がったのかが、うっすらと見えてくる。つまりその作品をより深く理解して、そのCDから流れ出る音楽とさらに一体化することができるはずなのだ。

今回の『フィーチャー』は、そんなCDの歌詞カードにあるクレジットに着目し、作品が完成するまでの作業と、そこに携わる人たちの役割について説明したいと思う。

アーティストや作品によってクレジットされている項目の数は大きく変わってくる。比較的クレジットされている項目が多く、読者が持っていそうなバクチクの『Six/Nine』とグレイの『BEAT out!』のクレジットを例にとって、それらの項目を説明してみたい。

CASE STUDY 1

BUCK-TICK are

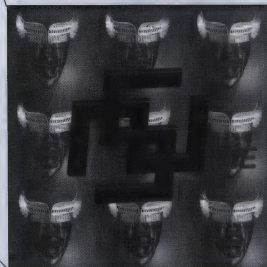
SAKURAI ATSUSHI
vocals, backing vocals, sax
IMAI HISASHI
guitars, noise, vox, backing vocal
HOSHINO HIDEHIKO
guitars, keyboards
HIGUCHI YUTAKA
bass
YAGAMI TOLL
drums, percussion

additional musicians
SUSANNE BRAMSON
backing vocals & arrangement
Recorded by GARY STOUT
at MASTER ROCK STUDIOS,
U.K. coordination-LYNNE HOBDAY(AM U.K.)
ASKA STRINGS
electric & acoustic violin, arrangement
YOKOYAMA KAZUTOSHI
keyboards, programming, manipulate
ISSAY (by the courtesy of BMG VICTOR)
vocal
KAKEHASHI IKUO
tabla

A recorded & mixed by
HIRUMA HITOSHI
B additional engineers
FUJISHIMA HIROHITO
ISHIZUKA SHINICHI
C assistant engineers
ARAI KENICHI
TANIGAWA HIROSHI
recorded & mixed at
SOUND SKY STUDIO
SOUND SKY KAWANA
SOUND ATELIER
AOBADAI STUDIO
AVACO STUDIO
CATS STUDIO
MASTER ROCK STUDIOS
CRESCENTE STUDIO
D mastering edit
YAMAZAKI KAZUSHIGE
director
J. TANAKA

E promotor
TOYOSHIMA NAOKI
SHIMIZU YOSHINARI
F artist management
SHAKING HANDS, INC.
SHIMOKAWA HAJIME
KIZAWA TSUTOMU
G guitar & bass technicians
MINEMORI KAZUTAKA
H drum technicians & tuner
SHIGA MITSUHIRO
AZAMI SHIGEO
executive producers
MURAKI TAKAFUMI
TAKAGI OSAMU

I SAKAGUCHI KEN
art direction & design
ROBERT LONGO
the Origin of the cover visual:JERK FACE
J M-HASUI
artist photography
K EZIMA
CG operator
HIROAKI DOI
HIROAKI SAITO
design
YAGI TOMOHARU
styling
TANIZAKI TAKAYUKI
hair & make-up
TOMIOKA MASAHIRO
SOSHI YUICHIRO
L coordination

M Special Thanks
FERNANDES
GRECO
LUDWIG
HOOK UP
BOW'S GUITAR GALARY
TRANS WORLD
SHIMURA SHOZO
ARAI KAZUYUKI
MATSUKI AKIO (ISHIBASHI GAKKI)
NARA TOSHIHIRO
HURRYS TOYA
THEORY STUDIO

BUCK-TICK : Six/Nine

A レコーディッド・アンド・ミックスド・バイ〜 (RECORDED&MIXED BY 〜)

ドラム、ベース、ギター、ボーカルなど色々な音をそれぞれパート別に録音し(RECORDED)、一つひとつの音のバランスや音質を調整しながら1曲にまとめ上げる(MIXED)といった作業を行った人。この作業によって、音にエコー(残響効果)を付けたり、ボーカルにエフェクトをかけて声をひずませたり、特定の音を前面に出すなど様々な処理がなされ、バラバラに録音されたそれぞれのパートの音が1曲としてまとめられる(この作業をミックスダウンと呼ぶ)。ここで出来上がったテープをマスターテープという。アーティストによっては、RECORDEDとMIXEDの作業ごとにエンジニアが分けられている場合もある。

●HIRUMA HITOSHI:バクチク『Six/Nine』、ルナシー『MOTHER』、ラルク・アン・シエル『Tiarra』、スーパー・ジャンキー・モンキー『キャベツ』(MIXEDのみ)、グレイ「Yes,Summerdays」他
●MICHAEL ZIMMERLING:グレイ『BEAT out!』、ブランキー・ジェット・シティ『SKUNK』、ジュディ・アンド・マリー『ORANGE SUNSHINE』他
●TOM DURAK:黒夢『feminism』、グレイ『BEAT out!』(RECORDEDのみ)、ジュディ・アンド・マリー『ORANGE SUNSHINE』他

B アディショナル・エンジニア (ADDITIONAL ENGINEER)

Ⓐをメインで行う人がレコーディングに来られない時に、ピンチヒッターとして参加した人。アーティストによっては、曲や曲の部分ごとにエンジニアを変えることもあり、その人がアディショナル・エンジニアとクレジットされることもある。

C アシスタント・エンジニア (ASSISTANT ENGINEER)

Ⓐの作業を補助的に行った人。

D マスタリング・エディット (MASTERING EDIT)

Ⓐの作業で完成したマスターテープに収録されている曲を、音質などを調整してCDに収録するという最終段階を手掛けた人。マスタリング・エンジニア(MASTERING ENGINEER)ともいう。この作業では、楽曲の他にもインディックス・ナンバー(CDプレイヤーに表示される曲のNo.)や演奏タイムなどの情報がCDにインプットされる。

●KAZUSHIGE YAMAZAKI:バクチク『Six/Nine』、ニューヴォーグ『SENSUAL WORLD』、ザ・マッド・カプセル・マーケッツ『4 PLUGS』、大槻ケンヂ『I STAND HERE FOR YOU』他
●MASAO NAKAZATO:ルナシー『MOTHER』、オリジナル・ラヴ『RAINBOW RACE』、デルジベット『GREEN』、スーパー・ジャンキー・モンキー『キャベツ』、ヴァレンタインD.C.『BRAND V.D.C.』他

E プロモーター (PROMOTOR)

レコード会社の宣伝担当者。このCDの販売を促進のために、TV、ラジオ、雑誌など様々なメディアに働きかける。

F アーティスト・マネージメント (ARTIST MANAGEMENT)

アーティストのレコーディング、ライブ、プロモーションなど、すべての面においてのスケジュールをトータルに管理する人。アーティストの所属している事務所やマネージャーがクレジットされていることが大半。

G ギター・アンド・ベース・テクニシャンズ (GUITAR & BASS TECHNICIANS)

ギターやベースのチューニング(調整)をする人。また、アーティストがイメージする音に適した機種や、その音を出すためのノウハウをアドバイスしたりもする。ADVISERとクレジットされることも多い。

H ドラム・テクニシャンズ・アンド・チューナー (DRUM TECHNICIANS & TUNER)

Ⓖと同じで、ドラムの音の具合を調整したり、アドバイスする人。

●ルナシー『MOTHER』のDRUM ADVISERにはそうる透がクレジットされている。

I アート・ディレクション・アンド・デザイン (ART DIRECTION & DESIGN)

ジャケットや歌詞カード、パッケージなど、CDのビジュアル面を統括して考え(ART DIRECTION)、それを制作すること(DESIGN)。

●SAKAGUCHI KEN FACTORY:バクチク『Six/Nine』、ルナシー『MOTHER』、ザ・マッド・カプセル・マーケッツ『4 PLUGS』、ディープ『燃える車に胸は傷むかい』他
●MASAAKI FUKUSHI:氷室京介『SINGLES』、ニューヴォーグ『SENSUAL WORLD』、ヴァレンタインD.C.『BRAND V.D.C.』他
●信藤三雄:ミスター・チルドレン『Atomic Heart』、ブランキー・ジェット・シティ『SKUNK』、オリジナル・ラヴ『RAINBOW RACE』他

J アーティスト・フォトグラファー (ARTIST PHOTOGRAPHER)

ジャケット内に使用されている写真を撮影しているカメラマン。人物と物に分けて、別の人が撮ったりする場合もある。

●M.HASUI:バクチク『Six/Nine』、ドリームズ・カム・トゥルー『DELICIOUS』他
●BRUNO DAYAN:ルナシー『MOTHER』、デルジベット『GREEN』、クレイズ『BE CRAZY』他
●MIKIO ARIGA:ディープ『燃える車に胸は傷むかい』、ビーズ『LOOSE』他

K シージー・オペレーター (CG OPERATOR)

コンピューター・グラフィック(CG)でジャケット制作を行った場合に、コンピューターの操作をした人(デザイナー自身がコンピューター上でデザインすることも多く、特にクレジットされていない場合が多い)。

L コーディネーション (CORDINATION)

ジャケット制作に関わるカメラマン、デザイナー、スタイリストなどの組み合わせを考える人。ジャケットのビジュアルイメージは、アーティスト&作品のイメージにつながるので、このバランスはとても重要である。

M スペシャル・サンクス (SPECIAL THANKS)

このCD制作においてアーティストが感謝したり、お世話になった人や社名、楽器のメーカーなどがクレジットされている。よく読んでみるといろんなアーティストの名前がクレジットされており、交友関係やフェイバリットアーティストが分かる。黒夢のインディーズ時代のアルバム『亡骸を…』には“Miss.RIHO MAKISE”という名前があり、ザ・イエロー・モンキーは敬愛する“MIC RONSON”を常にクレジットし、『smile』では吉井和哉が過去に演じたキャラクター“Jaguar”と“Mary”の名前もあった。

その他の専門用語

レコーディング・エンジニア (RECORDING ENGINEER)

プロデューサーの指示のもとに、録音機器全般の操作を行い、音をテープに収めていく人。RECORDED BY〜、RECORDED & MIXEDのRECORDEDをする人と同じ。

●TAKASHI AONUMA:シャム・シェイド『SIAM SHADE II』(SECOND ENGINEER)、ニューヴォーグ『SENSUAL WORLD』、クレイズ『BE CRAZY』他

リマスタリング・エンジニア (RE-MASTERING ENGINEER)

一度マスタリングが行われてCDに収録された曲を、内容はそのまま音質などの調整だけをやり直して曲を一新する人。ベストアルバムやシングル曲がアルバムに収録されているときによく見かける“リマスタリング”というクレジットがこの意味。

シンセサイザー・プログラマー (SYNTHESIZER PROGRAMMER)

シンセサイザーで欲しい音を作り出すために機械をコントロールする人。プログラマー、マニピュレーターとも呼ばれ、音作りだけでなく、コンピューターに自動演奏をさせるためのデータを打ち込んでいく作業(“打ち込み”と呼ばれる)を兼任することも多い。

CASE STUDY 2

GLAY are

TAKURO :	Electric and Acoustic Guitar
HISASHI :	Electric and Acoustic Guitar
JIRO :	Electric Bass
TERU :	Vocal

Guest musicians

Toshimitsu Nagai :	Drums
D.I.E. :	Piano (on "Together")
Soul TOUL :	Drums (on "Yes, Summerdays", "月に祈る")
Yuki :	Chorus (on "週末のBaby talk")
Masahide Sakuma :	Computer Programming, Keyboard
Produced by	Masahide Sakuma
Directed by	Hiro Inoguchi (Platinum Records)
Mixed by	Michael Zimmerling Hisashi Hiruma (on "Yes, Summerdays")
Recorded by	Tom Durak Michael Zimmerling Hideyuki Kouno Daisuke Sugamura
Mastered by	Seigen Ono
Assistant Engineered by	Daisuke Sugamura Yoshifumi Kureishi Yoichi Tsuyuri Yoshinori Sakuma
Mixed at	DOG HOUSE STUDIO, HITOKUCHIZAKA STUDIO, BAY BRIDGE STUDIO, HEART BEAT STUDIO
Recorded at	AOI STUDIO, DOG HOUSE STUDIO, HITOKUCHIZAKA STUDIO
Mastered at	ONKYO HOUSE
Art Direction :	Hiroshi Sunto
Design :	Naomi Horiki + Sunto office
Photographer :	Bruce Osborn
Stylist :	Kyosuke Hirano
Hair and Make-up :	Takayuki Tanizaki (Fats Berry)
Creative Director :	Kumiko Sugawara (Platinum Records)
Artist Promotion :	Naoko Nozawa (Polydor K.K.)
Merketting Promotion :	Hiroshi Aoyagi (Polydor K.K.)
Production Management :	Kumiko Tsukidate (Platinum Records)
EXECUTIVE PRODUCED by	YOSHIKI Kei Ishizaka (PolyGram K.K.) Ikuzo Orita (Polydor K.K.)

PLATINUM RECORDS IS PRODUCED by YOSHIKI

SPECIAL THANKS TO :
Michiko(MICHIKO'S VOCAL THERAPY), EXTASY RECORDS, EXTASY MUSIC PUBLISHERS Co.,LTD.

YUKI by the courtesy of Epic/Sony Records

GLAY : BEAT out!

A ゲスト・ミュージシャンズ (GUEST MUSICIANS)

アディショナル・ミュージシャンと呼ばれることもある。バンドのパーマネントメンバー以外のミュージシャンのこと。ほぼパーマネントメンバーと言えるほど、毎回決まった人が参加していたり、意外な人が参加していたり、他のアーティストのアルバムにも参加していたりと、注目すれば一番分かりやすくて楽しめるクレジットだ。

［キーボード］
●D.I.E.:グレイ『BEAT out!』、幻覚アレルギー『「D」のススメ』他
●西平彰:氷室京介『SHAKE THE FAKE』、ラルク・アン・シエル「Vivid Colors」、黒夢「BEAMS」他
［ドラム］
●永井利光:グレイ『BEATout!』、氷室京介『SHAKE THE FAKE』、D.I.E.『SPEED BALL』他
●そうる透:黒夢『feminism』、グレイ『BEAT out!』、ビーズ『LOOSE』他
●青山純:ビーズ『LOOSE』、氷室京介『SHAKE THE FAKE』他
［バッキングボーカル］
●グレイ『BEAT out!』にジュディ・アンド・マリーのYUKIが参加
●ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』にザ・ハイロウズの甲本ヒロト&真島昌利が参加
●クレイズ『BE CRAZY』にKYO、TUSKが参加
［その他］
●D.I.E.『SPEED BALL』にグレイのメンバー全員が参加
●メディア・ユース『Spirit』にルナシーのSUGIZOがバイオリンで参加
●hide「TELL ME」のカップリング曲ではルナシーのRYUICHIがhideとデュエット
●デルジベット『思春期』にバクチクの櫻井敦司と今井寿が参加
●バクチク『Six/Nine』にデルジベットのISSAYが参加

B プロデュースド・バイ〜 (PRODUCED BY 〜)

アルバムや楽曲を制作する際にアーティストの意思や才能を考慮して、その作品の音楽的な方向性を決める人。収録する曲を選んだり、意図する音を作り出すためにサポートミュージシャンを選んだり、曲のアレンジやミキシングを指示して音源を作っていく。スタジオで行われるレコーディングの作業をトータルに監督し、バンドが4人編成なら5人目のメンバーのように例えられたりするため、アーティストとプロデューサーの関係は作品の出来に大きく関わってくる（もちろんアーティストがプロデューサーに頼り切っているという二者の関係は論外!）。だからこそアーティスト本人（バンド自身またはメンバー）が自身をプロデュース（セルフプロデュース）するケースも多くなってくる。

●佐久間正英:グレイ『BEAT out!』、黒夢『feminism』、ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』、早川義夫『ひまわりの花』、筋肉少女帯『UFOと恋人』他
●布袋寅泰:JILL『蜜の味』（数曲）、今井美樹『Love Of My Life』他
●ホッピー神山:レピッシュ『ポルノ　ポルノ』、氷室京介『SHAKE THE FAKE』（数曲）他
●土屋昌巳:ブランキー・ジェット・シティ『SKUNK』、グレイ「真夏の扉」他
●セルフプロデュース:松本孝弘（B'z）、YOSHIKI（X ジャパン）、ルナシー、バクチク、ワンズ、森友嵐士（T-BOLAN）、布袋寅泰、奥田民生、ラルク・アン・シエル他

C ディレクター (DIRECTOR)

アーティストが音源を作る時、その企画及び制作からその進行管理、さらに著作権など楽曲の管理までトータルに行う人。A&R（ARTIST & REPERTOIRE）とも言う。

D ミックスド・アット、レコーディッド・アット、マスタード・アット (MIXED AT 〜、RECORDED AT 〜、MASTERED AT 〜)

ミックス、レコーディング、マスタリングを行った場所（スタジオ）。すべての作業が1カ所で行われるケースは少なく、作業に適した機材や人材があるスタジオでレコーディングは行われる。

E スタイリスト (STYLIST)

ジャケット内に登場するアーティストの服装から、そのバックやイメージとして使われる雑貨小物までのすべてをコーディネイトした人。

●小川恭平:黒夢『feminism』、桑田佳祐『孤独の太陽』他

F ヘア・アンド・メイクアップ (HAIR AND MAKE-UP)

ジャケット内に登場するアーティストの髪型を整え、メイクを行った人。

●TAKAYUKI TANIZAKI:バクチク『Six/Nine』、グレイ『BEAT out!』、ニューヴォーグ『SENSUAL WORLD』、ヴァレンタインD.C.『BRAND V.D.C.』他

G クリエイティブ・ディレクター (CREATIVE DIRECTOR)

作品のビジュアル面（ジャケット、歌詞カード、パッケージなど）において企画・制作からその進行管理までをトータルで監督する人。アート・ディレクターは、クリエイティブ・ディレクターの意向を具体化する。

H アーティスト・プロモーション (ARTIST PROMOTION)

アーティスト自身をマスコミを対象として広報するスタッフ。

I マーケティング・プロモーション (MARKETTING PROMOTION)

Ⓗと①は通常プロモーションという名称でくくられることが多いが、このように分けた表記の場合の意味あいとしては、その作品自体を市場に対してプロモーションするスタッフ。

J エグゼクティブ・プロデュースド・バイ (EXECUTIVE PRODUCED BY 〜)

作品がＣＤとして完成するまでの制作にかかる費用を負担し、そのＣＤの内容、宣伝、販売など総括して監督する人。スーパーバイザー（SUPERVISOR）もほぼ同じ意味に考えてよい。

その他の専門用語

リミックス・エンジニア (RE-MIX ENGINEER)

マスターテープの前の、それぞれの音がバラバラに録音されているマルチトラックテープまで戻って、プロデューサーなどとコミュニケーションを取りながら、各音のバランス、音質などを新たに設定し直し、曲の色合いを変化させる作業をするエンジニア。

アレンジャー (ARENGER)

出来上がった楽曲を、アーティスト、プロデューサーなどの意向に自分のセンスを織りまぜながら編曲し、楽曲を色づけしていく人。

ミュージシャンズ・コーディネーション (MUSICIANS COORDINATION)

通常プロデューサーが担当する、サポートミュージシャンなどの選択およびアプローチを専業的に担当する人。

コ・プロデュース (CO-PRODUCE)

PRODUCERとクレジットされている人と共同プロデュースした人。アディショナル・プロデュースと表記されることもある。

アシスタント・ディレクター (ASSISTANT DIRECTOR)

DIRECTORの作業を補助的に行った人。

イクイップメント・アドバイザー (EQUIPMENT ADVISER)

その音が必要としている、装置や設備、アンプ類やアタッチメント（エフェクター）などをアドバイスする人。

INTERVIEW

TAKESHI"¥"UEDA

THE MAD CAPSULE MARKET'S

前作『PARK』で、怒涛(どとう)の勢いで繰り出される破壊的ハイブリッド・ビートの中にもキャッチーなメロディーを忍ばせ、唯一無比のサウンドを完成させたザ・マッド・カプセル・マーケッツ。あれから約1年、彼らはその完成させたサウンドさえ冷酷に破壊し、ストイックなサウンドを追及したアルバム『4 PLUGS』を作り上げた。それは単に彼らが原点回帰したのではなく、進化したマッドの新たなスタートとも言えるだろう。さらに彼らはサンフランシスコでライブを行い、今後の活動の矛先を海外にも向けようとしている。

そんなマッドの音楽的リーダーであるTAKESHI"¥"UEDAが、最新アルバムのコンセプト、海外でのライブなどについて、なぜか落ち着かない様子で話してくれた。

自分たちの音を見つめ直すとシンプルにやってくしかない

●以前、ある音楽雑誌に載っていた「この人たちは自分たちを語る言葉を持っていないんだろうか」って記事を読んだんだけど、自分たちの音楽を言葉で語るのって苦手なのかな。

TAKESHI(以下T):あんまり得意じゃないな。音楽って言葉で説明するもんでもないと思うからね。結局は聴いてもらうしかないでしょ。

●音楽雑誌のアルバムレビューやライブのレポートとかは、気にして見る方?

T:載ってたら見ますね。でも腹立つのも多いよ。さっき言ってたのも見たことがあるし、ほめていても変なほめ方が結構あるし、そういうヤツはどうでもいいですね。

●移り変わりの激しい今の音楽業界でデビューして、6枚もアルバムを出すなんてほんのひと握りでしょ。デビュー当時、ここまで来る自信みたいなものはあった?

T:(笑)そういうことは全然考えてなかったですね。アルバム出したりツアーするたびに次があるかなんて危機感もないし。

●今までの5枚のアルバムって冷静に振り返るとどう?

T:このアルバムがこうだったっていうのは、あんまり考えないんだけど、全部のアルバムについて満足していない。自分たちのアルバムを聴いていても、嫌な所ばっかり気になって、「ここが良かった」なんて思わない。

今回は、特に自分たちの音楽がどういうものかっていう基本となる部分を、もう一回見つめ直すような形から始めたから、そういう意味ではシンプルにして正解だったと思うけどね。

●『4 PLUGS』では、曲作りを始めたときから、TAKESHIの個人的なテーマも、その辺りにあったということ。

T:シンプルっていうか…「マッド・カプセル・マーケッツの音はどんな音か?」というところから考え直していった。そう考えたときに、結局シンプルにやっていくしか、やっていきようがなかったからね。

●他のメンバーが、デモテープの段階でTAKESHIが答を出してくれたという発言をしていたけど、それは意識的に「自分が出さなければいけない」というようなところがあった。

T:そうですね。そういう部分はあったかもしれない。

●じゃ、それだけにデモテープを作るのに時間がかかったとか。

T:いや、曲作りでは、時間的にそんなに変わらないです。ただ、「次はどういうのだろう?」って考える時間、曲作りの前のポヤ~ンとしている時間がかなり長かった。やりたいことがいっぱい出てきて、それをどう形にしていくかというところに時間がかかった感じかな。

●前作の『PARK』はバンドの広がりをすごく感じたアルバムだったんで、個人的にはもう1枚ぐらい広がってみてもいいんじゃないかなと思っていたんだけど、もったいないことにその広がりをポイっと捨てて、いきなりマッドの本質を見せたアルバムを作ろうって思い立ったのには、よほどのきっかけがあったんじゃないかと読んでるんだけど。

T:アルバムを作るという方法論として、広げていくという作業が、この何枚かずっと続いていたんで、それに飽きてしまって、自分の中で新鮮味がなくなった。それで「何が新鮮なんだ」と考えたときに、中心となる自分たちの音というのがどんなものかということが、自分の中でも曖昧(あいまい)になってしまっているような気がしたから、見つめ直してみた。

俺達は、そのときそのときに自分に興味があるものをやっていくしかないから、今回はこういうことに興味があったというふうに受け取ってもらえればいいかな。

●ということは、先のことを考えれば、またここから広がって行ったり、もっとコアな方向へ行く可能性も十分にあると。

T:それもあるし…。ただ、広がるとしても前とは違う広がり方をすると思う。

●ある意味で、今度のアルバムから何かが始まったっていう印象なんだけど、第二期マッドのスタートって受け取っても別に構わない。

T:自分たちの中で自分たちを見つめ直す作業をしたということは、ある程度そういう意味もあると思うけど、それはもっと後で分かるんじゃないかな。

●今回のアルバムにはTAKESHIの作った曲が多く収録されているんだけど、いい意味で「俺のアルバムだ」という意識ってある?

T:曲作りに関しては、俺が作って、ヒント出して、答を出してやっていかないと、しょうがないと思っているから、結果的に俺の曲が多くなるんです。最初、みんなに「今回の俺の考え」って感じで曲を聴かせるんだけど、それがアルバムになるときは、各自それぞれ1カ月、2カ月とかけて、自分たちのものになるようにしてからレコーディングするから、それが完全に俺のものだとは全然思わない。ただ、前からそうなんだけど、方向性を示したのは俺だというのはありますよ。

プレイに対してシビアになってきているのが面白いところ

●マッドのレコーディング風景というのは、どんな感じ? イメージ的には激しい口論の連続っていうのがあるけど。意表をついてやたら静かとか?

T:やっているときは、みんなまじめで真剣

インタビュアー・西原 朗　撮影・ニッキー ケラー

INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA PHOTO by NICCI KELLER

にやっているから、"静か"というのとは違うけど緊張感はあるね。それに、思っていることは言うけど、それでケンカになるようなことはないよ。レコーディングの前に時間が結構あって、煮詰めてから言ってるから、向かっている方向が全然違って意見が食い違うことはないから。

●今回のレコーディングの時間は長かった。

T:どうなんだろう。前に比べると、だんだん長くなっているけどね。最初に録ったアルバムの倍くらい時間がかかっている。

●今回は音がシンプルで、オーバーダビングとかも減っているよね。そんな作業が減ったにも関わらず、時間が長くなっているというのは、単純にどこにかかっているんだろう。

T:一番時間がかかるのは音作りのところだね。ドラムとか、ギターの音作りとか。俺のベースの音作りは、いつも機材が一緒だし、ドラムほどスタジオの影響も少ないから、そんなに時間はかからないんだけどね。ドラムとかは、気に入った音を作るためにかなり時間はかかるよ。

●オーバーダビングが少ない分、1回のテイクに対する集中力なんかも大変だったんじゃない。

T:一人ひとりのプレイに存在感が出てくるから、プレイがどんどんシビアにはなってきている。それが面白いところなんだけどね。

●音にすごく勢いを感じるんだけど、話を聴いているとOKになる基準というのは、単純に"正確さよりも勢い"というわけではない。

T:ある程度正確じゃないと、気持ちよさも全然出ないからね。ただ、正確といってもドンカマ(演奏のガイドになるリズム)に合っていればいいってものでもない。ドンカマに合っているよりも、ドラムとベースとギターの中で作るグルーブで、どれが気持ちいいかが一番重要ですね。

　例えば俺がちょっとドラムに対して後ろ気味に弾いてみたり、前気味に弾いてみたりして、どっちがいいか聴いて試してみるとか。

●このアルバムは、すごくドラムの音でも乾いた感じがして、メロディーよりもリズムがすごく強調されているという印象を持ったんだけど、それは狙いとしてあった。

T:普通ドラムって広い部屋を使うんだけど、基本的にドラムを一番小さな部屋で録って、アンビエント(部屋の自然な残響)とか、そんな音は全然なしにしてやってるからね。それは最初からそんな感じでいこうという狙いだった。

●TAKESHIって曲をメンバーに聴かせるときは、デモテープを作って聴かせているそうだけど、そのデモテープというのは、かなり完成されたもの?

T:歌詞とかも考えて、歌も入れてという感じで1曲にして渡すから完成度は高いですね。それを、ひとまずそのままやってみて、その後みんなでどうするかというところで、全然変わらない曲もある。

●そのままでもリリースできるくらいのレベル(笑)。

T:音が悪いから、そこまでは無理(笑)。

●自宅でデモテープを作るというのは、ドラムマシンとかを使った打ち込みで?

T:そうですね。ベースもギターも自分で弾いて…。だいたい頭の中でボーッとした形のやつをリズムに打ち込んで、それを鳴らしながらギターを弾いて考えてる。一番最初に曲を作り始めたときから、そういう感じで作ってきたから、他の人がどうやっているかとか、他の作り方ってよく分からない。

●その段階ではメロディーよりも、まずはリズムやリフが出てくるんだ。

T:最初はね。でも、その時に同時にくっついてくるメロディーのモチーフみたいなものがないと、その曲は結局「つまんない」ってなっちゃうことが多い。

●変な質問するけど、TAKESHIって自宅でデモテープを作っているときと、スタジオでレコーディングしているときとでは、エキサイトするのはどっち?

T:…うーん、デモテープを作っているときが一番盛り上がっているような気がしますね。レコーディングをしているときというのは、曲に対するリズムをどうするかとかシビアになるんだけど、曲を作っているときはそんなのは別に関係なくて、その曲にどれだけ盛り上がれるかだけという感じだからね。

●今回のレコーディングでのテンションは、今までと比べてどうだった?

T:やっているときのテンションは、今まで

もそれなりに高いけどね。ただ、今回出来上がった音に関しては、かなり満足している。

知らない人の前でライブをやってどうかすごく興味がある

●原点に向かいつつあるという話なのに、最近ライブでサポートにギタリストが入ってるよね、これは？

T：参加してもらっているDOOMの藤田さんは、アルバムでもコーラスやってもらってるんだけど、そのときに「一緒にやろうか」という感じで盛り上がって。これに関してはそんな勢いだけでね（笑）。でも、1人増えることによって、全然音が変わるから、結果としては面白かった。

●新しい曲というのはライブでやって、どんな気持ち。やっぱり楽しい。

T：曲ってやっていくうちに飽きていくことがあるから、新曲はやっぱり楽しいかな。今は一番新鮮だからね。

●サンフランシスコでアルバムのミックスをやったときに、ライブもやったって、日本では騒ぎになってるけど、本当のところ客の反応はどうだった。

T：外人はすごく反応がいいですね。良いものは良い、悪いものは悪いってすぐに言ってくれますからね。全部で2回やったんだけど、全然俺たちのことを知らない人の前でやってどうかというのは、すごく興味があることだし、面白いよね。

●このライブをきっかけに、向こうで本格的に活動するんじゃないかってウワサも聴くけど、何か具体的に決まってる？

T：いや、別に具体的なことは何も決まってないんだけどね。ただ、あっちでそういうライブをやっていきたいなという。

●みんなでバスに乗ってアメリカ大陸を回っていくみたいな。

T：そうですね。ある程度の場所は回りたいと思う。アメリカに限らず、ヨーロッパにも行きたいしね。

●1カ月も2カ月もバスの中でメンバーと共同生活してると、人間関係が大変になるバンドもあるけど（笑）、マッドは大丈夫？

T：これだけは、今までに経験ないから、やってみないと分かんないですけどね（笑）。そりゃケンカもあるかもしれない。

●マッドはJロックの中でも、すごく言葉のノリみたいなものが伝わるバンドだから、言葉の壁なんか関係ないって思うけど、そんな壁はライブをやっていて全然感じなかったでしょ。

T：言葉の問題は全然関係ないですよ。最初からそこの不安は全然なかったです。CDになったときは、ある程度「英語の方がいいのかな」と思ったりはするけど、ライブでやる分は英語も日本語も全く関係ないですよ。

●今、海外でライブをやったのには何か理由がある？

T：そんな大したものは…。やりたいという気持ちは前からあって、だんだんできるような状況になってきたってことです。

自分たちがやりたいようにやって成功するのが一番の理想

●せっかく超個性的なベーシストに会えたからベースの話もしたいですね。ベースというのは従来〝縁の下の力持ち〟的存在というイメージが強いんだけど、TAKESHIのベースは演奏を引っ張っていて、リードベースみたいな感じだよね。

T：結構ひずんだ音を出しているから、普通のベーシストと違うとは思ってる。普通のことをやっていても普通の音楽になっちゃうからつまんないしね。特にリードベーシストだとかは思わないけど、ベースっていうのは、可能性がいっぱいあって、すごい面白い楽器ですよ。

結局グループってのは4人で作るものだから、だれかが引っ張って、だれかが付いていってというもんじゃなくて、みんながぶつかり合って作っていくもんだからね。だれかが引いちゃったりしたら、いいものが出来ないと思うんですよ。

●「神歌」で、ギターとベースが一緒に同じリフを弾いてるところなんか二つの楽器じゃなくて一つのすごく音域の広い楽器のようにさえ聴こえるけど、そんなギターとベースのコンビネーションって意識してた？

T：あの曲は一体感がすごく大事だから、意識はしているけどね。同じリフを弾くからといって、ピッタリ同じ必要はないんだけど、それが気持ちいいリフにならないとしょうがないから、ギターを録っているときも、ああだ、こうだって言いながらスタジオにいたしね。

●あこがれていたり、影響を受けたベーシストなんている？

T：ベーシストであこがれてた人って全然いないんだけど、いろんな人の影響はあると思うよ。人にはストラングラーズのジャン・ジャック・バーネルに似ているって言われるし、「好きだった？」って聴かれるけど、俺は全然知らないんだ（笑）。

●最近、聴いて面白かったベーシストなんかは。

T：サンフランシスコに行っているときに、ルインズっていう日本のバンドのライブを観たんだけど、そこのベースの人がすごく良かったですね。ドラムとベースの2人しかいないからベーシストがエフェクターをいっぱい使ってて、いろんな音出してて面白かったですよ。あっちでもすごく人気があってライブハウスいっぱいにしてた。

●マッドは耳に刺激的な音を出しているバンドだけど、そんなサウンドと対極にあるようなポップな音楽にも関心はある？

T：普通ですよ。歌謡曲とかもいいものがあるんじゃないですかね。

●それにインスパイアされたりは？

T：インスパイアは…。でも、ないとは言い切れないけどね。

●ラジオなんかで聴いた曲のメロディーが頭から離れなくて、「フーン、フーン」とかってついつい鼻歌に出てしまうとか。

T：そういうのはありますよ。俺は歌謡曲も結構詳しいですよ（笑）。いっぱい知っているから。

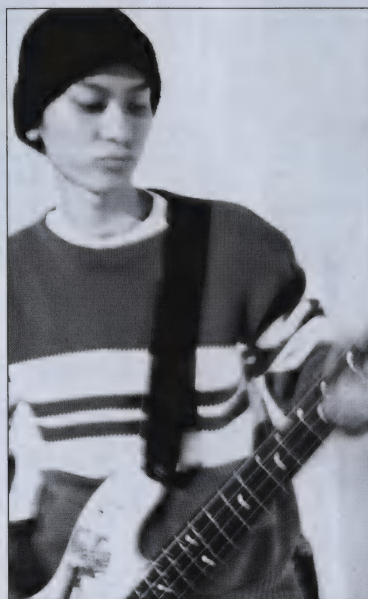
●興味本位で悪いんだけど、マッドってデビュー当時から、やりたい放題にやってきたように見えるんだけど、やっぱり見えないところで壮絶な戦いがあったりしたのかな（笑）。

T：レコード会社とかと（笑）。そういうのは、やっぱり他より多いんじゃないかな。ただ、お互いにいいものを作ろうとして、ぶつかっていることだからね。向いている方向が一緒じゃないときは、ちゃんと話し合いとかやってるよ。

●最後にアーティストとしてのTAKESHIの今後の目標は？

T：常に自分の中で満足して、納得してやっていきたい。自分たちがやりたいようにやって成功するということが、未来の姿としての一番の理想かな。

●そのためにも時々レコード会社なんかとも戦って。

T：そうですね（笑）。

ZYYG

デビューしてから現在まで、自分たちの音楽についてけっして多くを語らず、作品で表現し続けてきたZYYG。昨年新たにベーシストが加入し、初めての転機を迎えた彼らは、よりバンドとしての音を追求し、先日リリースされた2ndアルバム『Noizy Beat』では自分たちのストレートな感情を歌にサウンドに爆発させた。3月には彼らのサウンドにふさわしいライブも決定。そこからまた大きな一歩を踏み出すに違いない。

ようやくその実体を明確にすべく動き出すZYYGのメンバー4人に、その純然たる音楽への気持ちを聞く。

バンドの基本である ぶつけ合うことを大事にしてる

●ZYYGは今回が初めての登場なんで、バンドのルーツから話を聞きたいと思うんですが、まずはメンバー4人それぞれのアーティストとしてのルーツを知るために、各自が影響を受けたアーティストを教えてもらえますか。

高山征輝(Vo、以下T):プロになろうと思ったのは、13歳ぐらいに矢沢永吉さんの「成りあがり」という本を読んだとき。それから15歳ぐらいでARBのコピーバンドを作ったんですよ。ハードロックとかがはやり始めた時期なんで、徐々にヘビメタバンドに変わっていき、そのちょっと後ぐらいにバンドブームが来て、ジギーとかレッド・ウォーリアーズとかボウイをコピーして、その後にオリジナルを作り始めました。

●では、その中から一人を挙げるとなると。

T:一人…う〜ん、だれでしょうね。いろんなものを聴いてたんで。でも原点はやっぱり永ちゃんでしょうね(笑)。

後藤康二(G、以下G):4つ上の兄貴の影響で、小学校6年生の時にアコースティックギターを買ってもらったのがギターを始めるきっかけなんですよ。そのころはポール・サイモンとか、ジョン・デンバーとか、わりとハイクオリティーなアコギを弾く人をコピーすることにやっきになってました。自分はブライアン・メイが好きなんですけど、

インタビュアー・西原 朗　撮影・大野晴己
INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA　PHOTO by HARUMI OHNO

今考えると幅広いジャンルをフォローできるギタリストとしての理想像みたいなプレイヤーにあこがれてたのかな。

藤本健一（Ds、以下F）：ジョン・ボーナムとジェフ・ポーカロが好きなんです。僕もやっぱり高校のころハードロック小僧だったんですけど、今のZYYGみたいな音楽もだんだん好きになっていって。ただ自分が好きな音をそのまま持ち込んでもZYYGにはキツイことがあるんで、今まで自分が持ってきた音を消化させるって感じでやってますね。

加藤直樹（B、以下K）：僕は14、15歳の時にビートルズを聴き出して、それがきっかけでバンドを組むことになってベースを弾き始めたんです。当時やっぱりポール・マッカートニーが、ベーシストとしても一人のアーティストとしても尊敬できる人物だったんで、自分も近づきたくて。今もこれからもZYYGサウンドにポール的なものを入れるというわけではないんですが、ベーシストとして個人的に上がっていくために必要な存在だなと思ってます。

●今のZYYGにとって加藤さんは新メンバーですよね。新しいベーシストはどうですか。

T：どうでしょうねえ。結構変わったヤツなんですよ（笑）。魚釣りが好きで。一番メンバーの中でも冷静な部分持ってるし、中身に闘志があるというか。でもまあ、これからでしょうね。

●では、それぞれのメンバーを他のメンバーから見るとどういう人なのか、どういうプレイヤーなのか、もめない程度に語ってもらえませんか（笑）。まずギターの後藤さんについてはどうでしょう？

T：俺からみたらやっぱり欠かせないヤツでしょうね。リハーサルにしてもレコーディングにしても、ギターが熱くなってないとボーカルも燃えないっていうか。逆にギターが乗ってる時は、ボーカルも乗るんですよね。ZYYGのギターとしても欠かせないヤツだし、個人的に言えば一番近い距離にいるライバルでしょう（笑）。

F：音楽に対してまじめですよね。自分が持ってきた曲に対しても、人が書いた曲でも、ZYYGの曲として出来上がってきた曲に対してはまじめで「本当に好き、愛してる」みたいな感じ（笑）。

K：ギタリストであるにも関わらず、他のドラムやベースの音とかも常に冷静にインプットされてて、全体をいい方向にまとめることを考えてる印象があります。

●では、ドラマーの藤本さんは？

T：いい意味で調子に乗りやすいタイプ。だからドラムに関しても「いいよ」って言えばいいドラムたたくし、悪いところを指摘すると落ち込んだ音になっちゃうし。ある意味じゃ、すごくドラムと一体化してるヤツなんじゃないかな。感情がそのまま出てるっていうのを肌で感じる時がありますからね。

G：藤本は、あとの3人が乗っかっていくバンドのベーシックになる部分を担当してますけど、そういう所を任せられる男っていうか。確かに荒削りな所もいっぱいあってドラマーとしてもっともっと成長してほしい部分もあるんですけど、テクニックとか円熟されたものでは出せない彼ならではの独特なグルーブを出してくるんですよ。そういう意味で頼もしいヤツっていう感じですね。

●では、バンドのフロントマンである高山さんは？

G：う〜ん、大将！

T：アハハハ。

G：自分にとっては相棒ですね。フロントマンとしてのカッコ良さみたいな物は十分に持ち合わせている男だし、高山の腹の中には「俺が一番だ」っていうのがあると思うんですけど、俺もギタリストとして「俺が一番カッコイイ」って気持ちがもちろんあるんで、一緒に音を出してると本当に刺激になる。

K：一人のボーカリストとして、アーティストとして、音楽全体を見極める目と耳を持っているし、トータル的なセールスポイントとか先を見る目も鋭い人です。

●ZYYGの4人の関係は、常にお互い仲良くみたいな感じじゃなくて、時にはぶつかり合ってという感じ。

T：そうですね。今のZYYGは、例えばバンドを最初に作ったときの目的っていうか、すごいカッコいいバンドがあって「ああいうふうになりたいね」とか、単純に女の子にモテたいとか、そういう気持ちに戻ってる所があるんですよ。だから仲良しバンド的なものじゃなくて、もっといろんなものをぶつけ合えることを大事にしてると思うんですね。

ボーカルとギターが張り合ったバンドサウンドを前面に出したい

●今のZYYGって〝第二期ZYYG〟という言われ方をしてて、そのスタートがシングルの「ぜったいに 誰も」「JULIA」ですよね。アルバムもリリースになるんですけど、とりあえずは2枚のシングルで〝第二期ZYYG〟のバンドの方向性は固まったと見ていいんでしょうかね。

T：そうですね。おそらくこういう方向を前提としてやっぱりビートということで行くと思いますけど。ただやっぱりアルバム作る度に成長していきたいんで、シングルを含めた2ndアルバム『Noizy Beat』の方向でこれからもずっと行くとはまだ言えなくて。基本はこの方向で行きたいと思うんですけどね。

第一期、第二期という言い方をすれば、第一期のZYYGっていうのは一生懸命さだけが表に出てたバンドだったと思うんですよ。だから一歩下がって自分たちを見られないっていう部分があったし、すべてにおいてストレートだった。それに比べて第二期というのは、ある程度作業的な部分も余裕が出てきたし、メンバーも固まってきたし。ZYYGをやる限りは、この4人で行きたいと思ってるんで。

●僕は第二期である今の音の方が耳に刺激的だし、すごく興味がわくんですよね。前のZYYGには、ずいぶん行儀がいいって感じがしてたんですけど、今はロックの根底にあったはずの不良的な部分とか、いい意味での軽薄さが出てて歓迎できるんです。やはりバンドとしても、考えているのはそういうことなんですよね。

T：ええ。あとスタッフが一新されて「ぜったいに…」の作業に入ったから、いろんなア

イデアを持ったディレクターもいて。その中でアイデアを出し合ったのがすごく良かったかな。

●さっきライバルって話が出ましたけど、ボーカルとギターが対等にぶつかってる感じがするんです。そこには「これがZYYGだ」という意識的な部分もあります？

T:そうですね。フロントがカッコよければそれなりにカッコいいだろうし。あとボーカリストとしては、前作よりも3人の音の中にもっと溶け込むような歌い方っていうのを考えたし。それが一番バンドの形としては明確というか、一番バンドらしい形なんじゃないかなというのがありましたから。

●バンドなのにバックとボーカルが分かれて聴こえてくるようなのは、あんまりカッコ良くないですからね。

T:それに基本的に俺らには、カラオケで歌ってもらってなんぼという考えは一切ないんで。やっぱりカラオケで歌ってもらうより、アマチュアバンドの連中にコピーしてもらった方がうれしいしね。今のサウンドってだいたいがバンドのサウンドでもボーカリストが前に来てて、楽器隊は楽器隊でしかないのが多いけど、もっとバンドやサウンドの方を表に出して、特にボーカルとギターが張り合ってるような感じでやりたいっていうのは、常にどっかにあります。

●ボーカルのスタイル一つをとっても変化がありますよね。これは成長とかって言葉にたとえられるものなんでしょうが、最近の作品を聴いてると良い意味でのラフな所とか、いい感じで力が抜けてるような所をすごく感じるんですよ。そのへんは自分でも意識としてありますか。

T:成長と言うよりは元々それぞれにアイデアがすごくあったんですよ。だからアルバム『Noizy Beat』とかシングル2枚に関して言えば、成長というよりは俺らにすれば当たり前っていう。まだ余裕があるというか(笑)、切羽詰まってないですよ。

●ボーカルだけじゃなくて、詞を書くっていう意味でも自分の中で変化ってありました？

T:第一期『GO-WILD』までの高山っていうのは、本音の高山でありどこか演じてる部分っていうのがあって。やっぱり「君が欲しくてたまらない」を出した時点で高山のイメージっていうのは「すごく男らしい」とか「情に厚く」とか(笑)、何かそういうイメージが大きかったと思うんですよ。だからそういう反応を見ながら、自分もそれに合わせて、いわば高山に詞を提供してた部分ってあると思うんですよね。ただ第二期は「もっと自分に素直になろう」というのがあったんですよ。だから「Dreamer」っていう曲がアルバムにあって、そこの最初に「見慣れた街のはずれで　まただれかが消されても他人ごとと瞳そらした」っていう詞があるんですけど、その部分にはすごく悩んだんです。というのも、自分がそれを歌うことによってZYYGのファンや今まで高山の詞に共鳴してるヤツらがその詞に対して何を考えるか。それがとても怖い部分だって思えて。だからそれを歌っていいものかどうかって悩んだんですけど、最終的にやっぱり自分はこう思ってるし、自分も瞳をそらしてしまうから、これは正直に歌いたいなと。もうレコーディングのその日まで悩みましたけどね。

●でもそのあたりの姿勢が今のZYYGを象徴してるって感じですよね。ギターのプレイでは、第一期、第二期という分け方をするとどうですか。

G:一番大きかったのはぜい肉が取れてきたっていうか。ZYYGはデビューしてからレコーディング・アーティストっていう形だったんで、1stアルバム『GO-WILD』を作ってたころはスタジオでの技術を駆使して、作品のクオリティーを上げるための作業っていうのが多かったんですよ。でも2ndアルバムを作った時は、(ライブの)リハーサルもずっと並行してやってて「今度このアルバムを引っ提げてライブに行くんだ」っていう意識が根底にあったから、実際に生で再現するのが不可能な音は避けよう、レコードに比べてクオリティーが落ちるのだけは避けようってのが自分の中にあった。だから2ndはソリットな仕上がりになったんじゃないかと自負してるんですけどね。

INTERVIEW
ZYYG

プレイ面に関しても、勢いに任せてイキのいいテイクを取るというやり方と、きちんと練り上げた耳に残るフレーズを組み立てて作るやり方って両方とも大切だと思うんですけど、そのへんのバランスも2ndの方がより素直になったっていうか、その両面のバランスがだんだんいい具合に取れてきたって感じ。

●ZYYGは以前からギターが前面に出てるなとは思ってたんですけど、今はそれより一歩から一歩半前に出てきたみたいな印象があって。前に出てくるギターもZYYGの個性という感じがするんですけど。

G:楽曲ありきっていう形でギターをプレイしていくようなやり方も当然あるし、そういうプレイを残してるギタリストっていっぱいいるんですけど、自分の中には「ギターヒーローとしてのポジションも欲しい」という欲求がメキメキと出てきて。ロックバンドでギタリストが占めているカッコ良さみたいなものを「ZYYGというバンドでは俺が出す」っていう、そんな気持ちが以前にも増してきたんです。

●ライブでもそういう雰囲気がひしひしと伝わるんでしょうね(笑)。

G:自分も子供のころに影響を受けたギタープレイヤーがたくさんいて、そういうプレイヤーになりたいっていうあこがれからスタートしてるんで、今度はこのZYYGっていうバンドで自分が受けてきた影響力みたいなものを自分が出していく時が来たんじゃないかって思ってるんですよ。ロック好きな子やアマチュアの連中とかに「コピーしてください」なんて下世話な言い方はしたくないんですけど、そういうロックキッズのみんなに対して非常に誠実に届けるっていうこだわり持って2ndは作ったし。

メンバーもリスナーも楽しめるアルバム

●2ndアルバムとしてリリースされる『Noizy Beat』は、シングル2枚でやったことが一時的なものじゃなくて本物だったっていうのが証明された音だと思いましたよ。まずこのアルバムのレコーディングの時ってどんな雰囲気で進んだんですか。

T:前回よりは、気持ちとして余裕がありましたよね。やっぱり『GO-WILD』は、限られたフィールドの中で自分が持ってる力を100%出し切ろうという方に一生懸命で、全体的な流れが見えなかった部分があったんですよ。けど、今回はそのへんが余裕で、自分の頭の中で仕上がりは見えてたし、それを現実に形として表していくって感じだったんで。まあ曲によってはピリピリした時もあったんですけど(笑)、それ以外はアイデアを出し合ったりして、楽しみながらって感じでしたね。

●アルバムのタイトル曲「Noizy Beat」は、なかなか興味深い仕上がりなんですけど、この曲に関して何か面白いエピソードってあります？

T:楽器隊にしてもボーカルにしても、ノイズな感じの騒がしい中でどれだけ繊細さだとかロックのブッ壊しの美学みたいなものを出せるかっていうのが、今回のテーマと

してあって。ノイジーという言葉自体は結構前から持ってて、バンドの方向性としてビートっていうのがネックになってたんで、じゃあビートをくっつけるとノイジービート。ああいいじゃないかって。全曲の中で一番ブッ壊しで雑音の塊のようなサウンドに聴こえるんですけど、よく聞けば詞に関しても言ってることは結構難解だし、サビの部分で持ってくる言葉にノイジービートって言葉がぴったりはまったし、ギターにしても繊細な部分を出してるし。そこからこの言葉をタイトルとして持っていこうかっていう話にもなったし。

●入ってる音も面白いですよね。何か変なことを(笑)?

G:イントロの頭に意味不明なディストーションボイスが入ってて、それはメンバーがギンギンにひずませた状態のギターのピックアップに向かって、思い思いに2、3シャウトしたのをミックスしてるんです。言葉は内緒なんですけどね(笑)。それが入ったときに「Noizy Beat」っていうしっかりした熱いタイトルチューンが完成して、「これで決まりだろう」って(笑)。

T:最初はいきなりイントロから始まってたんですけど「何かつまんないな、何かないか」っていろいろ話してて、ちょっと叫んでみようかと。それでやってみたら面白かったんで。

●シャウトしてる言葉が秘密っていうのは、あまりはっきり分かっては困るような言葉を言ってるという?

G:(うなずく)

●なるほど(笑)。よく聴けば分かりますか。

G:(笑)よく聴けば。

●今回のレコーディングではそういう実験も随所でやってると。

T:そうですね。それがやっぱりアルバムだと思うし。前作はあまりにも一生懸命になりすぎてて、聴いてても退屈してくる時期があるんですよ。1年ずっと聴いてたら、まっすぐすぎてつまんなくなってくるっていうか。でも今回は2作目だし、実験的なことを含めて変なこともやって。それだけやると聴いてる側は1回聴いたときより10回聴いた方が発見も出てくるし。そういう部分で面白いアルバムというか、自分たちが楽しめるイコール、聴いてる側も楽しめるアルバムを作ったつもりですけどね。

●収録されている曲がほぼ高山さんと後藤さんの共作なんですけど、お互いのことをソングライターとしてどういうふうに見てますか。

T:さっき言った意味も含めて一番近いライバルでしょうね。例えば後藤が曲を1曲持ってきたら、俺が3曲いい曲を持っていくんだとか。もちろんボーカリストとしてアーティストとしてライバルっていうか、目標にしてる人っていうのはたくさんいるんですけど、こいつだけには負けたくないと言うか(笑)。

●でも例えば後藤さんが「負けた」って思うような曲を書いてきたときは?

T:そのへん正直に言うと、矛盾というか分からない所なんですよ。個人的に言えばすっごく悔しいんですけど、ZYYG全体で考えるとプラスなんですよね。そのへんの判断っていうのが、難しい所で。

G:俺も高山に対してライバル意識みたいなのはもちろんあるんですけど、ある時リハーサルで出来上がった新曲をプレイする時に「だれの曲でもないんだ。後藤曲、高山曲なんて関係ないんだ。これはZYYGの曲なんだからまじめにしろよ」って高山が言って。俺は個人的にその高山のひと言でふっ切れたんです。さっき高山が言ったZYYGにとってみればプラスって所に尽きると思うんですけどね。高山に対して「くそぉ~」みたいなことは制作段階であるんですけど、やっぱりZYYGの楽曲というふうに見れば「いいぜ」ってメンバーが思えるような曲をやっていくのが当然だし自然な形だから。

一番伝えたいヤツらに 一番近い距離で伝えたい

●アルバムを聴かせてもらうとやっぱりライブの光景が見えてくるんですが、今具体的な予定は出てるんですか。

T:とりあえずは3月26日に福岡のBe-1っていうライブハウスでやることが決定してます。

●では、その後各地でライブが見られるわけですね。こんなステージにしたいっていうイメージやプランはあります?

T:う~ん、ホールクラスまで行けばある程度エンターテイメント的なものが出来ると思うんですけど、ライブハウスっていうのはごまかしの利かないところ所なんで、やっぱりストレートに曲をやっていくというか。

●やっぱりこの時期は生身のZYYGを見せるべきですよね。

T:そうですね。他と比べれば露出度が少ないバンドなんで、まあ生でやろうかなという。ただ最初の一発目はライブハウスで行きたいっていうのはメンバーの願いだったんですよ。ホールクラスで行くっていうよりも、ライブハウスっていう人数が限られたスペースで、自分たちが一番伝えたいヤツらに一番近い距離で伝えたいなっていう部分があって。それと純粋にバンドとしてごまかしが利かない場所から徹底的にたたき上げていく、それで階段を一歩一歩踏んでいきたい。

●ライブにはそれぞれどんなことを期待しますか。

F:リハの時でも瞬間瞬間すごくカッコいいと思える時があるんで、そういうのがそのまま出て、またお客さんの方もそれを見て俺たちと一緒に盛り上がれれば、それが一番じゃないかなと思いますね。

K:僕は『Noizy Beat』ってアルバムは、カッコ良さだけじゃない余裕や面白さがあると思うんで、ライブをそんな色の空間に染めたいっていう。それと壁にかけた絵画のように毎日見ても飽きない、芸術作品みたいなものに仕上げたいですね。

G:ZYYGのコピーをやってるっていう連中からたまに手紙をもらうんですけど、そういう連中にバシバシ来てもらって、ガンガンに盛り上がれるような場が持てたらなあと思います。あと、ZYYGはデビューしてからあまり派手な展開がなかったんで、ファンの子たちに非常に肩身の狭い思いをさせてしまってた。だからライブなりアルバムでどんどん等身大のZYYGを体験してもらって、その子たちの一つの財産にしてやろうじゃないかという気持ちがあります。

T:ZYYGのボーカリストとして言えば「楽しみに待っててくれ」っていうのが本当なんでしょうけど、高山征輝っていう一人の人間に返ったときは正直言ってすごく怖いです。どこかうれしい半面すごく怖いなあと言うか、不安がある。「本当に今ライブをやっていいんだろうか」とか「自分たちに本当にライブができる準備があるんだろうか」っていう不安が…。もしZYYGを生で見てお客が帰ったらどうするんだろうとかね(笑)。それを支えてくれるのはライブに来る連中だろうし、やってみて初めてこれで良かったんだとホッとすると思います。ステージに上がるまでは、何とも言えない部分ですよね。

●でも迷いがあるにせよ、ステージに立つ以上はとりあえず今の全力を出そうと。

T:もちろん期待はしててもらっていいですよ。

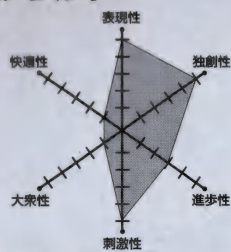
●では、今までの話を総括してもらうことになると思うんですけど、すごくインスタントな感じで移り変わりが激しい今の音楽のシーンで、ZYYGはどういうバンドになっていきたいと思いますか。

T:最近は昔と比べれば冷めて来たところがあるんでしょうけど、カラオケの時代ですよね。だからZYYGはその逆を行ってやろうかなと。どんな時代でも、その逆を行きたいなというのがありますね。博多のBe-1っていう所からZYYGの歴史が始まるんで、本当に俺らのことを分かってくれるっていうか、俺らを応援してくれるヤツらと一緒にZYYGの歴史を作っていければなあっていうのが今の正直な気持ちです。

LIVE SCHEDULE

3月26日 福岡DRUM Be-1
4月 4日 横浜CLUB 24
6日 市川CLUB GIO
13日 前橋Club FLEEZ

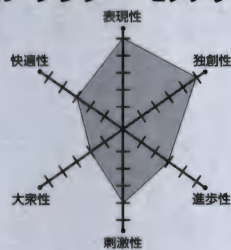
DISC REVIEW

[「D」のススメ]
幻覚アレルギー

とにかく私はSCEANAの詞の世界が好きだ。キレイに覆われた表面がえぐり取られ、そこから見える本質を表現したクールでアンダーグラウンドなにおいを放つ言葉。この独特な言葉遣いや羅列は彼だけのものだし、この言葉を歌えるのも彼だけ。聴く度に必ず脳細胞の一部が刺激される。

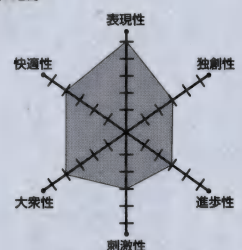
ニューアルバムには、SCEANAのそんな詞と様々な変化を見せる声が存分に聴ける、私にとってはうれしい曲が多い。ボーカルとサウンドの融合が特徴だった前作に比べて、新作は同一人物であることを疑うほど曲によってボーカルスタイルを変化させ、ボーカリストとしての強烈な主張が打ち出されている。また、その声と絶妙に絡み合う攻撃的な分厚いサウンドは、これも梶井のすさまじいギターによって激しい個性を持ち、その結果1曲1曲がたまらなく印象的な楽曲として完成しているのだ。アルバムという枠の中に収まり切らず、自然発火して爆発しそうな勢いを持つ10曲。耳を傾けるには、かなりの覚悟が必要である。　[文・やまだじゅんこ]

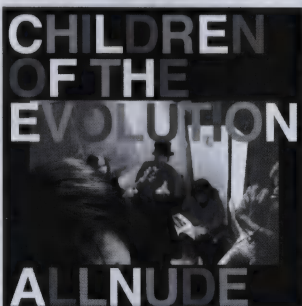
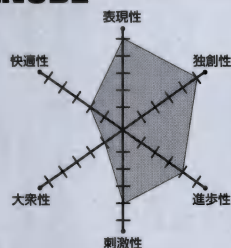
毎月リリースされる音源の数は、メジャー、インディーズを含めると膨大な数にのぼる。その中からジェイロックマガジンが紹介できるのはわずか5枚。各スタッフが、どの点に着眼し、そのアイテムを推薦しているのか、ひと目で分かるように6項目5段階のレーダーチャートを添付した。その独断と偏見に基づいた詳細項目についての説明は以下の通りである。

大衆性：世間一般、不特定多数のリスナーに支持される度合い。
独創性：時代の流行に左右されることのないオリジナリティーの追及度。
快適性：全体から得られるそう快度。
刺激性：サウンドや歌詞から受けるインパクト、ざん新さ、またテクニック等の巧拙。
表現性：音楽を通じて表現しようとしているモノの反映度。
進歩性：前作からの成長度。前作がない場合は、次作への期待度。

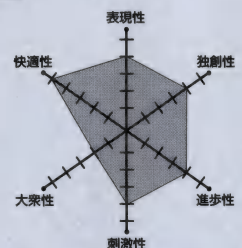
[アジール・チンドン]
ソウル・フラワー・モノノケ・サミット

阪神・淡路大震災直後、被災地に"音楽"を届けようとしたソウル・フラワー・ユニオン(SFU)は、電気の使えない被災地で演奏する手段としてチンドンスタイルを取り、ソウル・フラワー・モノノケ・サミットと名乗って避難所を回った。レパートリーも、お年寄りのために自分たち流にアレンジした民謡が中心。『アジール・チンドン』は、そんな現地のライブ演奏などを収め、インディーズレーベルから発表された。唯一、スタジオレコーディングの「復興節」は、SFUのシングルのカップリングとしてレコーディングされたが、レコード会社が歌詞にクレームを付け発表出来なかった曲である。被災地の現状を自分の目で見たことがない偉い人には、彼らの切実な"言葉"が"暴言"にでも聞こえるのだろうか?

被災地の復興を願うこのアルバムの歌詞カード最初のページの写真。そこに写っている倒壊した家に立つ「勇気」と書かれた幟(のぼり)は、多くの問題と戦い続けている被災者の"力強さ"を表している。　[文・南出哉稔]

[FIRE DOG]
斉藤和義

「今回は5曲でドラムをたたいてるんですよ。ドラマー斉藤はどうなのか、感想を聞かせて下さい」。大阪アメリカ村で出会った斉藤君は開口一番、僕に静かに問いかけてきた。ドラムという、他の演奏と一体化してこそ気持ちがいい楽器のエクスタシーを知っている斉藤君は、ドラムがうまいへたは別として(?)「相手がこう動いた時に自分がこう動けばお互いさらに気持ちいい」みたいな音楽的一体化の快感、すなわちちょっとエッチなロックの奥義を身体で分かってるロッカーなんだとつくづく納得。

アルバムには、それを証明するかのように、おなじみの"のほほん"としたナンバーもありながら、ギターが叫んでたり、切れたシャウトが聴けたりと、ひと昔前"ブルース・ロック"って呼ばれたような、熱くて荒々しい世界も息づいている。今までになく頼もしい作風からは、自分の音楽を外に広げて薄めるのではなく、内側に向け濃度を上げようとしている姿がうかがえて、もろ手を上げて大歓迎だ。　[文・西原 朗]

[CHILDREN OF THE EVOLUTION]
ALLNUDE

オールヌードの中心人物であるボーカリストの水永は、デルジベットのボーカリストISSAYのソロユニット『HAMLET MACHINE』のパートナー。そんな彼もまたISSAYに負けず劣らず独特のカリスマ性を持ったボーカリストだ。この自らのバンドでは、作詞・作曲のほとんどを手掛ける彼の世界を十二分に満喫することができる。

80年代のイギリス・ニューウェイブやグラムロック的なアプローチで、巧みに表情を変えるギターのメロディーラインやリフ、キーボードのポップセンスあふれる音色を散りばめ、激しさの中にたまらないグルーブ感を忍ばせて聴かせるダイナミックなサウンド。そのサウンドに低音で鋭く、なまめかしく歌う水永のボーカルは、退廃的な世の中に対する思いをリアルな詞で表現し、さらに強烈なインパクトを与える。その音、歌声、詞が一体化する瞬間、脳裏に劇的な映像が浮かび上がり、まるで映画を観ているかのような感覚に陥るのだ。　[文・村田圭子]

[DOLL]
DOLL

思わず振り返ってしまいそうなほど大人っぽいのに、ふとした瞬間、小悪魔的な面を見せる女性ってイイもんだけど、全曲自作のミニアルバム『DOLL』でデビューしたDOLLのサウンドには、そんな女性の不思議な魅力や感性があふれている。まず「おっ」と思わされるのは彼女の声。バイオリンやピアノのアコースティカルでしっとりとした音色に乗る声質は、湿り気があって、少しアンニュイで色っぽい。そんな女性が、眠れないときに数える「ヒツジ」たちの中に「ヒツギ」を紛れさせたりする、ぶっ飛んだ感覚を持っているときちゃ(「羊」・M-⑦)、世の男連中にとってはたまらない。

でも、何よりミソなのは、近ごろ、仕掛けられた、この手のシンガーが多くてウンザリさせられる中、このアルバムに漂う世界があくまでナチュラルで彼女の雰囲気や感覚がそのままサウンドになった感じだってこと。桜井鉄太郎(cosa nostra)というビックネームのプロデューサーが付いていても、DOLLは"あやつり人形"じゃないのだ。　[文・大西智之]

PRESS MANIA

単なる音楽ファンである僕は例に漏れず音楽雑誌が大好きだ。当然様々な音楽情報が得られるのが最もうれしいのだが、同時に、聴覚に訴える音楽を半ば強引に視覚的に写真や文字で読者に伝えようとする、“けなげ”で“はかなげ”な姿がたまらなく愛しい。毎月毎月手にする愛すべき様々な音楽雑誌（当然このJ-ROCK magazineも含む）。その数々の音楽記事や雑誌にまつわる出来事を、単なる素人音楽好きの目で観察し、あくなき挑戦に“全く勝手に”一喜一憂してみたい。礼儀知らずな奴、業界のしきたり知らずのバカ者などと攻撃せずに、せっかくだから何とかの独り言と思って一緒に楽しんでもらえたら幸いだ。

●このコーナーへの登場回数はきっとナンバーワンだと思う黒夢の清春。F誌に掲載されていた彼のインタビューは、「事務所パワーのビジュアル小僧」「他の人が本物なら偽物でもいい」といった、現在のJロックシーンを皮肉る発言もあり、共感するところも多くてやはり読んでいて面白い。当然、それは清春自身が黒夢の音楽に対して絶対的な自信を持ち、実際にそれだけの評価を得ているから言えることであって、実力のないヤツの同じような言葉は、負け犬の遠吠えにしか聞こえない。常に変化を続ける黒夢を批判する人もいるが、彼らの今までの行動や、サウンドの進化などを振り返ってみると、サウンド面でもビジュアル面でもシーンのパイオニア的な存在だったことに気付くはず。実績も実力もない、口だけのヤツの言葉を、ただ「好きだから」という感情だけで信じ切ってはいないか？

●「音楽は言葉や人種の壁を越える」「素直な気持ちを伝える方法を知っているのはミュージシャン」とC誌で語る浜田麻里。昔から幾度となく耳にし、音楽を語るときに必ず登場する言葉なのだが、その言葉を聞くと「やっぱり音楽は素晴らしい」と思ってしまう。いろんな音楽があふれ、いろんなアーティストが存在するJロックシーン。嫌いなものまで無理して聴く必要はないが、リスナーには素直な気持ちで数多くの音楽に接し、いろんなアーティストからのメッセージを受け取ってほしい。きっと、新たな発見がある。届けられる音楽を自分の中で遮断してしまっていては、伝わるものも伝わってこない。もちろん、伝えたいものを持っていない、あやつり人形のようなアーティストは論外だが。

●S氏が季刊で出しているB誌。今回はインタビュー、編集はもちろん写真まで氏がすべて手掛けているそうだ。正に氏が創刊当初から目指した“究極の個人誌”である。特に撮影に関しては、それまでは家族写真ぐらいしか撮ったことがなかったのだが、幾度となく失敗を繰り返し修得したと、そんな40歳を過ぎて新しく身に着けた才能について編集後記に書かれてあった。氏には失礼だが、40歳を過ぎて初めてカメラを手にしても、1冊の本として出すに十分なクオリティーの写真が撮れるようになるのである。「○○がやりたい」と思っているだけではなく、そのための行動を起こせば何かしらの手応えが返ってくるのだ。つまり何でも行動力ということだ。夢は見ているだけでは、ただの空想で終わってしまうぞ。

●ジュディ・アンド・マリーのメンバーのパーソナルインタビューがB誌に掲載されていた。そこには今は、華やかなステージに立つ彼らが通ってきた少年期（少女期）の思い出や、現在のプロとしての意識がつづられている。いじめられっ子だったYUKIが持つようになったポジティブな発想や、拓也のプロになるために高校を辞めた後の下積み時代や、恩田や五十嵐のバンドに対する考え方などが語られており、けっしてジュディマリが“運”だけでここまで大きくなったのではないことをうなずかせる。

また、N誌でのラルク・アン・シエルのパーソナルインタビューで、全員が口にしていた昨年のキーワードは“変化”。「こういう人になるんだから、こういうことはしてはいけません」といったプレッシャーを感じ、“意思のない人形”状態だったという一昨年の状況から、バンド主導型の体制に変化させた昨年。やはり、そんな体制になるとリーダーであるtetsuを始め各メンバーにも、音楽面以外で苦労しなければいけないことが多々あるようだ。しかし、hydeの言葉を借りて言えば、そんな状況でも彼らは“仕事が好きで寝る間を惜しんで残業しているサラリーマン”状態ですべてを前向きにとらえて苦痛には思っていないらしい。自分の夢を現実にするには、想像を絶した努力が必要だし、かなりの苦労を伴うものなのだ。つまり行動力だけでなく、忍耐力も必要だということである。当然、継続力もだ。それを苦痛と思わせないのが、本当の夢というものなのである。

Akira Sueda
末田晃

真心ブラザーズ。この名前を聞いて「知ってる、知ってる」と思う人は多いはずだ。では彼らがやってる音楽は？　「う〜ん、何となく分かる。フォークギター弾いて元気よく歌ってるんでしょ」。

ところが昨年の彼らは、そんなイメージをブチ壊す思い切りロックな作品を2年半ぶりに発表。この路線で突っ走るのかと思いきや、続いて思い切りポップな作品をリリースした。1月27日、久しぶりに行われた大阪でのライブでは、桜井のエレキギターが鳴り響き、ジャンプしながら倉持がシャウトした。今の彼らには「安心していられない、何をやるか分からない、目を離せない」そんな表現がピッタリだ。

そこで今回、作品やライブに対する彼らの考えを聞いてみた。話を聞くほどに、今後が気になる二人である。

●昨年は2年半ぶりのアルバムやソロ活動などいろいろな作品が発表されましたよね。正直言って私の中にあった真心ブラザーズに対してのイメージは、「新作を聴かなくてもやってることが分かる」というのが強くて、変な安心感みたいなものを持ってたんですよ。でもアルバム『KING OF ROCK』やミニアルバム『TIME GOES ON』を聴いてからは「注目しておかなくちゃ」って感じさせられて。二人の中には、今までの固まったイメージを壊したいという気持ちはありました？

桜井秀俊(G&Vo、以下S)：気持ちはそんなに変わってないんですよ。フォークギターよりエレキギターの方が、音がデカくて気持ち良かったぐらいのもので。でも2年半開いてお互いが別々の事をガンガンやってるうちに、「シンプルな編成でやれるのが一番いいなぁ」というのに気づいて。それに今までに屋台骨みたいなところをやってきちゃって、飽きたなあっていうか(笑)。

●(笑)そういう気持ちはあったんですか。

S：う〜ん、ありましたよ、多少(笑)。それが『KING OF ROCK』を制作したら何か気持ちよくスポーンと出来たんで。こりゃ、ええわいと。

●倉持さんはどうですか。イメージを変えたいとかって気持ちは？

倉持陽一(Vo&G、以下K)：う〜ん、ありましたね。やっぱり、もうちょっとモテたいなと思ってたんですよね(笑)。

●(笑)前はモテてなかったわけじゃないでしょう？

K：若い女の子が最近すごく美人だから、そういうのに受けたいなと思ったんですよね。オタクみたいな女の子に受けるんじゃなくて(笑)。

●(笑)じゃあ、それぞれに思いがあって『KING OF ROCK』ができたわけですけど、それに対する周りの反応は納得のいくものでした？

S：予想以上でしたよ。過剰に反応されてビックリしてます。俺は全部のアルバムを『KING OF ROCK』と同じくらいの気持ちでやってたんだけど(笑)。「何だ、みんなロックやればいいんだチクショー！」みたいな(笑)。

●倉持さんも期待通り女の子に受けました？

K：それはまあ……って、かなり受けましたよ(笑)。でも一番すごいとは思わないけど、すごい方には入るぞっていうぐらいの自信は前からあったんですよね。だからそれが分かったって言うか(笑)。

●やっぱり真心も、"作品が売れる、売れない"ってことは気にしますか。

S：う〜ん、「売れないより売れる方が絶対楽しいぞ」とは思います。

K：俺は、今は「いいや！」と思っちゃって。っていうかさあ、前は「売れなくてもいい」って言うと結構ヤな顔されたから、去年も口だけは「売れたい」とか言ってたんだよ。「売れたくない」っていうとやっぱりビジネス上問題起きるんだよね。でも俺はこのペースで死ぬまで出来れば幸せだなあって気がすごくするんですけど。

●倉持さんの考えに桜井さんはどうですか。

S：ん〜、100万という数字は異常だと思うけど、10万ぐらいならエエかなと思います(笑)。電車で女子高生見てデレッとしても、だれにも何にも言われないくらいの有名ならありっていう(笑)。

K：まあ、このままやりつつ何かの拍子に売れるっていうのは一番いいんだけどね。

●今の音楽業界ってシステムや"売れる、売れない"ってことにおいて、疑問を感じる時も多いですよね。

K：うん、すごく難しい所だけど。「熱くならず一緒に遊びましょうよ」って感覚で本当はやりたいんだけど、「やらなきゃダメ、売れなきゃダメ」みたいなのがあって。でもそういうこと言う人に限ってすぐに周りからいなくなったりするわけ。一生俺たちの責任持ってくれるなら言ってくれてもいいんだけどね。だから「とりあえずあなたと僕たちが一緒に仕事している間は、楽しく前向きに何かやりましょう」っていう感じでいたいなあ。

S：やってる商品が音楽だから、まずやってるヤツらが楽しくないと意味はないと思うのね。俺この前シャ乱Qのつんくと話してて、彼らは本当に音楽が好きで音楽をやってるっていうより、有名人でありたいと思うためにすべてのパワーを使ってるっていうのが分かって。それはそれですごく清くて健康的なものだと感じたんですよ。でも翌朝考えたのはやっぱりタイプとして自分にはできないから、俺は音楽を心底楽しんで、その感じが純度100%に近い状態で聴いてる人に伝わるような物を作る。それがわれわれには健康的だし、それがもしセールスにつながればみんな「ヤッター！」だなって。理想はそれですね。

●今日はライブを見せてもらったんですけど、大阪のライブってどうですか。

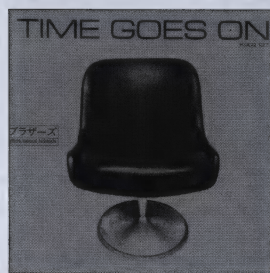
S：ずうずうしくていいですね。こういうこと誌面に書かれると嫌われるかもしれないですけど、大阪人は同じ日本人と思えない(笑)。アメリカ人に近い、自己開放度がすごくてうらやましいですよ。

K：そうかなあ。俺はねえ、そういうイメージがあったんだけど、東京よりもさらに奥ゆかしいんじゃないかと。ライブでおとなしいっていうか。

●あれ？　二人のその意見はどこで分かれるんでしょう。

S：でも、ライブ終わっても全然帰んなかったじゃん。
K：ああ～、何か壁を越えるとすごいのかなあ。俺、ライブで大阪へ来る前に憂歌団のライブアルバムを聴いてて、「これが大阪のライブだ」ってすごい思い込んでたわけ（笑）。そしたら「あれ、みんな何にも叫ばないのね」って。そういう荒っぽい感じかなと思ってたんですよ。でも結構みんな行儀いいでしょ。
●音楽を聴いてる観客だとは思いましたね。『KING OF ROCK』と新曲という内容だったから、様々なタイプの曲がミックスされてましたけど、曲によってきちんとノリ方を変えるっていうか。曲のタイプが違うってことは、ライブの構成として難しくなかったんですか。
S：今日はねえ～、構成なんかしなかったっすよ。
●えっ、じゃあ曲順はどういうふうに？
S：曲は倉持さんが決めたんだけど、だいたい『KING OF ROCK』も新曲も交互にやっていって。途中で『KING OF ROCK』の曲はみなさん知ってるからいい空気になるんだけど、新曲やったらみんなシーンとしたりして（笑）。
K：新曲が出来ちゃうと、もうやりたくてやりたくてしょうがないんですよね。ただ古い曲は、お客さんも身体で聴いてるみたいなところがあると思うんですけど、新曲はやっぱり耳で聴いてるって気がするんですよね。
S：すっごい聴いてたよね。いいお客さんだなって。
K：だから新曲やる時って見た目は盛り上がってないけど、別に全然問題ないです。
●だからこそライブでは新曲をやりたい。
K：そうそうそう。やっぱりやりたくない曲をいかにも盛り上がってるように見せてやるのって、あんまり良かれと思わないんですよ。
●その新曲も曲によってタイプはバラバラですけど、とにかく力強さがありますよね。
S：ああ～、やっぱりリズムにめちゃくちゃ凝るようになったからでしょうね。世の中に出てる音楽で自分にグッと来るものって、リズムがカッコいいことが第一条件になってきてるから。ドラムの人とかかわいそうですよ、いろんな注文出されて。
●今日のライブで倉持さんは「気持ちいい～」とか言ってたし、ライブも盛り上がってたんですけど、アンコールは1曲でしたよね。観客はかなり粘ってましたけど（笑）。
K：決めてなかったし、「高い空」（アンコール曲）の時点で気持ちが終わっちゃってたから。理想はアンコールがないライブが一番いいんだけど。本編だけで使い果たすというか。アンコールは本当にアンコールで、その場で何やろうかって段取りがないみたいな世界がいいし。それに今日も「高い空」の前にアンコールのコールなんかなかったんだよ。客は絶対やるって思ってんだよ（笑）。
●う～ん、そうですね。最近どのライブでもその傾向はすごく強いですよね。
K：微妙なとこだよね。サービスしたいけど、そのへんの予定調和はイヤだなみたいなところがあって。
●そういうのは気になりますか。
K：建て前と本音のバランスをすごく考えますよ。建て前が全部ダメってわけじゃないけど、そのバランスをどの辺で線引けばいいのかなっていうのは、アンコールに関してはすごく思います。
●一生懸命な観客の声に応えて出るっていうのが基本ですもんね。
K：そうそうそう。
S：でも今日は正直言うと心が動いたけどなあ。4月に来るからまあいいかって思ったけど（笑）。
●ライブは二人にとってどういうものですか。
S：お客さんとコミュニケーションの場ですね。やっぱりやってるのが音楽だから、直接聴いていただくのが一番いいっすよ。僕はライブって空気を作る作業だと思ってるから、今日も緩やかにスピードが増していって400メートル走的ないい空気が作れたと思います。
K：客との距離も近かったしね。この前のライブは渋公（渋谷公会堂）だったんですよ。だから近いからやりやすいっていうのかな。
●やっぱりライブハウスの方が好き？
K：う～ん、本音と建て前のバランスで言えばライブハウスって本音成分が増えるわけですよ。だからそのへんが好きですね。やっぱり渋公だと2階の後ろでも4千いくらお金を出して見に来てくれてると思うと、その人が来て良かったなあって思える気持ちを届けたいから、どうしても建て前成分をちょっと増やさないといけないっていう。建て前が悪いって言ってんじゃないんだけど、好き嫌いで言ったらやっぱり本音成分が多い方が好きだから。今日強引にあれだけの新曲をやったのも本音成分が増えてるっていう、そういうことですよね。
●では最後に、真心ブラザーズって今後どうなっていくんでしょう。
S：全然具体的じゃないけど、やっぱり1曲でも多く強い曲を作るのがいいなあと思います。曲自体が僕らを離れて命持っちゃうような、そういう感じ。スタンダードになり得そうなロックンロールみたいな強さを持った曲が出来ればいいなと。
K：よりモテたいっていうのもあるんですけど（笑）。う～ん、スポーツ成分をちょっと増やしたいかな。スポーツしたときに出るアドレナリンみたいなものが、音楽やってる瞬間にも出てると思うんですけど、そういう気持ちいいところを探すような音楽をやりたいっていうか。今、ライブはスポーツ感覚ですごく出来てるんだけど、レコーディングにもそのフィーリングを持ち込めたらカッコいいなと思ってて。あと全体のパッケージとか自分たちのイメージとか、トータルでそういう感じでいけたらいいですね。

［インタビュー・山田純子　撮影・浅野順子］

ALBUM
KING OF ROCK
MINI ALBUM
TIME GOES ON　**NOW ON SALE**

independence
April Fool

エイプリル・フールがライブ活動をスタートさせたのは95年12月。インタビューをした現時点では、まだバンド歴約2ヵ月という新しいバンドだ。しかし、各メンバーは、それまでに数々のバンドを経てきた実績のある者ばかり。1月29日に大阪ロケッツで観た彼らのライブは、重く厚くうねるビート、エッジの効いたギターリフ、激しく自由自在に声色を操るボーカルワークで、アメリカン・ハードロックを生々しいまでの迫力で聴かせていた。

メンバーは、44マグナムのボーカリストに影響されたというKatayama（Vo、以下K）。マイケル・シェンカー・グループ、レインボーなどの重いギターにあこがれたというMichimukou（G、以下M）。名前を挙げればビリー・シーンとかTMスティーヴンスだが、あらゆるジャンルに好きなベーシストがいるというInoue（B、以下I）。見た目であこがれているのはモトリー・クルーのドラマーだが、ジャンルにこだわらずジャズやラテンパーカッションなども好きというItazu（Ds）。

「僕らのバンドはリズム隊2人の音楽趣向の幅が広いんですよ。で、ボーカルとギターっていうのが、ハードロック大好きという（笑）。」（M）

ステージでの彼らは、それぞれのキャリアがそうさせているのか、活動を開始して2回目だというのに余裕を持ってライブを楽しんでいる。そこには、テクニック重視でガンガン聴かせるという印象はなく、ノリと勢いを前面に押し出したロック本来の気持ち良さがあった。

「僕たちの音楽はテクニックじゃなくて、楽曲が良いか悪いかだけでね。例えば、カレーを食べてて、それがおいしいかマズいかだけっていう。どこのホテルのシェフがどれだけ手の込んだカレーを作っても、それがおいしくないとダメだなっていうとらえ方を音楽に対してするんです。うちのリズムセクションっていうのは、さほどテクニックをひけらかすようなことはやってないけれども、やれば出来る人間なんですよね。グルーブ感とドライブ感っていうのを壊さないアレンジがきっちり出来る2人なんで、信用してる。で、そこにギターの分かりやすいリフやメロディーが乗った時に楽曲としていいものが、食べておいしいと思えるものが出来たらいいかなってところですね」（K）

このバンドの原動力とも言えるKatayamaは、このメンバーなら理想的なバンドになれると確信している。

「お互いに『カッコいい』と思える部分で重なるところが多いんですよ。結局、やりたいのはバンドじゃないですか。だから音の部分で向いてる方向が一緒だったり、バンドの進んでいく方向が一緒であれば性格なんて逆に合わなくてもいいぐらいだと思っています。合うに越したことはないんですけど。うちは実際、仲はいい方やと思うし。4人で言いたいことを言い合った上で始めてるから。なんかこの4人なら『悪いようにはならんやろう』と思えるし」（K）

芯（しん）の部分でしっかりとつながっている彼らは、曲作りにもメンバー全員で取り組む。まさにバンドサウンドといったところだ。

「例えば、スタジオでリズム隊が音を出してる時に『あっ、今のリズム気持ちいいな』とか、ギターの『今のリフかっこいいな』『今のメロディーいいんちゃう』とか言い合いながら、曲が出来ていくんですよ。それはもう、食べた時においしいと思うものを形にしてるだけっていうか…、『ここで、こんなすごいことをやってやろう』とか『こんな展開をしたらどうやろう』っていうことは全然考えてないんです」（K）

4人の純粋な感性が合わさって生まれた曲に、Katayamaの詞が乗ってくる。インディーズのハードロックバンドと言えば、英詞を耳にすることが多いが、彼の作る詞は日本語。

「日本語の方が言葉遊び的なことが出来るんですよ。それに僕の歌詞をサッと聴くと多分、日本語か英語か分からない部分の方が多いかもしれない。曲が出来て最初にコンセプトを決めて、頭に浮かんだメロディーをハナモゲラ語で歌うんですよ。で、『あっ、この母音の動きがカッコええな』ってなったら、その動きに合わせた日本語を持ってくる。その中で、どうしても日本語のはまり切らないところが出てきたら、極力分かりやすい英語を持ってくるんです。内容に関してはさほど重要性を感じてなくて、聴いた感じとか、メロディーの動き方とか、譜割の仕方とか、母音の動きとかの方が僕にとっては重要で、それに合った言葉を選んで書いていって一つのストーリーにしてしまう」（K）

音にしても歌にしても感覚的に思いついた『カッコいいもの』を常に大事にしている彼らだからこそ、ライブでも生々しいほどの迫力が出せるのだろう。

エイプリル・フールはバンド名にちなんで4月1日に、初のミニアルバムをリリースする。ここでも、ライブの臨場感を伝えるほどのハードなサウンドが全開。1stアルバムにも関わらず、早くも遊び心を聴かせる余裕さえも見せている。

「速い曲の前ふりでちょっとジャズっぽいことをしたりね…。ジャージーな雰囲気のところからいきなり僕の激しい声を聴かすことで、ゾクッときてもらえたらいいなっていうだけで付けたんです。単なる遊び的な部分ですね。そこにはなんの計算もないし、音楽はしょせん遊びでしょ。遊ぶんやったら真剣に遊んだ方が面白いし、真剣に遊んでるから聴いてる方も面白いだろうし。正直言って売れたいという雑念はありますよ。でも、遊び心は常に忘れないでいたいなと思ってますね」（K）

そんな彼らにとってライブは、究極の遊び場所。

「子供が遊ぶジャングルジムとか、砂場みたいな、自分が楽しく表現出来たらいいわっていう場所ですね。笑っても、アホみたいな顔をしてもいいし、だから自分で楽しさをにじみ出せたらいいっていう」（M）

「それでお客さんが、うちのライブを観て聴いて『面白かったな』『カッコ良かったな』って思ってくれたらね。カレーがうまかったら、また食べに行くでしょ。ただ、『カレー食べるんやったら、あそこに行こうか』じゃなくて、『あそこのカレー食べたいな』って言われるようにはなりたいと思います」（I）

［文・村田圭子］

LIVE SCHEDULE

2月29日　大阪ロケッツ

4月1日　大阪ロケッツ（CD発売記念ライブ）

April Fool
［ April the 1st ］

4月1日リリース

J-ROCK TRIBUNE

APRIL Vol. 11

voice
B'zが求めるものとは

最近、B'zの本当のファンであるのか分からなくなる。新曲が出たら喜ぶのだが、いつも売れ行きばかりが気になり、数多くの音楽番組のランクで1位になっているB'zを見て喜んでいる。好きなミュージシャンが1位になって喜ぶのは当たり前なのだが、ここ何年かは売れ行きばかりが気になるのだ。

B'zの求めているものは、売れ線の曲ではない。B'zの二人は、少しでも多くの人々の心の中にずっと残っていてほしいと思っているし、自分たちがかっこいいと思っている音を曲にしてみんなに分かってください！ってことなんだと思う。なのに、このごろの私は1位でないと、心の中にあるB'zのプライドが許さないのである。私は本当にB'zを愛しているのか。売れ行きばかり気にしていて、B'zの一番良いところを見失っているのかもしれない。1位にならないと悪い曲と決めつけてしまう自分が恥ずかしい。B'zがファンに求めているものは、そんなことではないのに…。

売れ行きばかり気にしてる私って何なんだろうって思う。最近つくづく思う。イヤなB'zファンになったものだと。

［兵庫・ちえみ・♀・14歳］

illustration
Asako Tashiro

voice
今のロックは本当につまらないのか!?

3月号のchatter boxで今のロックシーンはつまらないというのがあった。実を言うと、私も1年ほど前までそう思っていた一人だ。ポップスなのかロックなのかよく分からない音を奏で、顔やビジュアルが重視される日本のロックにはもう飽き飽きしていた。

けれど、その私の考えはザ・イエロー・モンキーを知り、すごく変わった。私が初めて聴いた彼らのアルバムは『未公開のエクスペリエンス・ムービー』だったのだけれど、それまで私が知っていたロックとは全く違った。女っぽさの中の男っぽさというか、すごく不自然なんだけどそれが自然という、ワケが分かんないんだけどなぜか引かれる…という具合だった。それ以来、私は彼らの曲が好きでアルバムを聴いたり、ライブに行ったりしているわけだけれども、それで一番思うことは『バンドは生きている』ということだ。

バンドは人間がやってるんだからという意味ではない。バンド自身が一つの生き物になっているように思うのだ。例えば、イエローモンキーで言えば、私の知り合いは彼らのことを「ああ、皮ジャン系の人やなあ」と言っていたが、それは彼らの今の姿であってけっして昔の姿と同じではない。3月号にあった通りグラム色の強い時代から現在のようなものまでいろいろ。つまり、バンド全体が成長（変ぼう）しているのだ。彼らはブレイクしたとよく言われているけれど、まだまだ大きくなるだろう。しかし、バンドが成長するのはイエローモンキーに限ったことではない。今のロックシーンで活躍している人、または今から出ようとしている人、すべてのロックスピリッツを持った人に当てはまるのだ。だから私は「今のロックシーンはつまらない」というひと言で片付けてしまうのはどうかと思う。確かに今のロックシーンには、ビジュアル中心や売れ線狙いのものも少なくない。しかし、彼らはまだ発展途上の状態だと私は思う。その発展途上のものが発展していくから、私達はロックを聴いてるんじゃないだろうか。もしも、『ビジュアル中心、売れ線狙い』のままのバンドがあるとしたら、それは大量消費されるだけの流行歌（流行バンド）にすぎないと思うし、絶対に次世代まで残っていかないだろう。だから「今のロックシーンはつまらない」なんて言わないで彼らの変ぼうを楽しんでほしいと思う。

17のくせに生意気だとか言われそうだけど「本当のギター、ベース、ドラムの音を10代でもちゃんと聴けるよ。ロックに年齢は関係ないよ。楽しむのも楽しまないのもあなた次第だよ」って言いたい。あ〜、言いたいこと言ってスッキリした。気分そう快だ!!

［京都・Chiaki・♀・17歳］

voice
BUCK-TICKへの不満

3月号に載っていた滋賀のB'z大好きさん。ご意見ありがとう。私の書き方が悪かったのですが、2月号に載った私の意見はけっして「13、4歳の子供にはBUCK-TICKが分からない」という意味で書いたわけではない。私はただ最近のBUCK-TICKのファンに対する考え方に疑問を持っているだけだ。これは今までBUCK-TICKのライブに行ったり、インタビューを読んだりして漠然と感じ始めたことなので、言葉にするのは難しいのだけど、簡単に言ってしまえば“ファンを全く必要としていない”と言うことだ。それどころか批判しているようにさえ感じる。ライブでは私がここにいる意味があるのかなと思う。彼らの自己満足に付き合わされているような気がしてならない。それをよく言ってしまえば8月号に書かれてあった「一方的にたたきつけられる確固たるライブパフォーマンス」なのだろうが。だから最近ファンになったであろう13、4歳の人の意見が聞きたかった。確かに曲はどう考えても好きだ。でももし私が13、4歳なら、最近のBUCK-TICKを好きになったかどうか分からない。

[大阪・密室・♀・21歳]

voice
3月号のchatter boxを読んで

3月号のchatter boxで「売れるとそれまでハデに髪を立てたり、メイクしていたのをやめて、大衆受けを狙うバンドが多い」と書いていた人へ。あなたがどういうバンドのことを指してそう考えたかは知らないけど、その考え方は間違っていると思います。

確かに今は、自分達の音楽の方向性よりも「売れる」ということをメインにしている人（バンド）が皆無というわけではないけれども、中には「売れる、大衆受けする」という考えを別にしてメイクをやめた人もいると思います。

私はX JAPANのファンで、彼らは昨年の暮れから特にメイクがナチュラルになったけど、私はファンとしてそれと大衆受けを目指すのは違うと断言できます。同じく3月号のchatter boxに「最近のXはちょっと物足りない」って書いていた人がいたけれども、根本的なものは変わってないと思うし、「攻撃性がなくなった」と言うのは見かけだけにとらわれすぎて本当のものが見えていないのではと思います。

このごろバラード調の曲のリリースが相次いでいた事や、メイクを変えた事があってそう言ったのかは分からないけれど、私はすっきりと髪を切ったYOSHIKIやTOSHIに攻撃性を感じたし、現に彼らは「世界」という大きな壁に向かって攻撃を仕掛けようとしているじゃないですか。

それにどんなメイクや行動をハデにしたって“売れない”バンドもあるし、ナチュラルにしても“売れない”バンドもある。逆にどんな格好をしても、行動をとっても“売れる”バンドは当然あるじゃないですか。曲に感動して、格好良い、好きだと思うのに、理屈はいらないのです。

アーティストであったって人間なのに変わりはないのだから、私達のように気分で髪を切ったり、メイクを変えたりすることもある。趣味・好みが変わったって何もおかしくはないと思います。なのにそれを細かく気にして、勝手に理由を考えて善しあしを判断するなんて間違ってる。好きなアーティストが、今までと違う行動をとったりしたら、それに対しての本人のコメントを理解するのが一番だと思う。

見かけだけとか、音楽の方向性だけとか、考え方だけとかこだわらずに、もっと広く全体を見てみたらどうですか。それから自分が好きとか嫌いとかを考えて判断してみても、遅くはないと思います。

[投稿・京都・小田真弓・♀・12歳]

WHAT'S IN OUR EDITOR'S ROOM HAPPEN!!

■ハプニング続きの4月号。①モダングレイの取材を予定していたが、ベースの今井が急病のためライブが中止になった。春には元気な姿が見れそうだが…。②ラフィン・ノーズのライブでは熱狂する観客がカメラマンに激突。彼は顔を強打し、しばらくムチウチ状態に…。③ザ・マッド・カプセル・マーケッツのTAKESHIのインタビュー当日。彼が落ち着かない原因は、腹痛だった。それでも一生懸命に話をしてくれた彼に感謝。④真心ブラザーズのインタビューはライブ翌日の予定。ところが突然ライブ終了後に変更…。大いに焦ったが、ライブで疲れている体にビールを飲んだ二人は冗舌になり、よくしゃべってくれた。⑤甲斐よしひろのインタビューは突然の場所変更。本誌の前に行われたテレビ取材局にいた上岡龍太郎や笑福亭鶴瓶と話し込んでしまったためらしい。もちろん彼は本誌でも本音の面白い話を聞かせてくれた。⑥取材のため本社に来てくれたガーゴイルのKIBA。コーヒーを出したところミルクをドバドバ入れ始め、みんなビックリ。話を聞くと彼はコーヒーが飲めなかったのだが、今日初めて挑戦してみたらしい。その理由は、サブカルチャーのコーナーで！

■毎月VOICE & chatter boxに対しては、たくさんの反響が届くが、特に3月号は“相談”としたために、多くの読者が真剣な答えを送ってくれた。確かに一人ひとりの感性は違うから、みんなが同じ気持ちになるなんて不可能だけど、誌上でみんなの個性あふれる意見が飛び交うことは、とっても小さなことのようで、Jロックや音楽シーンを変えていく一番純粋な原動力になると思う。音楽を作り出しているのはアーティストだけど、それを支えているのはリスナーなのだから。

■新作『FIRE DOG』のキャンペーンで大阪を訪れた斉藤和義。今回のアーティストニュースにも載っているが車がよく壊れるという話について尋ねてみると、「ついてないんですよ…」と悲し気なひと言。同情しようとしたが、横からすかさずマネージャーが「あんな車買うのが悪いんだよ！」とするどい本音を挟み、本人と共にヘラヘラ笑っているしかなかった。こんな話を持ち出すんじゃなかったと後悔…。

■久しぶりに大阪を訪れたグレイのTAKURO&JIRO。人気者の二人は大忙しで、かなりの本数の取材をこなす中、本誌に時間を割いてくれた。「何本取材を受けたか分からない」「どこで何を話したか覚えていない」というボロボロな状態の二人だったが、当日はインタビュアーも体調が悪くてお互いにボロボロ自慢。しかし、考え込ませる質問も、笑える質問も熱心に答えてくれた二人。その後ほとんど雑談をする余裕もなく、彼らはラジオの生放送に出演し、名古屋へ旅立っていった。作品のためとはいえ、アーティストも大変だ。

3月号のTRIBUNEに一言!

●chatter boxで最近のXは物足りないと言ってる人。僕も同じ思いが心のどこかにあったけど、新曲「DHALIA」を聴いて吹っ切れた。きっとメンバーもファンの期待を裏切らないアルバムを作っていると思う。（神奈川・米山征宏・♂・18歳）

●VOICEのusetettoさんの記事を読んで胸が痛んだ。ひどい人たちがいるね。写真を撮るなんて特に。ラルクのメンバーはすごく怒ってるもんね。生写真とか買うなって。ライブの後に、生写真とか売ってるけど、本当にメンバーが好きなら絶対に買っちゃダメだよね。しかも、そーゆーやつらが撮ったものを、そいつらの利益のためにお金を払うのはよくない。その収益は、その悪いヤツらに行くんだよ。超ムカつくじゃん。絶対買わないよ、私は。
（群馬・愚麗誇・♀・19歳）

●chatter boxで「東京のライブに一人で行くのがコワイ」と言ってた人。絶対に行った方がいいです。私はイベントしか行ったことがないんですけど、友達に一人しかラルクファンがいないので、周りがみんなラルクファンってだけで「何て幸せ♥」って感じでした。今度のライブは絶対に行くつもりです。そこで会ったら友達になりましょう。
（神奈川・えるどらど・♀・15歳）

●「ライブハウスってどんな雰囲気?」と書いていた尾道さん。アーティストにもよるけど、ライブハウスはいいです!! アーティストが身近に感じられるのと、音がすごい。スピーカーを通して聴こえるけど、生に近いので、やっぱりホールよりもライブハウス。思い切って行けば、持ってるイメージはくずれるよ!!
（三重・田舎者・♀・27歳）

●「ファンクラブに三つも入るのはバカ?」って言ってた、いのいのさんへ。私は七つ入ってますヨー。全然バカじゃないと思います。それぞれの良さがあるし、一つに決めなくてもいいと思う。それをとやかく言うヤツの方がバカだ。お金はかかるから、できる範囲で入ったらどうかしら?
（神奈川・tomoka・♀・18歳）

●私は六つ入っているの。もちろんお金がかかることは分かってるけど、好きなんだもん。お金はいっぺんに集めるなんてできないから、ファンクラブの期限をずらしてる。ミーハーって思われるけど、そう思われても私の決めたことだし、他人にあーだこーだ言われたくないからね。
（埼玉・すずひろ・♀・16歳）

●超大好きなLUNA SEAのコンサートで、メンバーはもちろんファンの方々からもすごいPOWERをもらった。みんな輝いてた。ときめいてた。いい顔してた。私もその一人だったんだねー。
（宮城・YUKA・♀・16歳）

●2月号の桐生競艇くんへ。BUCK-TICKねーさんは、男性のB-Tファンがすっごくうれしい! やっぱり男の子は、彼らの音楽を純粋に"すごい"と感じてくれてファンになっているのだと思うし、ブランキーのライブを見たりするとやっぱり男の子のパワーってすごいと思うから。メンバーも男のファンが増えていることを誇りに思っていると思う。だからこれからも胸を張ってずっとB-Tファンでいきましょう。そして友達もB-Tワールドに引きずり込むのだ!
（愛知・雑魚・♀・22歳）

●この前「○○さんが結婚したらファンやめる」って言ってた人がいたんだけど、間違ってると思う。本当にファンなら、その人が幸せになるんだから応援してあげないと。私はWANDSのファンなんだけど、メンバーのだれかがもし結婚するとしても、心から祝福してあげようと思う。彼らの音楽が大好きだから絶対にファンはやめない。
（兵庫・NO33231・♀・14歳）

●海外のロックバンドもそうだけど、年をとればとるほど若いころよりカッコイイ（曲もビジュアルも）。ローリングストーンズもそうだし、エアロスミスなんか、もう全然今の方がカッコイイ。日本のロックバンドもそういうのが増えてくれたらいいな、もっと。髪白くてもハゲてても、ヒゲじいでも全然かまわない!
（富山・るみ・♀・18歳）

●SIAM SHADEはメジャーデビューして間もないバンドだけど、もう全然ベテランのようなライブ、そしてミュージックはロックの中でもややポップ調で、ハードからミディアムなものまで、型にはまらずこなせます。彼らはサイコーです。
（愛知・ST62・♂・15歳）

●このごろ"売れる"ということが私にとってどうでもよくなってきた。前まではオリコン初登場何位とか、何枚売れたとか気にしてたけど…。今は自分の中でいいもの、良い曲が1位やから…。だからいろいろTVとかでも、ランキングとかやってるけど、そのランキングを見て、1位だからよいアーティストと思わないでほしい。そういう考えの世の中が、今はうんざり…。
（兵庫・FLOWER・♀・18歳）

●ロックに目覚めたのは14歳のころだったから、僕のロック歴は30年。これからもロックを愛し続けたい。ちなみにJ-ROCKではFEEL SO BADのファンです。（愛知・浅沼政樹・♂・44歳）

●私は今受験生です。But、音楽が好きなのはだれにも止められない。もう勉強なんてそっちのけ。もし、今年受験じゃなかったら大、大、大好きなLUNA SEAの東京ドームのライブに行けたのに。この年に生まれたことが悔しいです。両親を恨みたい、というより恨んでます。
（大阪・SLAVE・♀・15歳）

●売れるとすぐ大きな会場でライブをするバンドがあるけど、別にやりたけりゃやってもいいけど、せっかく生の演奏、生の姿を見に来てるのに、結局ステージのスクリーンでしか見れないとか、テレビで見るより小さくしか見えないっていうのは、ファンにとってはさみしいものです。ライブが一番距離を感じない場所にしてほしいです。
（三重・ぽえ・♀・18歳）

●親からライブ禁止令を出されている人がいるらしいが、私は小6のころから母と一緒にいろんなバンドのライブに行っている。そりゃ中には「おばさんがライブに来てる」ってバカにしたように言った人もいたけど、本人は全然気にしてない様子。それどころかライブ前になると、「今度はこの服を着ていこうと思うんだけど、どう?」と私に聞いてくる始末。そんなかわいい母は、今度のX JAPANのライブを心から楽しみにしているようだ。（兵庫・有紀・♀・17歳）

●リスナーの目線に合わせて、リスナーに好かれるように曲を作るのではなく、自分たちがカッコイイと思う曲を作り、発表してくれるWANDSは本当の意味でのファン思いなバンドだと思う。これからも自分達に対して、音に対して、まっすぐであってほしいです。（広島・昇也・♀・14歳）

●私の初ライブはイエモンだったのですが、それ以来寝ても覚めてもイエモン、イエモン…。彼らが出ない音楽番組は見なくなったし、世界が狭くなったのかな。他のライブも行った方がいいのかも。こんなに好きになったのって他にちょっとなかったので、ちょっととまどってるけど、幸せだからいーか。（静岡・斉藤和恵・♀・19歳）

●LUNA SEAの東京ドームのライブに、X JAPANのコスプレをしている人がいた。これはちょっと……。（東京・涙華・♀・14歳）

●2月号でchatter boxに対して「みなさんいつもそんなこと考えて生きてるんですか? 疲れません?」と書いていた方。私は疲れない。私は黒夢とGLAYのファンだけど、彼らの音楽とかその他のロックとか聴いたりしていろいろ考えるけど、全然疲れたりしない。それはあなたがそこまで深く考えるきっかけを与えてくれるアーティストに出会ってないからじゃないですか。もっと一生懸命音楽を聴いてほしい。
（熊本・ヒロコ・♀・16歳）

●LUNA SEAの東京ドーム最高でした。ライブが始まるまでの不安がうそみたいです。会場の大きさに飲まれるのではなく、逆にすべてを包み込んでしまえる彼らを尊敬します。彼らをライブハウスで見てみたいと思うと同時に、ドームより大きい会場でも見てみたいと本気で思います。
（東京・杉磨呂・♀・19歳）

●最近のボーカリストは、外国人の歌い方をマネている人が多い。そのものっていう人もいる。どうせならカバー曲として出してしまえばよいのにぃ〜(怒)。(埼玉・ナンシー・♀・18歳)

●今すごくBLANKEY JET CITYが大好きです。歌ばっかり聴いてると頭が悪くなるとか言うけど、勉強が難しいだけだあ〜!!
(岩手・あ゛ー・♀・14歳)

●櫻井さんは今なにをしてるのかなあ。一刻も早くニューアルバムが出来るのを楽しみにしているぞ。また去年みたいにウツ病にかからないでよ!(愛知・和壱・♀・15歳)

●同年代の方! 身近な男の人を好きになれない悲しさってありません? フラれた理由の中に好きなアーティストの話ばっかりしてたせいも絶対あるはず(笑)。(福井・サクラサク・♀・24歳)

●アーティストって本当に大変だと思う。何万って人からいろんな意見が出て、それについて悩んだり、考えたり、反省したり。アーティストに限ったことではないと思うけど、ジェイロックマガジンを読むとそう実感する。(栃木・ケンケン・♀・18歳)

●音楽に良い悪いはないと思うんだけど、心が込もってなければ話にならない。ただひたすらにガツガツとビジネスマン的に仕事を消化していくようなやり方で、音楽をしてほしくないな…。そんな曲じゃ、人の心はつかめないよ。
(岡山・中島史恵・♀・15歳)

●Eins:Vierはファンに恵まれているという話があります。私もそう思う。でも、ファンにあまり恵まれていないバンドがあるのも事実だと思うんです。悲しい事ですね。ファン思いのバンドってたくさんあると思うんですよ。メンバーがファンに対して発信している思いを正面から受けとめてメンバーに返せる、メンバーとファンが一つになれる、そんな関係が作れたらメンバーもファンも幸せなのにね。ファンもメンバーに負けないぐらいがんばらなきゃね。(群馬・流那・♀・25歳)

●ミーハーだろうと、本物だろうと、ライブやイベントでのマナーが守れないファンは迷惑です。そのアーティストがどれだけ好きかではなく、その人の人間性の問題だ。(東京・チカ・♀・19歳)

●chatter boxは別に過激ではないと思います。人の意見というのは、善きにしろ悪しきにしろそれぞれなので、むしろ本音を言わないでみんなが同じ意見になってしまうことの方が怖い。ただ分別は持ちましょう。
(静岡・白うさぎ・♀・19歳)

●最近、大黒摩季さんにハマリすぎてどうしようもないです。期待しすぎてライブ行けなかったりしたら(ライブがあると仮定して)すっごいショックだろうなあとか思うと、ほどほどにしておかないとヤバイなと思う、今日このごろ。
(滋賀・らお・♀・16歳)

●2月号に私と同じ年齢の方がXのライブに行かれると載っていて、ホッと一安心。私も家ではインディーズ、ハードコア、パンク、メタルを聴き、特にBLANKEY JET CITYとTHE MAD CAPSULE MARKET'Sが好きです。ヒムロックも一人で行きます。
(愛知・松浦未知子・♀・45歳)

●私はB'zのことで頭がいっぱいになって、耐えられなくなる時期があります。ライブが待ち切れない、TV出演、ラジオ出演、CDのリリース、ビデオのリリースと、胸が苦しくて息が出来なくて死んじゃうんじゃないかと思うほど、待ち切れません。いっそ嫌いになれたらどんなに楽かと思うほどです。みんなそうなのかな? そうだったらうれしいな…。(埼玉・B'z中毒・♀・23歳)

●永ちゃんは良いです。みんな聴くように!
(大阪・しゃぶ郎・♂・18歳)

●音楽を好きであるコトに年齢なんてゼッタイ関係ナイ。私は8歳の時からロックが好きだし、おばあちゃんになってもずっと好きでいたい。人に何と言われても、自分と好きなアーティストを信じよう!!(北海道・麗奈・♀・14歳)

●今まであまり目立たなかったバンドがヒットを飛ばすと、よく雑誌に"ブレイク"っていう言葉が載ってません? あの言葉イマイチ好きになれないなあ。(大阪・みどり・♀・12歳)

●2月号のchatter boxの熊本の理沙さんの意見に同感です。バンドが大きくなることって、そのぶん自分の好きなバンドの音楽を良いって思ってくれた人が増えることじゃないですか。それでファンをやめる人って、自分の好きなバンドが売れなくて、生活が大変でもその方がいいって人達なのかなあ。私は自分の好きなバンド(L'Arc〜en〜Ciel)にもっと大きくなってほしいと思う方です。(福島・遠藤彰・♀・17歳)

●「BEAMS」を聴いてて思ったのだが、黒夢を聴くとなぜかマニキュアを塗りたくなる。普段塗ることなんてないのにさ。やっぱり刺激する"何か"が黒夢にはあるのかもね。
(北海道・澪・♀・20歳)

●今の歌番組には同じアーティストが何度も出演していませんか。新曲のプロモーションとはいえ、当たり前のように出て、TV慣れした姿は、いくら曲が良くても新鮮さに欠けていると思います。私としてはJ-ROCKのアーティストにもっと出てほしいのですが…。TVも良いアーティストを見つける手段の一つですから。
(三重・まっちゃんと抹茶・♀・18歳)

●音楽のことをとやかく言えるほど理解してはいないけど、ただ柴崎さんのギターが好きで、稲葉さんの声が好き。それでも「音楽好き」でOKでしょ?(福岡・恒任真由美・♀・25歳)

●2月号のオリジナル・チャートで1位が全部ラルク…。何か喜べない…だって急すぎる。でもうれしいような…。心の準備がぁ〜!
(神奈川・森田明子・♀・18歳)

●変わっていくバンドが多いってよく言われるけど、変わって何が悪いの? バンドは生きてる。呼吸する。成長していく。静止物なんかじゃない。自分の固定観念をアーティストに押しつけるなんておかしいと思う。「○○って変わったね」って簡単に言う人に、音楽のメンタルな部分は分かんないと思う。成長しないバンドがいたら、いつも100%で成長する必要の全くないバンドがいたら、一生仕えてもいい。
(香川・Foolish OK・♀・15歳)

●音楽は平等です。最近、ロックが差別されているだの、理解されないだのよく聞きますが、だからといって今流行の音楽を否定するのは変です。「ダンスミュージックばっかり…」とか言って、自分の好きなものだけかばうのは変です。小室さんの曲や詞に共感する人もいるはずです。「売れる」ことに「すぎる」ことなんてないと思います。もっと素直にすべての音楽を感じて愛しましょうよ。(神奈川・緑子・♀・18歳)

●最近多いベストアルバム、私は嫌いです。スーパーのお買い得赤丸特価品みたいで。ヒットシングルの寄せ集めは特に。だいいちコツコツその作品を買っていた人に失礼だと思います。
(東京・MARI・♀・13歳)

●クラスのみんな、やめてくれ〜。清春と清原を間違えるのは…。(兵庫・yuri・♀・14歳)

●ライブが好きです。もみくちゃにされようが、一番後ろから見ようが、自分の好きなアーティストとその時同じ空間を楽しく過ごして、そこに自分がいたんだよって実感できるから。
(埼玉・らりらり・♀・19歳)

疑問&相談

●私の周りにはそのアーティストの音楽もろくに聴かないくせに生写真とか買いまくって「キャー、○○カッコイイ。私絶対にファンクラブ入る!」という人がいて、見てると頭に来る。アーティストの人たちって自分の音楽を聞いてくれない人にファンって言われてもうれしいのだろうか。
(福島・hate?・♀・14歳)

●ビジュアル系ってどういう意味ですか。この前友達に「このバンド、ビジュアル系やから見かけ中心やねんなあ」と言われてすごく腹が立ちました。私はビジュアル系の正確な意味は知らんけど、ビジュアル系のバンドは曲はもちろん外見にも気を使っている人達だと思っています。絶対に外見中心ではない!
(滋賀・翔・♀・15歳)

●チャートに投票する時にいつも悩むのですが、私はLUNA SEAが好きだけど、"GUITARIST"には一人の名前しか書けないのでSUGIZOかINORANか、とても考え込んでしまう…。BUCK-TICKやX JAPANファンの人たちはどうしているのだろうか?
(大阪・レッド・キャップ・♀・17歳)

●ビジュアル系のバンドのライブに行って思うことなんですが、ファンの人たちがやってるあの"手振り"は、一体だれが考えてるんでしょうか? 私は前の方でやってる人たちのをマネしてやってます。
(茨城・小枝・♀・28歳)

SUBculture

音楽が、それぞれのアーティストの生き方、考え方を音というフィルターを通して伝えているものである以上（時としてそうでないものもあるが…）、彼らの人間性とその音楽を別ものとして考えることはできない。
アーティストたちは日ごろ、音楽以外のどんなことに興味をひかれ、何を感じて、何を考えているのだろうか。このコーナーは、彼らの音楽に対するストレートな思いから、あえてポイントを少しはずし、それ以外の様々なモノやコトに託された強烈な「こだわり」や「思い」を、赤裸々に語ってもらうことで、その人間性を感じる場を提供したいと思う。
ここに語られる心情も、彼らの心から生まれる音楽に触れる一つの貴重なチャンスであるに違いないのだ。

2nd FILE

TEXT by Keiko Murata
PHOTO by Makoto Kanehara

今回、登場してくれるのはガーゴイルのボーカリスト、KIBA。

彼は「今の自分があるのは、大きな転機があったおかげでね」とおもむろに話し始めた。彼が言う〝大きな転機〟は、アルバム『natural』や最近のライブパフォーマンスに観られる変化に関係があるという。そんな音楽や人間性まで変えてしまうきっかけとなった出来事とは…。

「あれは3、4年前だったかな、すごく体調が悪くなってね。今までになかったような症状が身体に現れたんです。で、病院に行って診てもらったら、『その年齢だったらほぼ違うと思うけど、一応ここを紹介するから行ってみなさい』って言われてね。〝えっ、これってがんセンターやん〟みたいな（笑）。とりあえず家に帰って『家庭の医学』っていう本を見てみたら、前立腺がんとかで僕みたいな症状があるって書いてあってね。もうガビーンときてしまって。夜だったんやけど、ハッと気が付いたら谷町筋の辺り（彼の家から電車に乗って20分ぐらい）を一人でふらふら歩いててね。でも、その間の記憶が全くないねん。〝なんじゃこれえ！　こんなことしてたらあかんわ〟と思って家に帰ったけど、それまで喉もとにナイフを突きつけられたみたいに死を感じたことはなかったからすごく怖かった。部屋で一人で泣いたこともあるし。

その後、がんセンターに行っていろいろ検査をしてもらって、結果が出るまでに2、3週間あったんですけど、その間ずっとおびえて暮らしてましたね。その間に〝自分はがんかもしれない、もしかしたら死の方向へ行くんかな〟と思ったときに、〝どうやって死のう〟としか考えなかったっていうか（笑）。〝いつ、どういう風に死ぬんやろう〟とか〝死ぬまでどうしよう〟とかっていうことに縛られてたような気がするんですね。それに結果を知るまで怖くて、親にも友達にもメンバーにもそのことは話してなかった。なんか人に話したら本当になってしまいそうだったんでね。特にメンバーには1、2年ぐらい時間がたつまで言えなかったんです。で、検査の結果が分かるのがちょうどツアー中やって、ツアー先のホテルから電話で聞いたら『陰性です。全く疑いはないです』って言われてね。もう一人で『よかった〜』って喜んでました（笑）。

1、2年してようやく自分の中でそのことが消化出来て、〝どうやって生きようかな〟みたいな気持ちが自然とわいてきたんです。それまで僕はインテリジェンスのないことがすごく嫌いで、〝自分のやりたいことしかしたくない〟っていう感じだったんです。でも、がんかもしれないと悟った瞬間からそれを消化するまでの間に考えたことの結論として、それが足かせになってると実感してね。今は何をやっても自分らしく出来ると考えれるように変わってきた。それぐらいの可能性を持ってなければ、なんか生きててもイヤやなって。自分の可能性がもっとあるような気もしたし。だから今は〝どんなことをやっても美しく自分を仕上げてみせる〟っていう気持ちになってる。それで、思い切り自分がバカだと思うこととか、自分のイヤなことをやっていく方に生き方を変えてみようとしたんですよ。

自分でイヤなことをやるときに〝自分らしいセンスを出しつつやる〟っていうことを念頭に置いて一つずつやっていったんです。それまでライブではMCをするのがすごくイヤやったから、最初はただしゃべってみることからやってみて、その次にしゃべるんやったらしゃべる中に一つのバリエーションを付けてみるとか。服装にしてもカッチリしたものしか着れなかったから、ちょっとくだけたものを買ってみる。それが着れたら今度はさらにくだけたものを買う。その中で自分らしく見えるものを探して可能性を広げようと考えてね。音楽にしても〝今までの自分だったら、こんなことはしないだろう〟という中で、一番自分らしいものを出せるように努力する。それをすることでやりがいも出て来てね。それは自分で実践してすごく意味のあることだと確信しました。

こういう言い方をしたら変なんやろうけど、自分ではラッキーやったと思う。死ぬかもしれへんということで、いろんなことを考える出発点を作ってもらったし、結果的には健康体やったということで、その考えたことを生かせて、生きられる時間ももらえたしね」

profile

ガーゴイル

87年5月に大阪で結成。結成当時から奇抜なビジュアルと独創的な楽曲で一種独特の世界を放つバンドとして知られていた。その世界は異次元空間に迷い込んだような錯覚に陥らせるほどミステリアスなものだったが、このKIBAの〝転機〟をきっかけとして95年に発表したアルバム『natural』で、今までのイメージを一挙に変える。

OPINION

これでいいのか、日本のロック。

売れっ子のプロデューサーがつかないと、音楽は流行らない

…らしい。

●プロデューサーに操られてるアーティストってバッカみたい。（神奈川・♀・17歳）

●あの人に曲を作ってもらえばミリオンセラー、みたいな最近の音楽傾向に疑問を抱いています。売れるための曲作りなんて、やっぱり変だよ!!（埼玉・♀・18歳）

●最近思うのは、アーティストなら自分でオリジナルを作れ!　それが本物だ。（広島・もみじ・♀・21歳）

●「小室」のネーミングでミリオンセラーにしているうんぬんというのは、小室本人よりそれを受け入れるリスナー側に問題があると思う。（新潟・5150・♂・22歳）

●「小室哲哉の音楽はヒット狙いとしか思えない」とありましたが、"プロデューサー"ってそういう事をする人じゃないんですか？　そのアーティスト（?）の一番売れる方法を考えるのがプロデューサーの仕事だし。アイドルの歌もそれなりに聴かせる彼の曲はそういう面ですごいと思いたいのですが。（神奈川・WAZ・♀・16歳）

●今、小室ファミリーがすごい人気があるけど、あれは小室さんがプロデュースしているからだと思う。なんの努力もしないでいきなり売れた××さんとか…他の歌手が見たらムカツクと思う。（埼玉・♀・18歳）

●「人気があるから」「かわいいから、かっこいいから」という理由だけですぐタレントとかをデビューさせてしまう、今の音楽業界も悪いと思うのですが。（奈良・♀・16歳）

●小室ファミリーはどうかと思う。何でちょっと売れたからって次々と曲を出すんだ!?　この人達の行動は本当に一生懸命プロの道を一途に目指す人達を深く傷つけていると思う!　そして小室の曲は思いっきりTMNっぽいと思う。売れ線ねらいならやめていただきたいです。（福島・♀・17歳）

●売れないのはしょうがないよ。地道にやっても。「小室」の名前だけで200万枚も売れるのもそれだけ「小室」がすごいから。そういう世界なんですよ。（鹿児島・♀・18歳）

●あの人達はミュージシャンじゃないですヨ。CDを売ることのうまさから言えば、ただの商売人!!　別に悪いとは言わないけど・・・?!　大キライ!!（香川・♀・25歳）

●最近、小室プロデュースという名前だけでCDが売れている。確かに曲は少し…だけいいけど、ロックもどきっていう感じ。なんか音楽を愛してるっていう感じが伝わってこない。ミュージシャンなの？って感じ。（福岡・♀・17歳）

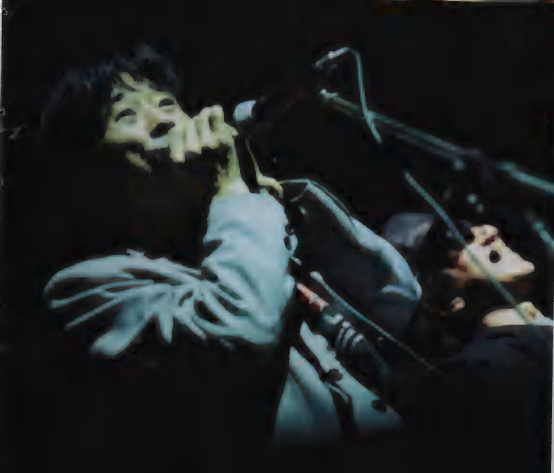
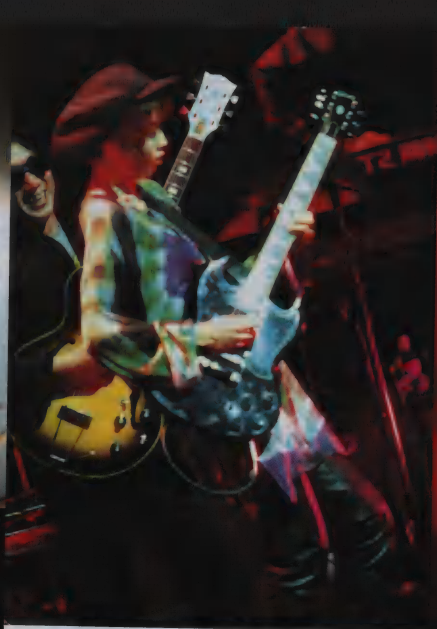
●最近、小室哲哉さんとか小林武史さんなどのプロデューサーの名をよく耳にしていて、アルバムを買う時とか、好きな曲を見つけると、プロデューサーの方に気が向いてしまっています。よく考えると、今までは表に出ることがなく影の存在でしたが、これからはアーティストよりもプロデューサーの方が目立つのではないでしょうか？　どう思いますか…？（埼玉・♀・23歳）

●好き嫌いは別として、現代の音楽産業の時流に乗り、売れ続け、小室ブランドを確立と称されるまでになった彼の努力と実力に対して、これはちゃんと認めるべきではないでしょうか？　私は小室氏に強いアーティストパワーを感じるのですが。（大阪・♀・26歳）

●仮にも"アーティスト"って呼ばれて抵抗しないのなら、やっぱ自分で音楽をクリエイトすべきだよ。プロデューサーにハイどうぞって言われた曲を歌って"アーティスト"なんて…。（兵庫・SAAB・♀・28歳）

●アーティストは自分で曲を産み出すべきだと思う。音楽は「つくりもの」じゃなくて、音の中に人間性とかハートとかを感じるものだと思うから。それが前へ前へ押し出されているのでなく、裏の裏に潜んでいるにしても…。（東京・カツノリ・♂・19歳）

●今をときめくプロデューサー。プロデューサー本人はカッコイイかもしれないけど、ただ歌っている人たちって何なの？　おまけに「○○さんに曲を作ってもらってうれしいですっ」なんて、アイドルじゃないんなら、もうちょっと考えたらどう？（東京・ルノー5・♀・22歳）

●このページは、最近の音楽業界の風潮を読者の皆さんがどう受け止めているかを反映する新企画です。今回はchatter Boxに寄せられた意見をもとに、プロデューサーのパワーだけで売れてしまう音楽について考えてみましょう。皆さんのご意見をお寄せ下さい。

NEO
BLUES
BATTLE
Vol. 1
JANUARY.27TH.1996
AT OSAKA KOUSEINENKINKAIKAN MIDDLE HALL
AKASHI MASAO GROUP
STORMY
TOSHIKI HARUNA
SUGAMI
SPECIAL GUEST
TAKASHI GOMI
SHINJI SHIOTSUGU
RYUICHIRO SENOH

本誌は、全国31局のＴＶ放送網でオンエア中の「ロック音楽ROOTS」のスポンサーとして番組を提供している。
洋楽の場合と同様、Ｊロックを語る場合も、ロック・ミュージックのルーツとしてのBLUES（番組内では発音通り「ブルーズ」と言っている）を見つめることで、その本質が見えてくるのではないかと考えるからだ。
番組はBLUESからリズム・アンド・ブルース、ソウルへの音楽的発展の歴史はもとより、それを源流として隆盛を極めたブリティッシュ・ロック、アメリカン・ロックなどをひもとき、現在われわれに身近な「ロック」の正体を提示しようという意欲的な内容となっている。
本誌では、そこからこれまであまりにも不明瞭だった、Ｊロックの将来の道筋が見えてくるかもしれないと考えている。なお、番組では当コーナーで取り上げている『SUNDAY BLUES LIVE』（大阪アメリカ村のグラン・カフェで毎週日曜日開催のイベント）の模様も紹介している。
88ページに放送各局とそれぞれの放送時間帯を一覧表にしているので、本誌と併せてぜひ番組をご覧いただきたい。

最後の歌だ。すべての出演者によるセッションで「Sweet Home Chicago」の合唱の輪が、満員の会場に広がっていく。応える観客のハンドクラップの力強さが、この日の満足度を裏付ける。会場の片隅で心地よくブルースにひたっていた筆者は、イベントの終了に名残惜しさすら感じていた。

本コーナーでも幾度となく紹介してきた『SUNDAY BLUES LIVE』はこの日、大阪グラン・カフェを飛び出し、『NEO BLUES BATTLE Vol.1』と題して舞台を大阪厚生年金会館中ホールに移した。関西出身の新進アーティスト中心で、しかもブルースのイベント。果たして千人以上も動員できるのか、などという下世話な筆者の疑念は、見る間に満たされていく客席にあっさり打ち消される。その客層の若さに、ブルースも世代交替の時を迎えていることを痛感する。「関西と言えばブルース」とかうんちくを垂れるオジサンは、ここでは天然記念物だ。

イベントのスターターを務めたのはブルースギター・マスター塩次伸二とウイーピング・ハープ妹尾隆一郎。うんちく垂れのオジサンたちがブルースに熱狂した世代のエースプレイヤーである。実は彼らは出演者であると同時にこのイベントの司会進行役でもあるのだが、ベテランらしく初っぱなからMCや名人芸のギターとブルースハープの演奏で客席のノリをつかんでしまった。

こうなるとトップバッターの春名俊希は流れに乗ればいいだけだ。もちろん緊張はあったろうが、ギター、ベース、ドラムス、キーボードのバックバンドを従え、ハイテンポの曲を味のあるボーカルで、堂々と歌いこなしていく。スローの「Same Old Blues」もしっかり声が伸び、以前より格段の進歩を感じる。ステージングはまだまだ不自然さが残るが、空間をいっぱいに使い切ろうという積極性はいい。彼の後のアーティストがあまり動かなかった分だけアピール度は高かったと思う。

次いで登場したのがストーミー。本誌提供テレビ番組「ロック音楽ROOTS」の現在のエンディングテーマ曲「Stagger Lee」を歌う期待の二人娘、ボーカル立原燎とギターのMAKI。しかしこの日は、ライブ感が薄いというか、観客との接点が見えてこないような気がした。「こうして、次はああして」と段取りを気にしすぎていたのでは・・・。それでもステージの小気味良いテンポが保てたのは、ライブを重ねてきた自信の裏付けか。もっとも、すでに上昇していた観客のテンションに救われたところが大きいが。若い女の子二人がブルースをバンド的にやろうというのが、極めて珍しいし、面白い。そういう意味では磨けば光りそうな宝石の原石みたい。今後に期待している。

3番手はすがみ。あれ？　ドレス着てる。見れば立ち上がろうとする前列の観客を制して、座らせてしまった。今回はミドルテンポのソウルを中心に渋く聞かせる。前々回のこのコーナーで、ハイテンポの曲でのボーカルをほめたが、ここではあえて聞かせる選曲で観客と向き合い、自然な形でノリを引き出すセンスに好感を持った。

トリを務めたのがAMGこと明石昌夫グループ。耳をつんざく黄色い声援が飛び交う。やっぱりな、とも思ったが、ブルースのコンサートじゃないみたい。そういう感想がオジンですか、こりゃまた、失礼。

なぜかこの日、ボーカルの千葉恭司は舞い上がってしまって、いつもの軽口すら出ない。しょうがねーなと思ってたら、ギターの団篤史がその分頑張った。のびのびと持てるテクニックを披露し、勢いを感じさせる。前に積極的に出てくる明石のベース、そして彼の見事なアレンジはオリジナルはもとより、カバー曲でも魅力的で、バンドの完成度の高さを見せつけた。ただ、欲を言えばレッド・ツェッペリン風のアレンジをのぞかせる割に、ドラムスが幾分弱く感じられたのが残念。

ここでゲストの五味孝氏が例によってテレキャスターを手に登場、「Little Wing」の前奏が始まったので彼が歌うのかと思ったら、意表を突いて明石がボーカルを取る。そして五味と共に代わる代わるボーカルをはわせる。これには驚いた。熱狂する観客へのゴージャスなプレゼントだ。

終わってみれば3時間以上の長時間、塩次、妹尾のベテランコンビによる軽妙なつなぎでバンド交代の時間も退屈することなく楽しめ、観客の反応もバッグンに良かった。聞くところによると、ほとんど経験のないイベントスタッフばかりだったらしいから、運営もほめられるべきだろう。登場アーティスト全員の『SUNDAY BLUES LIVE』での地道な活動が実を結んだ、立派なイベントだったと言える。この成功をきっかけに、新しい関西発音楽ムーブメントが盛り上がってくれると良いのだが。

［文・里居正裕　撮影・佐藤潤一］

Play List

[塩次伸二・妹尾隆一郎]
1.That's All Right

[春名俊希]
1.Louisiana Blues
2.Under My Thumb
3.Same Old Blues
4.South Bound
5.Jampin' Jack Flash
6.Shake

[STORMY]
1.Hound Dog
2.Love Me Like A Man
3.Stagger Lee
4.Thrill Is Gone
5.Mojo Working

[すがみ]
1.Street Walking Woman
2.Lady Marmalade
3.Use Me
4.House In Order
5.Jealous Guy

[明石昌夫グループ]
1.I'm In Blue
2.Ain't Nobody To Love
3.Palace Of The King
4.Someday After While
5.Purple Haze
6.Little Wing

[SESSION]
1.Sweet Home Chicago

J-ROCK ORIGINAL CHART

THE MONTHLY CHART OF [J-ROCK ARTIST CD 50]

[本誌2月号アンケートハガキによる読者投票と全国31局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK Artist Count Down 50」の1月12日~2月1日(4回)オンエア分の投票による月間総合順位をお届けする。次回締め切りは3月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートにセレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント!]

	ARTIST	得票数
11	X JAPAN	521
12	BLANKEY JET CITY	515
13	GLAY	505
14	ZARD	496
15	布袋寅泰	490
16	modern grey	452
17	THE YELLOW MONKEY	448
18	DEEN	432
19	THE STREET BEATS	401
20	CRAZE	385
21	FEEL SO BAD	375
22	奥田民生	354
23	DER ZIBET	326
24	PAMELAH	311
25	CHARA	298
26	FIX	276
27	筋肉少女帯	261
28	SIAM SHADE	247
	PERSONZ	
30	JUDY AND MARY	235
31	media youth	222
32	MANISH	193
33	D.T.R	188
34	ZYYG	171
	甲斐よしひろ	
36	Mr.Children	165
37	NOKKO	156
38	THE MAD CAPSULE MARKET'S	148
	矢沢永吉	
40	小沢健二	144
41	DEEP	138
42	斉藤和義	134
43	SUPER JUNKY MONKEY	131
44	SLY	123
45	栗林誠一郎	117
46	GARGOYLE	103
47	DREAMS COME TRUE	101
48	Valentine D.C.	98
49	生沢佑一	97
50	近藤房之助	94

1st
WANDS
803

2ND
B'z
754

3RD
L'Arc~en~Ciel
735

4TH
T-BOLAN
712

5TH
BUCK-TICK
704

6TH
Eins:Vier
662

7TH
LUNA SEA
625

8TH
黒夢
579

9TH
氷室京介
569

10TH
大黒摩季
540

GUITARIST 20

順位	名前	バンド
1st	柴崎浩	WANDS
2nd	松本孝弘	B'z
3rd	ken	L'Arc~en~Ciel
4th	五味孝氏	T-BOLAN
5th	今井寿	BUCK-TICK
6	Yoshitsugu	(Eins:Vier)
6	布袋寅泰	
8	HIDE	(X JAPAN)
8	浅井健一	(BLANKEY JET CITY)
10	INORAN	(LUNA SEA)
10	SUGIZO	(LUNA SEA)
12	田川伸治	(DEEN)
12	吉田光	(DER ZIBET)
14	HISASHI	(GLAY)
15	PATA	(X JAPAN)
15	瀧川一郎	(CRAZE)
15	星野英彦	(BUCK-TICK)
15	倉田冬樹	(FEEL SO BAD)
15	TAKURO	(GLAY)
15	SEIZI	(THE STREET BEATS)

VOCALIST 20

順位	名前	バンド
1st	上杉昇	WANDS
2nd	稲葉浩志	B'z
3rd	hyde	L'Arc~en~Ciel
4th	櫻井敦司	BUCK-TICK
5th	森友嵐士	T-BOLAN
6	氷室京介	
7	Hirofumi	(Eins:Vier)
8	大黒摩季	
9	RYUICHI	(LUNA SEA)
9	浅井健一	(BLANKEY JET CITY)
11	TOSHI	(X JAPAN)
11	清春	(黒夢)
13	吉井和哉	(THE YELLOW MONKEY)
13	甲斐よしひろ	
15	ISSAY	(DER ZIBET)
16	坂井泉水	(ZARD)
17	TERU	(GLAY)
18	ØKI	(THE STREET BEATS)
19	川島だりあ	(FEEL SO BAD)
20	矢沢永吉	

BASSIST 20

順位	名前	バンド
1st	上野博文	T-BOLAN
2nd	tetsu	L'Arc~en~Ciel
3rd	J	LUNA SEA
4th	人時	黒夢
5th	JIRO	GLAY
6	樋口豊	(BUCK-TICK)
7	Lüna	(Eins:Vier)
8	照井利幸	(BLANKEY JET CITY)
9	中村正人	(DREAMS COME TRUE)
10	恩田快人	(JUDY AND MARY)
11	HEATH	(X JAPAN)
12	沢田大司	(D.T.R)
13	栗林誠一郎	
13	大橋雅人	(FEEL SO BAD)
13	廣瀬洋一	(THE YELLOW MONKEY)
16	HAL	(DER ZIBET)
17	TAKESHI"¥"UEDA	(THE MAD CAPSULE MARKET'S)
17	内田雄一郎	(筋肉少女帯)
19	八田敦	(DEEP)
19	飯田成一	(CRAZE)

1月27日から[illegible]月2[illegible]日の間に寄せられたアンケートハガキを基にチャートを作成した。また、各パート別ランキング・ベスト20のデータを集計した人気者ランキング・ベスト30も併せてご覧いただきたい。

DRUMMER 20

順位	名前	バンド
1st	青木和義	T-BOLAN
2nd	YOSHIKI	X JAPAN
3rd	sakura	L'Arc~en~Ciel
4th	真矢	LUNA SEA
5th	ヤガミトール	BUCK-TICK
6	宇津本直紀	(DEEN)
7	Atsuhito	(Eins:Vier)
8	中村達也	(BLANKEY JET CITY)
9	菊地英二	(THE YELLOW MONKEY)
10	山口"PON"昌人	(FEEL SO BAD)
11	鈴木英哉	(Mr.Children)
12	菊地哲	(CRAZE)
13	MAYUMI	(DER ZIBET)
14	五十嵐公太	(JUDY AND MARY)
15	樋口宗孝	(SLY)
16	MOTOKATSU	(THE MAD CAPSULE MARKET'S)
17	JUNJI	(SIAM SHADE)
17	太田明	(筋肉少女帯)
17	小松広之	(DEEP)
20	YUKIHIRO	(元DIE IN CRIES)

人気者ランキング 30

順位	名前	バンド
1st	柴崎浩	WANDS
2nd	上杉昇	WANDS
3rd	青木和義	T-BOLAN
4th	木村真也	WANDS
5th	上野博文	T-BOLAN
6th	YOSHIKI	X JAPAN
7th	sakura	L'Arc~en~Ciel
8th	松本孝弘	B'z
9th	真矢	LUNA SEA
10th	稲葉浩志	B'z
11	ヤガミトール	(BUCK-TICK)
12	tetsu	(L'Arc~en~Ciel)
13	J	(LUNA SEA)
14	ken	(L'Arc~en~Ciel)
14	hyde	(L'Arc~en~Ciel)
16	人時	(黒夢)
17	櫻井敦司	(BUCK-TICK)
18	森友嵐士	(T-BOLAN)
19	五味孝氏	(T-BOLAN)
20	今井寿	(BUCK-TICK)
21	JIRO	(GLAY)
22	Yoshitsugu	(Eins:Vier)
22	樋口豊	(BUCK-TICK)
24	布袋寅泰	
25	氷室京介	
26	Lüna	(Eins:Vier)
27	宇津本直紀	(DEEN)
28	Hirofumi	(Eins:Vier)
29	大黒摩季	
30	Atsuhito	(Eins:Vier)

BACK NUMBERS

1994.11月号（創刊準備号）

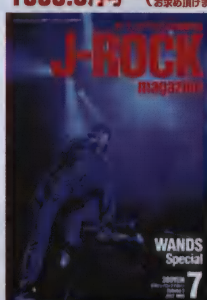
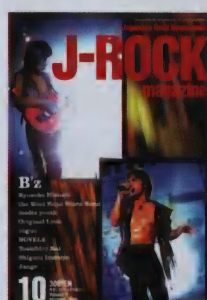
浜田省吾 / 黒夢 / PINK CLOUD / 忌野清志郎 / 憂歌団 / Eins:Vier / 佐野元春 / 大黒摩季 / 早川義夫 / GLAY / HISTORY OF X JAPAN

1995.1月号～（創刊準備号）

氷室京介 / TERU'S SYMPHONIA / DER ZIBET / 夜来香 / PSYCHEDELIX / 山岸潤史 / 矢沢永吉 / はっぴいえんど / HISTORY OF 松任谷由実

大黒摩季 / Gilles de Rais / JUDY AND MARY / 永井"ホトケ"隆 / LUNA SEA / 甲斐よしひろ / 小室哲哉 / Mr.Children / HISTORY OF BAND BOOM

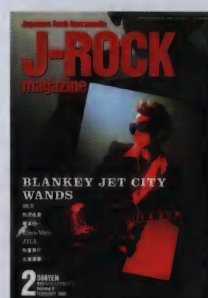
FEEL SO BAD / 大黒摩季 / vogue / BAHO / Valentine D.C. / SUPER JUNKY MONKEY / 渡辺美里 / 筋肉少女帯 / GLAY / HISTORY OF BOØWY

1995.6月号～（書店にてお求め頂けます）

WANDS / GARGOYLE / PERSONZ / Eins:Vier / THE STREET BEATS / 外道 / 近藤房之助 / SOUL FLOWER UNION / DOG FIGHT / HISTORY OF INDIES BOOM

B'z / media youth / Original Love / vogue / the West Road Blues Band / NOVELA / 甲斐よしひろ / 泉谷しげる / Jango / HISTORY OF 氷室京介

筋肉少女帯 /SOUTHERN ALL STARS / BUCK-TICK / BLANKEY JET CITY / FEEL SO BAD / GLAY / BOW WOW/ nuvo:gu / TOMOVSKY / J-ROCK GUITARIST特集

L'Arc~en~Ciel / 大槻ケンヂ / 忌野清志郎 / Eins:Vier / BIG LIFE / ハイパーマニア / BLOODY IMITATION SOCIETY / THE HARPER ST. BAND / VISUAL WORK SHOCK

1996.1月号～

T-BOLAN / 黒夢 / CRAZE / DEEP / THE MODS / CHAGE & ASKA / Chap Chimes / PIZZICATO FIVE / FIX / 斉藤和義 / 明石昌夫グループ / SIAM SHADE / BEST ALBUM特集

BLANKEY JET CITY / WANDS / SLY / 矢沢永吉 / 坂本龍一 / Eins:Vier / JILL / 氷室京介 / 大黒摩季 / THE SPACE COWBOYS / 95年度J-ROCK新聞

LUNA SEA / 黒夢 / L'Arc~en~Ciel / THE YELLOW MONKEY / THE STREET BEATS / THE MAD CAPSULE MARKET'S / RUFFIANS / ♠THE HIGH-LOWS♦ / J-ROCK BASSIST特集

94年9月号.10月号.12月号.95年2・3月号.6月号.8月号.9月号は売り切れです。

94年11月号～95年5月号は創刊準備号です。書店ではお求めになれませんのでご注意ください。詳しいお求め方法はP90をご覧ください。

J-ROCK ARTIST COUNT DOWN 50

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	23:30～	テレビ新潟	金	26:25～
岐阜放送	土	23:30～	テレビ愛媛	木	24:50～
びわ湖放送	金	18:30～	長崎文化放送	土	06:00～
三重テレビ	金	17:15～	熊本朝日放送	日	24:15～
奈良テレビ	土	23:30～	仙台放送	火	24:30～
サンテレビジョン	金	17:00～	テレビ静岡	金	25:05～
テレビ和歌山	金	17:00～	福島テレビ	木	24:50～
岩手めんこいテレビ	水	24:50～	北陸朝日放送	日	24:10～
秋田朝日放送	日	23:55～	山口放送	土	25:25～
群馬テレビ	木	23:45～	日本海テレビ	木	24:45～
北日本放送	日	24:45～	沖縄テレビ	木	24:45～
テレビ埼玉	金	23:30～	高知放送	水	24:45～
千葉テレビ	金	23:30～	テレビ神奈川	日	23:30～
長野朝日放送	日	23:55～	青森放送	金	25:15～
鹿児島読売テレビ	土	25:35～	大分朝日放送	土	25:55～
広島テレビ	水	25:15～			

ロック音楽ROOTS

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	24:00～	長野朝日放送	日	24:25～
岐阜放送	土	24:00～	テレビ新潟	月	25:35～
びわ湖放送	金	24:30～	テレビ愛媛	月	25:20～
三重テレビ	火	24:35～	長崎文化放送	金	24:25～
奈良テレビ	土	24:00～	熊本朝日放送	土	24:30～
サンテレビジョン	金	24:30～	青森テレビ	日	24:35～
テレビ和歌山	土	24:10～	テレビュー山形	日	25:15～
岩手めんこいテレビ	木	24:50～	テレビ山梨	火	24:35～
秋田朝日放送	土	25:10～	テレビ高知	土	25:26～
群馬テレビ	土	24:00～	大分放送	月	24:30～
北日本放送	金	25:15～	琉球放送	日	24:50～
テレビ埼玉	金	24:00～	日本海テレビ	金	25:15～
千葉テレビ	金	24:00～	南日本放送	月	25:00～
静岡第一テレビ	月	25:00～	札幌テレビ	日	25:15～
テレビ金沢	日	25:15～	福井放送	火	25:15～
山口放送	土	25:55～			

ため息のかわりに吹く笛。floating system #0003 アポ "apo"

artist:YOSHIHIRO KAI photo:MAKOTO KANEHARA

次号予告 J-ROCK magazine 96年5月号は、3月27日発売。登場予定アーティストは、グレイ、X ジャパン、佐野元春、甲斐よしひろ、筋肉少女帯、ツインザー他。ご期待ください！

大募集

■J-ROCK magazineの「INDEPENDENCE」コーナーでは、オリジナリティーを持った意欲あふれるインディーズのバンドやソロアーティストを紹介しています。我こそはと思う人は、編集部まで音源、プロフィール、写真、ビデオなど活動内容が詳しく分かる物を送って下さい。取材をお願いする場合は、こちらからご連絡します。推薦もOKです。

■J-ROCK magazineでは、新企画『PLAYERS FILE』を構想中。この企画は毎月1アーティスト（バンドの場合はその中の一人）に注目し、編集部や読者でそのアーティストを追求しようというものです。そこで今月もアーティストに対する読者の意見を大募集！「この人こそは…」と自分が思うアーティストの作詞や作曲、プレイやステージングなどに対しての具体的な意見を送って下さい！「○○という曲のこの音、この演奏がスキ」「○○という曲を聴いて、考えが変わった」という素直な意見から、「○○という曲のあの部分は一体どうやって弾いているのか。歌っているのか」などの疑問までアーティストに対するものなら何でもOK。投稿の際は、ペンネームを希望する人も、必ず住所・氏名・年齢を書いて下さい。

INFORMATION

投稿及び作品の持ち込み方法

■「J-ROCK magazine」では、音楽にこだわりを持ったいろいろな人達が「だれかに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」「ネタ」「意見」「批判」などを発表する場になりたいと考え、VOICEというコーナーを設けています。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、アーティストへのメッセージなど、どのようなスタイルでもOK。このページ下のあて先まで本音を投稿してください。採用させていただいた方には、CD券（3000円分）を差し上げます。

【投稿規定】

◇文字数：1600字程度まで。

◇原稿用紙での投稿を基本としますが、フロッピーディスク（MS-DOSファイル）、FAXでも構いません。

◇ペンネームも可能ですが、必ず住所・氏名・年齢・タイトルを明記してください。

■視覚的表現から音楽へのこだわりを伝えたいというカメラマン、イラストレーター、芸術家（平面・立体）の持ち込み歓迎します。事前に電話連絡の上、編集部まで作品をご持参ください。

定期購読＆バックナンバーの申込方法

■本誌の定期購読を希望される方は、とじ込みの郵便払込用紙に必要事項（郵便番号・住所・氏名・電話番号は必記）を記入の上、最寄りの郵便局よりお申し込みください。1年間（12冊）、3300円（税・送料込み）でお届けします。

■本誌88ページの「J-ROCK magazine」バックナンバーを希望される方は、下記注意事項をご覧のうえ、とじ込みのバックナンバー専用払込用紙に必要事項を記入し、希望冊数分の本代と送料の合計金額を最寄りの郵便局より振り込んでください。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、返送料を差し引いて小為替または切手で返金させていただきます。ご了承ください。

※注意

◇本の価格は、94年11～95年4月号は1冊200円、95年5～96年3月号は1冊300円です。（売り切れもあるのでご注意下さい）

◇送料は、1冊270円、2冊390円、3～5冊700円、6～12冊950円です。

◇希望する号数（必ず何年何月号かを記入）・冊数・郵便番号・住所・氏名・電話番号を必ず振込用紙に記入してください。

◇95年6月号以降は、書店でもお求めになれます。それ以前のバックナンバーは、専用払込用紙でのみお申し込みができます。

ロック音楽ROOTS・J-ROCK CD 50投票方法

■本誌88ページ掲載の各放送局で放映中のTV音楽番組「ロック音楽ROOTS」（J-ROCK magazine提供）では、番組に対するご意見・ご要望をお待ちしています。とじ込みハガキにご意見・ご要望・住所・氏名・年齢・職業を明記の上、50円切手をはってお送り下さい。毎月抽選で50名様に番組オリジナルグッズを差し上げます。

■「J-ROCK magazine」はKBS京都をキー局として本誌88ページ掲載の各放送局で放映中の音楽番組「J-ROCK Artist Count Down 50」に協力しています。この番組は、新譜の売り上げチャートではなく、皆さんの投票によって決まるアーティストの人気ランキングを、毎回発表していく番組です。読者の皆さんも番組づくりに協力してください。投票方法は、官製ハガキに投票したいアーティストを1組と、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「J-ROCK CD 50」係宛お送りください。投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。

訂正

■96年3月号において以下の誤りがありましたので訂正します。（誤→正）

P7・P9 『LUNATIC TOKYO Vol.2』→『LUNATIC TOKYO』

P37「孤独の王様」→「孤独な王様」

株式会社ジェイロックマガジン社・編集部

大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル8F

〒542 TEL.06-214-1751 FAX.06-214-1761